
ゼロの使い魔の世界に英雄が生まれるようです

戸井万

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔の世界に英雄が生まれるようです

【Nコード】

N8107T

【作者名】

戸井万

【あらすじ】

ハルゲニアに元英雄が転生

序章：第一話：エイブラハム爆誕（前書き）

処女作です

評価お願いします

Aufmerksamkeitsdefizits
syndrom. Bitte kommen Sie
hierher. Browser zur?
ck

序章：第一話：エイブラハム爆誕

俺は確かに死んだはずだった、俺の名前はエイブラハム・ヨシユア・クルスト：世紀の大天才科学者or技術者にして剣聖と呼ばれた男だった。

自慢になるが俺の頭脳は見ただけで全てを数値化し計算し尽くす事が出来た、つまりは具体的に未来が見えたり何かを作ろうと考えたらそれが頭の中で出来てしまう程度だったんだが：

「だあぶ〜あぶぶぶつぷあ〜（なんで俺赤ん坊になつてんねん）」

あれだよな、俺世界を平和にした後平和にするために繰り返し繰り返した殺人の罪を清算する為に娘を騙して俺と戦わせて…死んだよな、確かに娘の剣は俺の心臓を貫いたはずだ。

「お！エイブラハムが何か言ってるぞゼノア！」

若い男がキラキラした目で俺を見てる、地球の言語じゃなかったがちよつと聞いただけでマスター出来た言葉によれば…ここはハルゲニアと言う星でトリステインと言う国のタルブ辺境伯に俺は生まれたらしい。

「パパって呼ぶの？ママって呼ぶの？」

これまた若い女がこちらを期待した目で見て来ている…うん、その気持ち解るよ。

内心苦笑しながら俺は口をモゴモゴさせる、両親らしき人物はワクワクしている…期待に答えてやるか。

「まあま〜、ぱあぱ〜」

わつと二人が両手をあげて喜んだ、そして二人で俺を抱き上げた。「エイブラハムはゼノアに似て賢いなあ！」

「貴方に似てとても可愛い顔をしているわよ！間違いないいい子になるわ！」

俺を褒めてるのが二人で褒めあっているのかさっぱりとわからないうが…まあ少なくとも俺は愛され過ぎているらしい、嬉しい事だ。

……んーどうでもいいが腹減ったなあ、ちよいと訴えてみますか。
「ほ、ほぎゃあ…びえええええん！（おーい、母ちゃんよお、腹減ったよ！おっぱいおくれ）」

どうやら泣き声になるようで二人共慌て始めた、あーその行動解るよ、赤ちゃんって言葉話さないから何求めているかわからないんだよな、俺も苦労したよ。

「おしめ…じゃないわね。おっぱいかしら？」

「ほぎゃああああああん！（当たり前だぞ母ちゃん、腹減ったからなるべく早くおくれ！ハリーハリーハリー！）」

母たるゼノアは少し困ったような顔をして自分の夫を見た。

「エルドリツ子様、乳母はどこに？」

俺の親父の名前はエルドリツチと言うらしい、いい名前だ。

「彼女は今実家に帰っている、君があげるしかあるまいね」

それを聞いたゼノアは頬を染めながら胸を出して俺の前に出した。

「ふえっ…はむう（わーい、いただきまーす）」

口に乳頭を含んだ俺は嬉々として母乳を吸う、やはり赤ん坊だからか味はしない…たらふく飲んだ後は心地よい睡魔が俺を襲って来た、なんで俺は記憶を保ったまま生まれたのかわからないが…とりあえずしがらみから逃れて俺は平和に生きようと思っ…むにゃむにゃ…

それからと言う物、俺はすくすくと成長し五才になった、親父から杖を貰ったし家庭教師も今日来るらしい。

部屋でレビテーションを使ってふわふわ浮いているとドアがノックされた。

「鍵は空いてるよ、どーぞ」

返事を返すと四人の魔術士…メイジだっけか…が入って来た。

「今日から坊ちゃんまに魔法を教える家庭教師でございます、早速ですが今日は坊ちゃんまの属性を知りましょうね」

全員が俺より五つ程上の女性だった、市井のメイジを呼んだらしいが…大丈夫なのか？それ…さて俺が努力している場面を見るのも馬鹿馬鹿しいであろうし結果だけ教えようか。

俺は全ての属性にとんでもなく高い適正があるらしい、と言うか俺の頭脳は全ての魔法の使い方を教えてくれた、ついでに俺は前世の魔力を引き継いで生まれてきたらしく、スクウェアアスペルをばかすか撃つても魔力切れを起こさなかった。

家庭教師達は肩を落として帰って行った、数年かかる内容を一日どころか数時間でマスターしてしまっただけらしい。

「お前はなんて優秀なんだエイブラハム！」

そして現在俺は親父に抱きしめられほお擦りをされていた、不精髭が痛いぜ。

「やめてくれよ、髭が痛いぜ」

「そんな口調も可愛いぞエイブラハム！」

親父は二時間程離してくれなかった、飯どきになっても頬が痛い…

「大変ですねエイブラハム様」

俺の部屋と一緒に食事を取っているメイド、名前は確かシエスタだったかね、彼女はニコニコしながらそんな事を言っている、俺より3つ年下の彼女は小さい口で一息懸命パンをかじっている。

「そんな事はない…と言いたいけどな、まあ俺は愛されているんだよ」

母は俺が4つの時に病気で他界した、優しい母だった……だがそれだけだ…人の死に慣れ過ぎた俺は泣けなかった。

「エイブラハム様はおとなですね、シエスタも見習いたいです」

まだちよつと舌つたららずな口調でニコニコ笑うシエスタ、妹が出来たみたいだ。

「よしシエスタ、飯食い終わったら俺に着いてこい！遊びに行くぞ！」

俺がそう言うとシエスタはパアツと顔を明るくさせて急いでパンを口に詰め込み始めた、食べるのが遅いシエスタなりの気遣いか、それとも遊びへの執念か。

というわけで俺達は屋敷の裏門からこっそり外に出た、俺は杖を腰布に挿し背中に授業で作ったミスリルのショートソードを背負っている、今日はちょっと遠くの森まで遊びに行くつもりだ：口笛を吹いてまだ子馬の愛馬を呼ぶ。

シエスタを愛馬に乗せて俺はシエスタの後ろから手綱を握り馬を走らせる。

「わぁ！凄く早いですエイブラハム様！」

凄く喜ぶシエスタの頭をぐりぐり撫でると自分の頭を俺の胸に預けてきた、そんなこんなしている内に森が見えてきた、馬を近くの木に止めてシエスタを下ろす。

「さあ探検に行こう！」

「はあい！」

俺の言葉にノリよく返事してくれたシエスタに感動して森の中に入る、昼間でも薄暗い森は恐怖を抱かせる。

「ち、ちよっと怖いですエイブラハム様……」

シエスタがピツタリとくっついてくる、その姿に思わず微笑みながら歩を進める。

30分程進んだらどうか、異臭を俺の鼻が感知した。

「シエスタ、身を低くして俺の後ろに」

「はいっ！」

「しっ！静かに……！」

シエスタは自分の口を両手で塞いでおとなしく俺の後ろに隠れた、茂みから顔を出すとそこには豚のような魔物が居た、なんじゃあや。

「はわわ……オークです……」

「…なにそれ？」

「知らないんですか…！？私達みたいな子供が大好きな魔物ですよ…！」

つまりは子供を食べる魔物らしい、人間の子供なんざ食べるとこ少ないと思うがね。

「どれ位強いんだ？」

「大人が十人がかりでも殺されちゃいます…逃げましょうエイブラハム様！」

成る程な、下手に関わるよりは逃げた方がいいとシエスタに賛同して身を引こうとしたが急に風向きが変わったのだ、風下だったこちらは風上になっていた

「ブキーーーーー！」

豚のような鳴き声をあげて巨体を揺らしながらオークがこちらに向かってくる、俺は覚悟を決めて背中の中のショートソードを引き抜いた。

「走れシエスタ！」

「え！？え！？？」

「早く！」

「は、はい！」

シエスタが走り去ったのを背中越して感じて深く息を吐く、完璧な明鏡止水ではないが一応形にはなっている…さて筋力の劣る体でどこまで出来るのか。

こちらに接近したオークは木をそのまま削ったような巨大なこん棒を振り上げた、その隙を利用して奴の懐に入り袈裟に剣を振る、オークの固い皮膚を切り裂き中の脂肪と血を腹から引きずり出したが致命傷には至っていない。

「プギヤアアアアアアア！」

痛みで足を踏み鳴らしている、ドシンドシンと俺まで踏み潰されそうになり一歩後ろに下がる…剣の短さと俺の力の無さで致命傷を負わず事は出来ない。

ならばと刺突の構えを取り相手の挙動を待つ、痛みが収まったのか怒りに染まる瞳をこちらに向けてきている、奴はこん棒を思いきり振り上げて振り下ろした、右に倒れ込むように転がり威力を殺すように回転して立ち上がり振り下ろされ地面に減り込んでいるこん棒に飛び乗り、そのままオークの腕を駆け上がる。

「くたばりやがれ豚野郎！」

思いきり口の中に剣を突き刺すとオークは力が抜けたように前に倒れ始めた。

「うわ！？おい、ま、待て！」

剣を引き抜こうとしたら肉質が硬くなつたのか引き抜けない、そのまま俺はオークと一緒に地面に叩きつけられる事となった。

「ぐっ…いてて、ちきしょう…」

悪態を尽きながら覆いかぶさるオークの死体からはいずり出る、全身打撲と言った所かな、骨は折れていないのが幸いである。

杖を引き抜いて自分に治癒魔法をかける、痛みが引き筋肉に貯まっていた乳酸が抜けていくのがわかった、深々とため息を吐く…死なずに済んだと、オークの頭を持ち上げなんとかショートソードを引き抜き背中に背負い直す。

「うわーん！！離して！！離して！！！」

「シエスタ？」

そこまで遠くない場所からシエスタの悲鳴が聞こえた、何があったんだ？

…いやそもそもオークって単体で生活する生き物なのか？ それならば警戒する必要はないはずだ、シエスタが恐怖を抱いていたと言ふ事は恐らく村を襲う為に群れる習性を持っているはずだ。

つまりはシエスタは捕まったのだらう、声が聞こえた方向に突っ走る、四の五の言っている場合ではないので杖を腰布から引っ張り出して魔法の準備をする。

「シエスタ！」

声が聞こえた場所は投棄された古い寺院でシエスタは沸騰してい

る鍋の上に素っ裸で縛り上げられていた、シエスタが泣きわめく姿を見てオークは楽しんでるのだろう。その紐が切られてシエスタの体は重力に引かれ鍋の中へと…

「させるか！錬金！！」

杖を振って鍋を砂に熱湯を水に、火を消して薪を干し草に変えてやった。

シエスタは柔らかい干し草の中に落ちて見えなくなった、8匹のオーク達がこつちを見て歓喜の鳴き声をあげている…ご馳走が増えたってか？ ハッ！俺は煮ても焼いても食えない奴なんだよ！

「ファイアーボール！エアカッター！ウォーターブレード！アースランス！」

火の玉が一匹を美味そうに焼いて風の刃が一匹を半身に下ろして水の弾丸が一匹を寺院の中まで吹っ飛ばし土の槍が一匹を串刺しにした。

オーク達がジリジリと下がり始めた、今頃力量差を感じたのだろう、俺が力を込めて【本気】で睨むとオーク達は悲鳴をあげながら逃げていった。

「…シエスタ！」

オーク達がいなくなったのを見計らって干し草からシエスタを引っ張り出す。

「エイブラハム様！怖かったです…凄く怖かったです…」

「あ、ああ…すまん」

急に抱き着かれた、ビンタの一発でもと覚悟していたのだがどうやら杞憂に終わったようだ。

その後シエスタに服を作ってやり俺達は帰路に着いた、家に帰ったら親父にこっぴどく怒られた…まあ当たり前だよな、今回の探検は散々な結果に終わったがまたどこかに行ってきたと思う。

第二話・お友達（前書き）

もじけえ

第二話：お友達

あれから三年が立ち俺は八歳になった、俺はやはり研究者としての性なのか研究に没頭するようになった。

世間ではそれなりに有名だ、エイブラハム・ヨシユア・クルスト・ド・タルブの薬はよく効いてくれると、そして俺が今作っているのはヴァリエール家次女への誕生日プレゼントたる薬だ。

「よっ、でーきたっつと」

出来た錠剤を瓶に突っ込み魔法で包装する、薬の名前は万能薬、名前の通りウイルスや細菌などの菌類が引き起こす病気ならなんだって治せる薬でイチゴ味だ。

イチゴ味、ここ大事な。

「兄様！」

部屋の扉が音を立てて開きそこからシエスタが走ってくる。

シエスタ、俺の妹になった女の子だ、俺がタルブ辺境伯の息子としてのメイジの才能をこっそりとくれてやったらシエスタはちよつとした癩癩でそれを暴走させた、それをみた俺の親父はシエスタを養子に迎えたと言っ訳だ。

親父の辺境伯としての血筋、母の公爵としての血筋の力を得たシエスタは現在炎のドットである、何故才能をくれてやったかと言うと俺から見れば血筋の力は邪魔しかしないのだ、違う魔力同士は反発しあう為俺が向こうから持ってきた魔力と生まれ持った魔力は反発しあっていた、邪魔だからシエスタに押し付けた訳だ。「兄様兄様、遊んで下さい！」

あの一件からやけに懐かれた、それでも妹分が妹になっただけでさして変わらない、俺は膝を叩いて立ち上がる。

「よし、街にでも行くか！」

「わーい！」

ピョコつと俺の背に飛び乗るシエスタ、それを見ながら苦笑しつ

つ俺は街に向かう…街と言っても人口1200人の城下だ。

屋敷から出ると石畳の道が広がり両脇には店が立ち並んでいる、俺とシエスタはよく適当に街をブラブラして困っている人が居たら無償で助けていた。

「おお！エイブラハム様にシエスタ様だ！」

「おう本当だ、エイブラハム様ー！妻の病気はすっかりよくなりました！」

「わしの足もこの通りですじゃ、感謝しますぞ！」

いやはや大人気である、色んな人から頭を撫でられおやつを渡されてしまった、街に困っている人はいなかった。なので近くの川まで歩きそこでおやつにする事にした。

二人でおやつを食べて河原で昼寝をして屋敷に帰る、いつもの日課だ、前世で一番欲しかった物…もしかしたら神は本当に居るのかも知れない。

そんな日課を三日程熟していたらとうとう誕生日になってしまった、窮屈な服に身を纏い馬車に乗り込みヴァリエール領に向かった。

「なあエイブラハム」

「最近ちよつと老けたんじゃないかと思う親父が話しかけてくる。」

「ん？なんだい親父」

「俺は窓の外の景色を見ながら答える。」

「今の暮らしは楽しいか？」

「何言っているんだよ、最高に決まっているじゃないか。親父が居て妹が居て…遊びに行つて帰つたらおかえりつて言ってくれて一緒に飯を食つて…家族が居るって幸せ以上の幸せであるか？」

「そういと親父はそうかと言ってニヤリと笑った。」

「他愛もない会話をしている内にヴァリエール家に着いた、なんと

言うか：でっけえ家だった：中に入ると親父はそうそうに挨拶に行
ってしまい取り残された俺は仕方なく次女を探す事にした。

たしかピンク色の髪の毛してるって聞いたな、回りを見渡すとす
ぐに見つかった、大量の貴族の子供に囲まれて挨拶されていた。

よし面倒臭い、プレゼントをさっさと渡して俺はどこかに退避し
よう。

「ほら、どいたどいた。」

回りに群がる貴族の糞餓鬼どもを押しつけて次女の前まで行く、
おや随分将来美人になりそうな顔だ。

「はじめまして俺エイブラハム」

そう言っ頭を下げる。

「はじめまして、私はカトレアです」

彼女も同じように挨拶した、俺は手に持っていた小さな箱をカト
レアと名乗った幼女に渡す。

「よろしく、はい、誕生日プレゼント、っわけで誕生日おめでと
う、一歩大人になったね、やったね。…じゃ」

義理は果たしたからとつと退散する、あまり長居すると面倒臭
い事になりそうだ。

「えっと、あの…」

カトレアが何か言う前に俺はさっさと外に出てしまった、外にあ
る大きな池の湖畔に座り込み欠伸をする、もう夜だ：八歳のお子様
には辛い時間である。

ゴロリと地面にねっころがると先程見た顔がこちらを覗き込んで
いた。

「うわっ！？カトレア！？」

「はい、こんばんは」

跳び起きる俺にも驚かずニコニコとカトレアは笑う、なんなんだ
？ カトレアの両脇には金髪の子ツそうな少女とカトレアを小さく
したような幼女が居た。

「……ダレ？」

急な展開について行けずに疑問符を出す。

「紹介するわね、こちらが私のお姉様であるエレオノール姉様」

紹介されたエレオノールとやはらはそっぽを向いて踏ん返り返っている。

「こつちが私の可愛い妹のルイズよ」

ルイズと呼ばれた方はピヤツとカトレアの背に隠れてしまった。

「…で、なんか用？」

そろそろ面倒臭い俺はぶっきらぼうにそれを聞く、カトレアが口を開く前にエレオノールがスツと前に出てきた。

「貴方がカトレアに媚びらずにさっさとここに来たのを見て興味があつたのよ」

見た目もキツけりゃ口調もキツい、将来嫁の貰い手に困りそうだ。

「…で？」

もう面倒臭いのでゴロリと寝る、今日は月が綺麗だ。

「だから友達になってやるって言ってるのよ！」

エレオノールが声を粗げた、俺なんか悪い事したっけ？ いやしてないよな。

「あつそ、よろしくね〜つと…ふわああ…」

大口を開けて欠伸をする、やつぱり眠い。

「きいいいい！どこまでも馬鹿にして！こつなったら決闘よ！ごめんなさいって言わせてやるわ！」

何が気に入らないのか怒り狂いながらエレオノールがこちらに杖を向けてきた、自分も腰布から杖を引き抜き二三度杖を振る。

「エアステイル」

呪文を唱えるとエレオノールの杖が俺の手に飛んできた、それを受け止めて再び欠伸をする、オリジナルスペルのエアステイルだ、相手の手から風で武器を取り上げる魔法である。

「…くつ！覚えていなさいよ！」

「え？何を？」

「……うえーん！馬鹿ー！！」

からかい過ぎてエレオノールはどこかに走り去ってしまった、うーん、こりゃ後で謝らなきゃな。

「ね、姉様に勝った…」

ルイズと呼ばれた女の子が呟きながら近寄ってきて俺の手を掴んだ。

「お兄様と呼ばせて下さい」

なんでやねん。ルイズに手を離して貰って立ち上がる、服に着いた芝生を払って二人を見る。

「エレオノールちゃんはどこに行った？」

「恐らく自室よ、でもどうして？」

カトレアが不思議そうな顔で俺を見てくる。

「謝りに行っただけだよ、流石にやり過ぎた」

二人とも酷く驚いたような顔をしていた、なんだよ、俺が謝るのはおかしいってか？ 人間誰でも間違いを起こす、間違っただけを傷つけたらごめんなさいって謝る…これが出来てこそ一人前の人間であるしかっこよさでもあり誇り高い行為でもある。

悪い事をして謝る事をせず腐れる奴はプライドが高いんじゃない、低いのだ、捨てられるプライドがないから必死に虚勢を張るしかない、男ならあっさり捨てられる位の余分なプライドは持つておくべきだ。

「それじゃ誠心誠意謝罪に言ってくる」

二人を尻目に走り出す、謝るなら謝るで早い方がいい、時間が経てば経つほど謝り難くなるしな。

ハルゲニア語でエレオノールと書かれた部屋までたどり着いた、息を吸い込み扉をノックする。

「…ダレ？」

「エイブラハムだ」

「帰って」

やはり会いたくないようだ、それはそれで悲しいな。

「さっきはやり過ぎた、ごめん、改めて友達になりに来た」

「…今開けるから待つてなさい」

扉の鍵が外されて赤い目をしたエレオノールが怖ず怖ずと出てきた。

俺はエレオノールに向かって手を伸ばす。

「なに？」

「握手で仲直りしよう」

そういつて笑うとエレオノールも釣られて笑ってくれた、この子も綺麗な顔をしている。

エレオノールがゆっくり出してきた手をとって上下に軽く振る。

「これで恨みつこ無しな、俺はもう帰るけどこれからはいつでも皆でタルブまで来てくれよ、歓迎する」

「…うん、私、貴方が婚約者ならよかつたわ」

「五つも年下の子供に何を言っただ、親父が俺を探しているみたいだから俺は帰るよ」

「うん、バイバイ」

お互い手を振りあつて別れる、門までエレオノールとカトレア、ルイズは見送りに来てくれた。

「…もう三人の女性を口説いたのか？エイブラハム」

親父がニヤニヤしながら尋ねてきやがった。

「友達が出来たんだよ」

それだけ答えて俺は新たに出来た友人を馬車の窓から眺めていた。

第三話：カリーヌとカトレアと婚約者と（前書き）

その内R - 18も書くかも知れない、アヒンアヒン言わせるけんね、
サイトを…（嘘）

感想やレビューもご自由にお願ひします、出来るだけお返事させて
いただきます

第三話：カリリーヌとカトレアと婚約者と

非常に気まずい、すっごく気まずい、俺は自分の家のドアを開けて玄関に立っている、何故こんな所に居るかと言つと遊びに行こうと玄関に歩いていたら来客があつたよつで呼び鈴がなつた。

正直面倒だつたが来客なら出なくてはいけないので扉を開けたら… ヴァリエール三姉妹の親御さん、ヴァリエール公爵とその麗しの奥方カリリーヌが立っていた。

「……何か御用で？」

背中に隠れて震えているシエスタを庇いながら尋ねてみる、半端ない威圧感だ。

「君は確か… ちょうどよかつた、カトレアに渡した薬を作つたのはダレかね？」

「俺ですけど何か御用でも？ 追加のご注文ですか？」

俺が作つたと聞くと公爵は目を丸くした後俺の両手を掴んだ。

「君が… 君がカトレアを助けてくれたのか！ 礼を言う！」

俺の頭には盛大にハテナマークが浮かび公爵の目には大量の涙が浮かんでいた。

事情を聞く所によるとカトレアは不治の病に生まれつき犯されていたよつで長くは生きられない体だつたよつだ、それが俺のあげた薬で一発で完治。

わざわざ御礼を言いに来てくれたよつだ。

「おや公爵、今日はいかがなされた？」

親父が驚いたよつに走つてきた。

「エルドリッチ！ 君の息子が我が娘をだな…！」

親父同士でやいのやいのと話し始めてしまった。

てつきり俺はエレオノールを泣かした事何かしらお叱りを受けるのかと思つた。

「……………」

「…ん？うおっ！？」

ボーツとしていたらカリー又がしゃがみ込んで俺を見ていた、思わずびっくりしてしまっただが…よく見るとカリー又つてとても三児の母には見えない、俺の頭脳だつて肌年齢は10代つて弾き出しているしカリー又自身もどうみたって20代、いや10代とでも言い張れるレベルだ。

「な、何か？」

「…貴方随分強い魔力を持っているのね、私以上…ルイズ以上かしら」

…一発で隠蔽された魔力を見抜きやがった、確かに驚いて一瞬隠蔽が疎かになっただが…一瞬で見切ったのか？

「…ちよつと戦いましょう、私が認めれば…そうね、カトレアをお嫁にあげましょう」

立ち上がったカリー又は朗らかにそう言い放った、何故そうなる。

「断る事は…」

「不可だ、エアハンマー」

屋敷の外まで弾き出された、杖を引き抜いてある呪文を唱える。

「ウォーターブレイド！」

杖の回りに水が集まり剣と成した、風水のラインスペルだがこの剣は鋼鉄だろつと両断する、今は筋力がないから苦肉の策だ。

「ほう、剣か、ボクも剣は得意だ。ブレイド」

カリー又さん口調変わってはりますよ。

カリー又はブレイドの魔法を唱えてこちらに肉薄してくる、だがそれはミステイクだ、カリー又と魔法合戦をやったら俺は負けるだろつ…だが剣なら別だ、何故なら俺は剣聖…剣の技術においては右に出る者はいない。

あっさりとカリー又のブレイドをいなす、カリー又はキョトンとした後フライで素早く距離を取った。

もうちつと体がデカければ今ので仕留められたがこの体じゃ無理だ、気を取り直して下段に剣を構える。

「エアハンマー、エアカッター、エアカッター、エアカッター」
マシンガンのように風魔法が飛んでくるがそれを全て叩き落とす、
次の詠唱までが早すぎて近寄れない…ちっと無理するしかないか？
「しっ！地を這う蛇！」

地面に剣を叩きつけると地を這う蛇のようにクネクネと曲がりながら真空刃がカリリーヌに近寄っていく。

「甘い、錬金」

鉄を盾にされて地を這う蛇はあっさり無効化された、ちくしょう
パワーが足りねえ…ウォーターブレイドを解除して地面に杖を向ける。

「クラツシュ！」

地面が爆発して視界を遮った、水風土炎のスクウエアスペル、水素爆発の魔法だ。

命中率に難があるのと無風状態じゃないと使えないのが欠点の魔法だ、だから地中で爆発させて目眩ましにするか室内で爆発させるかの二択しかない。

「甘い」

そして俺の苦肉の策はあっさりと竜巻に吹き飛ばされてしまった
…しかし砂埃が晴れた後俺はどこにもいなかった、何故なら…

「ぎゃあああああああ！？」

隠れていた地面ごと竜巻に吹き飛ばされていたのだった…！

だけどこのままじゃ終われない竜巻が切れたのを見計らい空気を錬金してナイフにする、カリリーヌはキョロキョロと辺りを見渡しているが俺はそんな所にいない、ナイフを逆手に構えて上空から強襲する、影に気付いたのか上を見て俺と目があつた。

躊躇わずナイフを振る！…かわされた…

「ぐあっ！」

そのまま地面に叩きつけられて俺は動けなくなった。

「…見事よエイブラム、私に一撃当てるなんてね」

カリリーヌの首に一本の赤い線が入り血が垂れる。

「約束通り貴方をカトレアの婚約者とするわ」

そう言ってニッコリ笑うカーリヌ、俺はいや、別にいいつすと言おうとしたが…言えずに意識を手放した。

それから三日後、俺とカトレアは正式に婚約する羽目になった、カトレアは凄く不服そうである。

そらそうだ、数える程しかあつてないのだから、あの程度の出会いで惚れられる訳がないのだ。

「はぁ…すまないなカトレア」

「…気にしてないわ」

ものすごく気にしてらっしゃる。

俺だつて望んで婚約者になった訳ではないのに…っ！カーリヌ強引過ぎるだろ常識的に考えて。

「ふう…ま、よろしくなカトレア。愛想が尽きたらさっさと見え、婚約解消するから」

ため息を着きながらそう言つてやるとカトレアはむっとした表情を俺に見せた、なんなんだよ。

「貴方私をどう思つてるの？」

「…質問の意図がわからんのだが…」

「貴方私を女としてどう思つているの？って聞いているの」

笑い飛ばしてやろうかと考えたが真剣な表情に押されて考える事にした。

現状を把握しようか、俺八歳、カトレア九歳…まあ俺も今年で九歳だから同年として……

………言える事は二つ三つだな。

「カトレア、俺もお前もまだ子供だ、ぶっちゃけ俺がカッコイイ男に見えるか？」

「…どつちかと言つと可愛いわね」

これ位の歳だとみんなそうだとツッコミたくなつたが抑えて咳払いをする。

「決断するにはまだはええよ」

カトレアは少しだけ考えた後渋々頷いてくれた、しょうがない…聞きたかったであろう言葉を言つてやるか。

「…俺は将来カトレアは美人になると思うぞ、絶対な、お前の親父さんもお袋さんも美形だしな」

そう言つとカトレアの顔はまるで花が咲くようにペアと明るくなつた。

「そう、フフフ」

やけに嬉しそうだ、どうして古今東西南北女っつーのは褒められるだけでここまで喜べるのだろうか。

気色悪い笑い方をしているカトレアから三步離れて紅茶を飲む、この紅茶安物にしては美味しいな、ついでにスコーンをサクサクと…

「おお、流石シエスタ…美味しいぞお焼き加減が完璧だ。」

「お兄様…婚約したつて……婚約したつて本当なんですか!？」

ドアを吹き飛ばさんばかりの威力で開けて入ってきたのは噂…ではないがシエスタ、表情は鬼気迫っている。

「成り行きな、どうしたシエスタ」

「お兄様の…」

「ん？」

なんだかとても嫌な予感が…

「お兄様のスケコマシ!!ファイアーボール!」

「ヒデブツ!？」

ああ哀れ、俺は何がなんだかわからないまま外まで吹き飛ばされたのだつた、なんだか今日はあの夫妻のせいについてない気がする。

まあ…いつか報われる日が来るだろうさね。

間話：ステータス（前書き）

エイブラハム達って今どれ位強いのか？
てな訳で表記してみました

間話：ステータス

エイブラハム・ヨシユア・クルスト・ド・タルブ

能力値（幼年期）：クラス：説明

筋力：E：子供らしい筋力、野犬に負ける

耐久：C：馬並の体力の多さ、フルマラソンを楽に完走出来る

敏捷：E：子供らしい足の早さ、子供同士なら1番！

魔力：A：魔王クラスの魔力の持ち主

技量：：千年に一人生まれるかどうかの天才が決死の努力にて手に入れた技量、世界を楽に救える

幸運：F：不幸を呼び込む程の運

所持スキル：クラス：説明

神の頭脳（真）：：神に与えられし頭脳は万物の事象に対し全てを理解し支配する

ピースメイカー：：封印されしスキル、解かれれば平和を生み出すであろう

剣聖：S：全盛期より大きくランクダウンした技術ではあるが剣を振れば空を切り裂き山をえぐり海を割るが魔剣聖剣クラスが必要

安楽死の心得：A：敵を苦しませずに殺す心得

必殺の心得：S：敵を逃がさずに殺す心得

不屈の心：B：絶望的な状況になればなるほど燃え上がり筋力がアップする

勝利への戦略：：敗北必至の戦争でも必ず勝利するスキル

ニヤンリンガル：D：動物と意思疎通が出来る

地獄からの帰還：：これにランクはない、一つの人生で一度だけ生き返る事が出来る

騎乗：B：馬やら車ならプロ並に乗れる技術、二人乗り対応

戦闘続行：：死体となっても敵がいなくなるまで戦い続ける事が出来る

一家に一台：C：人並み以上になんでも出来る

ヒーロー：A：友人恋人家族からの救援サインに必ず間に合うように駆け付ける

シエスタ・ド・タルブ

能力値（幼年期）：クラス：説明

筋力：F：幼児並の筋力

耐久：F：幼児並のスタミナ

敏捷：E：子供並の足の早さ

魔力：C：一人前の魔力量

技量：E：なんの変哲もない子供程度の技量

幸運：C：それなりに運がいい

スキル：クラス：説明

タルブの血筋：A：火の魔法に向いており魔力量も豊富

メイドの心得：C：お世話の心得、優秀なメイドである証拠

侍の魂：D：大分薄れてしまったが彼女の魂には侍の力が宿っている、刃物の扱いが最初から上手い

悪食：B：腐りかけた物や痛んだ物を食べてもお腹を壊さない

理解者：A：物分かりがよく聡明である

兄萌：A：優しい優しいお兄ちゃん、いつも強くって優しくってかつこよくて憧れだった、けどいつのまにか妹ではなく女として意識

するように…禁断の関係を好むスキル

カトレア

能力値（幼年期）：クラス：説明

筋力：F -：貧弱すぎる筋力

耐久：F：幼児並の体力

敏捷：F：幼児並の足の早さ

魔力：C：一人前の魔力量

技量：D：ラインクラスの技量、十分優秀

幸運：E：いつつもツイていない、なんで私だけ…

スキル：クラス：説明

弱い体：-：元病弱な少女、歩けば疲れて走れば倒れる
ヴァリエールの血筋：A：色濃く継いだヴァリエールの血、風と水の適正がある、基礎魔力量が跳ね上がる、ちよっぴりSにもなる
カリスマ：E：他人や動物から好かれ安くなる程度のカリスマ
自己犠牲：-：このスキルにクラスはない、愛する者が死にかけた時自分の命を与えて助ける
妹思い：B：恋を応援したりと妹の為に動くスキル、溺愛
希望の心得：A：不利になればなる程希望を振り撒く心得、カリスマのクラスがグリーンと上がる
烈風の娘：B：英雄烈風のカリンの血筋、風に高い耐性を誇る
潜在能力：A：遺伝子に刻まれた才能、彼女がそのまま大人になればとてつもない力を発揮するかも知れない

烈風のカリン

能力値：クラス：説明

筋力：C：見かけに寄らずともパワフル

耐久：B：戦士らしいスタミナを誇る

敏捷：B：全盛期よりワンランクダウンした敏捷

魔力：A：エイブラハム並の魔力を持っている時点で十分人間やめてます

技量：A：風に関して彼女の右に出る者はいないだろう

幸運：C：ツイているんだがツイてないんだかわからない

スキル：クラス：説明

騎士の魂：A：護衛時や防衛戦時に耐久が跳ね上がる魂

母：B：母とは悪ガキが唯一恐れる者、時に優しく時に厳しい

ツンデレ：-：封印されしスキル、解放される時は旦那とのデート位であろう

英雄：B：烈風と呼ばれる彼女はこれからマンティコア隊で恐れられるであろう、才能だけでは発現しないスキル

魅力：A：お年を召しても彼女は美人、街を歩けば男が振り向く、

目がおつかないよ、でもそこがまたイイ

騎乗：B：魔獣にも乗れる騎乗スキル、エイブラハムは無理
リキャスト：A：素早く呪文を唱えられるスキル

間話：ステータス（後書き）

書き忘れましたが前話でカリィ又さんは手加減しております

第四話・守る事が存在意義（前書き）

やると決めたいです、ほんの少しだけ前世に触れました

第四話：守る事が存在意義

俺は今ヴァリエール家に来ている、あの一件からカリー又は俺の師匠的な存在になってているが…どうやらあの時相当手を抜いて貰っていたらしく今度は掠りもしないのだ。

「今日はここまでだ、風呂に入ってよく眠れ」

返事をする余裕もないのでコクコクと頷いて返事をする、カリー又は鼻で笑うと俺を放置してどこかに行ってしまう…なんだか厳しい母親が出来たみたいで落ち着かない。

「お兄様〜大丈夫ですか？」

遠巻きに見ていたシエスタが走って近寄ってくる、首を横に振って無事じゃない事を伝える。

「ですよね、レビテーシオン」

クスリと笑ったシエスタはレビテーシオンを使って俺をヴァリエール家の一室にほおりこんだ、あの…もうちょっと優しくしてくれないかな…俺全身打撲してるし切り傷だらけなんだけど…

「また酷くやられましたねエイブラハム兄様」

ケラケラとルイズが笑っている、何を思ったかルイズは杖を引っぱり出した。

「今治癒魔法をかけてあげますね」

おい、待て待て…お前の魔法は全部…結局俺はトドメを刺されヴァリエール公爵に治癒魔法をかけて貰った。

思った他重傷で三日程ヴァリエール家にお世話になってしまった、ついでにヴァリエール公爵の誠心誠意の謝罪で俺はすっかり恐縮してしまった。

ルイズがなんでもかんでも魔法を爆発させるのは知っているし俺としては蔵書量の多いヴァリエール家の書斎を利用出来て万々歳なのだか。

「ふむ」

俺が今読んでいるのはマザリーニ枢機卿の執政記録だ、職に就いて二年のマザリーニだがなんと言うか普通である。

当たり障りのない法案しか通せてないのだ、平民達の暮らしを良くする法案は全て潰されてしまっている。

封権社会によく見られる兆候だ、目先の金銭にしか見ていない貴族による妨害：全く持って惜しい国だ、食料事情を見るに元々の国力は高いはずであるがその国力は貴族の懐になだれ込み王家に届くのは僅かとなってしまっている。

イツツモツタイナイ、いつそ農業革命でも起こそうか？ 後で親父に相談してみよう。

本を閉じて元の場所に戻す、俺が出来る事は限られている…俺が今出来る事は領地の小作人制度を無くす事だ。

木製のドアを開けると拳一個分開いて扉が何かにぶつかった…何か嫌な余寒が…一度閉じてもう一度ゆっくり開くとドアはしつかり開いた。

「い、いたい…」

部屋の前には額を押さえたカトレアがうずくまっていた、額は赤くなっておりカトレアの綺麗な瞳には大粒の涙が浮かんでいる。

「あー、ごめん、大丈夫か？」

「だ、大丈夫…」

あまり大丈夫そうではなさそうなのでキュアの魔法をかけてやるとカトレアは涙を拭いながら立ち上がった。

「ちよつといいかしら？」

数秒で立ち直ったカトレアはニッコリ笑いながらそう言ってきた、別段今やる事はないので頷いて返事をする。

「ちよつと王都まで行きたいの、でも馬車は出払っていて馬しかないのよ」

ふむふむ、言いたい事は分かった、俺に王都まで連れて行って欲しいのだろう、王都までの道知らないけど…

「王都まで連れていけばいいのか？でも俺道わからんよ」

「道なら私がわかるから大丈夫よ」

と言う訳で俺はカトレアを前に乗せてその背後から抱き着くように手綱を握り馬を走らせるのだった。

「貴方乗馬上手いのね」

「そうでもないさ、今日は馬がよく言う事を聞いてくれるだけだよ」
事実である、俺は動物に嫌われるのだ、転生する前に一緒に居た友人は気質が荒々しいから嫌われると言っていたがあの頃は五歳から銃を握り敵を殺していたのだ、仕方ない…と言いついておく。

…俺は殺した人間全ての顔を覚えている、いや忘れられないのだ、どんなに辛い記憶でもどんなに小さな出来事でも…俺の脳は忘れてくれない。

「えいつ」

「はふえ!？」

そんな事を考えていたらカトレアに頬を強く引つ張られた。

「いふあいふあい、にやにしゆるんふあ（痛い痛い、何するんだ）」

「泣きそうな顔してるわよ」

ちよつと怒ったような顔のカトレアはそう言うってから俺の頬から手を離れた。

「男の子がそんな顔するものじゃありません」

カトレアはそう言ってプイツと顔を反らしてしまった、多分恥づかしかったのだろう。

「…分かったよ、気をつける…後…アリガトウ…」

「え?最後なんて…」

「…なんでもない!飛ばすからしっかり捕まってるよ!」
照れ隠しに馬の脇腹を何度も蹴ってスピードを上げる、カトレアが心配してくれた事がちよつとだけ嬉しかったのは内緒だ。

それから数時間で王都に着いた、時間は既にに昼前と腹時計が伝えてくれている。

「おおう、活気があるな」

王宮までのメインストリートは狭いながらも人でごった返しており道の端には所狭しと屋台が並んでいる。

漂ってくる食べ物の匂いに腹が減る。

「ね、ねえエイブラハム、お腹空いてない？」

それはカトレアも同じようで俺にそう聞いてきた。

「おう減ってる減ってる、俺お金沢山持ってきたし昼飯は豪勢に行こうぜ」

そう言うとカトレアは楽しそうに頷いた。

「ん？」

あちこちから視線を感じる、視線の向かう所は俺の腰に下げた袋

…ははーん、成る程ね。

「どうしたのエイブラハム？早く行こうよ」

「おう、行く行く」

メインストリートを歩き出すと数人の視線の主が動き出した、だがまだまだ甘い…人込みだからと言って視線を感知された後姿を隠さないのは三流だ、幾人か隠れた二流が混じっているっぽい…さて、この世界のスリの腕前を見せてもらおうかな。

しばらく歩き王宮に近くなった頃カトレアが振り向いた。

「…どうしたの？その大量の袋」

カトレアが怪訝な瞳を俺に向けてきた、そりゃまあ驚くわな、俺の左手には小さな袋が沢山ぶら下げてあった。

「俺の財布をスろうとしたスリからスったんだ」

甘い奴らである、今頃は気がついて焦っているだろう。

「そんな事したらダメよ！」

カトレアに怒られた、当たり前か。

「大丈夫これは」

運のいいことに近くに孤児院があった、そのポストにぶち込んでおく。

「悪銭身につかず、悪い事して貯めたお金は恵まれない子供達のご飯となります」 ついでに自分の財布から10エキユー出して入れ

ておく… ついでだ、これは子供達の為なんかではない、子供は国の未来でありそのまま将来の国力に繋がる、所詮自分の為だ。

「さ、めっしめっし」

くるりと踵を帰して歩き出す。

「もう… レストランはそこよ、通り過ぎちゃってるわよ」

カトレアに呆れられながら注意された、俺は照れ隠しに後頭部を掻きながらカトレアの後にレストランに入る… 特に描写する必要もないので割愛する、味は普通だった。

カトレアの春服選びに付き合い、買い物を終え帰路につく頃にはすっかり暗くなってしまっていた。

「ごめんね、遅くなっちゃったわ」

「ま、仕方ないさ、まとめ買いだっただら？」

買い過ぎて馬車じゃなくては持ち帰れない量だった為にそう判断した。

「ね、ね、エイブラハムはどれが一番似合うと思う？」

「そうだなあ……………！！」

馬のスピードを上げる。

「きゃっどうしたの？」

「夜盗だ、数は12… 馬で追ってきている！」

後ろを見ると俺の言った通りの数が馬で追ってきていた。

「止まれ！ぶっ殺すぞ糞ガキども！」

各々武器を振り回しながら追い掛けてきている、逃げられるか？突如風船を破裂させた音が響いて脇腹に燃えているような痛みを感じた。

「ぐう… マスケットなんざあるのか…！」

後ろを振り向くとフロントロック式マスケットが煙を銃口から立ち上らせていた。

傷ついた脇腹を押さえながら必死で手綱を操る、押さえた傷口からは血がダクダクと溢れている、どうやら静脈を傷つけられたようだ、意識が飛ばなかったのは幸いだ。

「エイブラハム！酷い傷……痛くない！？痛くない！？」

カトレアの子供なりの心配、俺は霞む視界に活を入れて笑って見せる。

「大丈夫、全然痛くないから安心して前を見てくれ」

何故かお前が泣きそうな顔をしていると俺も泣きたくなるんだ。

もう一発銃声が響く、馬がバランスを崩して地面に倒れ込む、叩きつけられる前にカトレアを庇い怪我をしないようにする。

叩きつけられた衝撃で意識が飛びかかるが歯を食いしばり堪える、立ち上がりカトレアを助け起こして杖を引き抜く。

「へっ！いつちよ前にナイト気取りだぜこのガキ！」

夜盗達は手慣れた動きで俺達を取り囲み、俺を見てげらげら……そんなに滑稽か？なにかを守る男がそんなに滑稽か？

「ハッ！自慢出来るような事一つも持っていない奴がよく言うぜ……どうした？怖いのか、馬鹿が馬鹿面こいて笑ってないでかかってこいよ」

そう言っつて不適に笑って見せると夜盗達の笑い声が止み静かに武器を構えた、いつちよ前に怒ってやがる……動きから見るにコイツらは仕事にあぶれた傭兵だろう。

「死ね！」

一人が切り掛かってくる、素早くウォータースタイルブレードを唱えて攻撃を受け流し気道を切ると喘息のような音を出しながら一人は息絶えた。

次は三人同時に向かってくる、順番に攻撃をいなして急所に剣を叩き込むと三人共同じように倒れた、そして三度目の発砲音が響く。足を撃ち抜かれて地面に膝を着く、剣を支えにして倒れるのはなんとか防いだ。

なんと八人全員が俺に向かってマスキットを構えている、こんなガキに向かつて銃かよ。

「よく頑張ったが……やはりただのガキだな」

ニヤリと笑う敵の首領らしき男、他の呪文を使おうにも血を流し

過ぎて集中出来ない、足は動かない…

八方手詰まりかもしれん。

「さ、杖を捨てる。そのメスガキと足の一本で許してやる。」

首領らしき男はカトレアを見て舌なめずりをしている、成る程ペドフェリアか。

カトレアを渡せば俺の命は助かるらしい…成る程成る程。

「死んでも嫌だねクソツタレ」

そう言っつて首領の顔に唾を吐きかけてやった、ウォーターブレイドを解除してカトレアに杖を向ける。

「エアーマー！」

一瞬で込められるだけの魔力を込めて風の鎧をカトレアに纏わせる、これで三時間は手を出せまい…

三時間もすればヴァリエール領に近いここならカーリーヌがカトレアを助けに来る……っってしまった、俺が助かる方法考えてなかった。

「ちっ、もういい…お前を殺して逃げるとする」

マスキットの銃口が俺の額に突き付けられる、なんとかならないか？

ならないな、くそっ。

「エアカッター」

背後から凜とした少年のような声が響き首領の首が飛んだ。

「エイブラハム、よく持ちこたえたな」

声の主は古臭い騎士服を着ていた、飛びかけの意識の中見上げるとその人物はニッコリ笑った。

「後は僕に任せる」

その人物は最近の俺のトラウマ、烈風のカリンその人だ。

問答無用で無理矢理繋ぎ止めていた意識を手放した。

「っ、っ、っ…」

頭が割れるように痛み強い喉の渴きを覚えた。

「エイブラハム！」

目を開けると真つ黒な隈を作った親父が俺の顔を覗き込んでいた。「よかった…目を覚ましたか…父さんをあまり心配させないでくれ」

「あ、ああ…ごめん」

親父から話を聞くに俺はあれから一週間眠っていたらしい、ある程度話をしたら親父は少し休めと言いつつ部屋を出ていった。

「…くそっ！」

親父がいなくなったのを確認してから壁を叩く、カリーヌが来なければ俺は死んでいた、カトレアも酷い目に合わされていた。

「何が…何が英雄だ、何が剣聖だ…今のままじゃ人っ子一人守れやしない！」

子供だから言い訳にならない。

「しつかりしやがれエイブラハム…！俺はあの時誓ったんだろ…！もう誰も死なせないと…全てを守ると…あいつに誓ったんだよ！」
「忘れもしないあの日…俺は…最愛の女を殺した、最愛の女も俺と同じ平和を作ろうとしている者だった。」

だが俺は悪党を全て殺害して平和を作ろうとし、あいつは全ての悪党を構成させようとした。

だがあいつは悪党達に裏切られ続け最終的にはマッドサイエンティストに化け物に変えられてしまった。見るに堪えなかつた俺は彼女を…殺害した、彼女は化け物になり理性が消え去る前に俺に手紙を残した。

貴方に殺される前に一つだけお願いがあると…そう書いてあった、次は大切な者を助けられるように強くなってくれと…

「すー…はー…」

高ぶつた感情を抑える為に息を吸っては吐く、そして壁に頭を叩きつける。

「…やるぞ」

せめて親父にあんな顔をさせない程度には強くなる、そう決めて

俺は剣を引つつかむ。

エピソード：子供と父親（前書き）

読むのに二分かからないよ、短すぎるよ

エピローグ：子供と父親

「親父、話がある」

体の傷を癒し調子を整えた俺は親父の書斎を尋ねていた。

「ああ、いいよ。ちょっとテラスに出ようか」

眼鏡を外した親父は相変わらず優しく微笑んでくれる、あの事を言ったらどんな顔をするだろうか…やはり悲しむか、それとも疑うかだ。

外はいい天気だ、まだ冬だと言うのに暖かい、テラスに出た俺達は丸テーブルにお互い腰かけた、親父は楽しげに外の景色を眺めている。

「親父に話しておきたい事がある…実は俺…」

ゴクリと唾を飲み込み俺は別の世界からの転生者である事と前世の記憶全てを受け継いでいる事を話した。

「そうか。よく話してくれたな」

全てを聞いても親父は相変わらずニッコリ笑うだけだった、ほっとしたようなガツカリしたような…

「まだ何か話したいんだろうエイブラハム、お父さんが全部聞いてやる」

俺は本当に幸せな家庭に生まれた事を噛み締めて口を開く。

「俺修業の旅に出たい」

「ダメだ！」

親父が初めて俺の前で声を荒げた、まさに鬼気迫る表情だ。

「どうしても行きたいのなら私を倒してから行きなさい！」

そう言っただ俺の前で両手を広げる親父、俺は悲しくなるのと同時に嬉しくなった。

心配してくれている、妹のシエスタより…この俺を一番に考えてくれる、前世での両親は俺が五歳の時に殺されてしまった。

「わかったよ親父、今回は諦める」

反対される事は当たり前だった、ただ親父には俺が旅に出たいと言う事を知って欲しかっただけだ。

そういと親父はホツとしたような顔をして椅子に座り直し紅茶を美味そうに啜った、俺は諦めたふりをして夜を待った…ただひたすらに…

「よし、こんなもんか」

背負い袋に着替えと自作した燻製や干し肉などを突っ込み背負う、洗濯などは魔法で出来るから暫く新しい着替えは必要ない…ショー トソードを左腰に杖を右腰に注して俺は自室の扉を開ける。

足音を殺して歩き途中にある親父の部屋の扉の隙間から手紙を二通差し入れて俺は玄関に急ぐ、他の貴族と比べると手狭な玄関には俺がはきなれた靴と…その上にエイブラムへと書かれた紙が張り付けられた袋が置いてあった。

紙には名前以外何も書かれていないが、袋の中にはたんまりと信用度の高いエキュール金貨が詰まっていた…目頭に熱い物が込み上げて溢れる。

(なんだ、全部お見通しって訳かよ親父…)

親父に感謝しながら金貨を背負い袋に押し込む、目を擦って前を見る。

ここまでお膳立てして貰ったんだ、必ず生きて、強くなって、家に帰る…!!

俺は旅立つ、強くなる為に…再び全てを守る力を得る為に!

エピソード：子供と父親（後書き）

これにて幼年期編終了です

エイブラハムの修業時代の少年期編は外伝に取っておきます、次から怒涛の青年期編：原作からのズレが強くなります

第一章・第一話・ぴっかぴかの一年生(前書き)

攻略ヒロインはバンバン増えます

第一章：第一話：ぴっかぴかの一年生

「あーだるい…」

ここはアルビオン国のロサイスと呼ばれる港街、ここはまだ王国軍の領地である為元王国軍傭兵の俺はまったり過ごせる訳だ。

「待たせたなエイブラム」

金貨の袋を二つ抱えたアニエス：俺が旅立って間もなくダングルテールで知り合った女友達だ、後にダングルテールの虐殺の被害者の一人と言えよう…俺達はその実行部隊の隊長に助けられた。

確か名前はジャン・コルベールとか言ってたかな…

「あいよ、そろそろトリステインに向かうか」

金貨の袋を受け取り鞆に詰めながら俺は呟く。

「わ、私も行くぞ！」

アニエスに聞こえたようでアニエスは必死にアピールした。

「…アニエス、だから言っただろう？俺は魔法学園に入学する為に行くのであってなあ…」

ここでお別れだと話してあったはずなのだが…かと言ってアルビオンに残ったらアニエスは死んでしまうと思うから別の所に行くよ…う伝えてあるのだが…

「……暫くトリステインで仕事を受けるから平気だ」

なんの為に？

つてそうか犯人探しか…

「やあ君達、また揉め事かい？」

「ようウエルズ、そんな訳ではない」

ウエルズ・ド・アルビオン、太陽のような金髪と白い歯が眩しいイケメン、レコン・キスタと名乗る反王国軍が蜂起した場所に居て俺に助けられたマヌケな友人だ、名前からわかるように王子様だ。「しかし君が居なくなるとは悲しいよエイブラム、アニエス…せっかく腹を割って話せる友達が出来たのに…」

見てることちが申し訳なくなる程にしょげるウェールズ、俺はそんな姿に苦笑する。

「何、お互い生きていればまた会えるさ。今度は要塞の司令室じゃなくてそこらの酒場でエールを飲みながら馬鹿話しよう」

アルビオンは戦時中だ、だからこそ次に会うのは戦場ではなく平和な街を指定しておく。

「ああ、君達も元気だな。結婚式には呼んでくれ！さらばだ！」

そう言っつてウェールズは王子様オーラを撒き散らしながら駆けて行った。

結婚式つてなんだ？

「なんの話をしているのやら…なあアニ…エ…ス？」

隣でアニエスが燃えていた、いや燃えているように真っ赤になっていた。

「…アニエスさん、戻つてらっしゃーい」

揺さぶるが完全に固まつてしまっている、アニエスつてこんなに初なんだな…確かに俺が街の娼婦に引つ張られそうになった時娼婦を切り殺そうとしたっけか。

仕方ないのでアニエスを抱えてフネと呼ばれる飛空艇に乗り込む、結局アニエスはトリステインに到着するまで固まつたままだった。

「エイブラハム！」

港街の外で自分の馬に鞍を取り付けているとアニエスに呼び止められた。

しばらくここで仕事を探すつて言つてたから街の外に用はないはずだがなあ…そんな事を考えながら振り向くとアニエスの顔がめっちゃ近くにあつて…

「ち、ちか…むぐっ!？」

いきなりキスをされた、俺の首に自分の両腕を回してきつく抱きしめるようにキスをするアニエス、十秒程唇を合わせた後アニエスは名残惜しそうに唇を離れた。

「……………」

俺は口を鯉のようにパクパクさせるだけで声が出ない。

アニエスは俺に指を突き付ける。

「お前の事諦めた訳ではない！必ず奪いに行く！忘れるなよ！」

そう言つてアニエスはびゅーっと走つて行つてしまった、なんかキヤーとか言いながら。

唾を飲み込みみようやく声が出るようになった俺は…

「その台詞、普通は男が言うもんじゃねーの？」

突っ込みだった、もう頭の中こんがらがって突っ込みしか出なかった…ちよつと自分に自己嫌悪した。

タルブまで一時間の道程、俺は唇に残る感触に顔を赤くしながら馬を突つ走らせる。

…そういや俺つて恋愛したの前世でも一人だけだったよね、虚しい。深く落ち込みながら我が家たるタルブ辺境伯の屋敷に入る、懐かしい…10年ぶりか。

「お兄様ー！！」

昔のような甲高い声ではなくしつかりとした大人の女性の声となつたシエスタが…残像を残しながらこちらに接近してきていた。

「会いたかったです！」

「おぶろっ!？」

我が家の敷居を跨いで12秒で再び外に弾き出されてしまった、つーかシエスタよお…そのスピードとパワーはなんだ？ 厚さ1サントの超々ジュラルミン甲冑に輝が入っているんだが…

ちなみにサントとはハルゲニアの単位の一つである、距離等を計る時に使われる、サントはセンチ、マイルはメートル、リーグはキロメートルだ、所詮メートル法の呼び名を変えたに過ぎない。

「お兄様です…本当にお兄様です！」

シエスタはスリスリと俺に体を擦り寄せている…そして俺の腹の上でぶにゅぶにゅと形を変える胸……か、彼氏とかいたりしないよな、お兄ちゃん泣いちゃうぞ。

「ただいまシエスタ、綺麗になつたな」

すつと頭を撫でてやるとシエスタは更にきつく抱き着いてきた。

「お兄様もかつこよくなりました！」

そらそうだ、何しろ俺はこの世界でも異能者として生まれている、見た目は絶世の美男子だ…見た目だけは。

「そろそろいいかシエスタ、親父の顔を見たい」

「はい！お父様も首を長くして待っていますよ！」

シエスタはグイグイと俺の手を引く、おいおい…そんなに力いっぱい手を引くと…ほら、俺の左手が取れた。

「お、お、お、お兄様…なななな…なんで手が…」

シエスタが俺の左手と言うか腕一本を持ち上げてブルブル震えている。

「アルビオン戦争に参加していたのは知っているだろう？」

コクコクとシエスタは何度も首を縦に振っている。

「敵に俺と同じ位強い奴が居てな、吹っ飛ばされてどっか行っちゃまったから義手にしたんだ。ほれ返せ」

シエスタから左手を受け取り肩に嵌める、カチャツと金属音がして義手が動くようになった。

「お兄様！」

あれ？なんかシエスタが怒っている…どうしたんだ？

「なんで…なんでそんな！…うえーん！」

怒ったと思ったら泣き出した、思春期かな…とりあえず俺は領民達の冷やかな視線を浴びながらシエスタを宥め始めた、一時間程で泣き止んだシエスタはゆっくりと立ち上がり俺に背を向けた。

「お兄様がそんな人だって言うのはわかっていました、お父様に会うんでしょう？着いてきて下さい。」

不機嫌なシエスタの後ろに着いていきながら首を傾げる、どうした生理か？

勘のいいシエスタから蹴りを貰い大理石の壁に減り込んでから再び歩き出す。

「あ、エイブラハム！」

「…お、エルザじゃないか、まだちゃんまいなお前は」

近寄ってきたちゃんまい女の子、名前をエルザ…青い髪の女の子に殺されそうになっている所を助けたらどうやらコイツは吸血鬼らしい。

青い髪の女の子はタバサと名乗った、タバサいわくコイツは血を吸うから殺さないといけならしい、エルザはいわく血はご飯だから吸わないと死んじゃうらしい、だから答えをやった。

吸血鬼は吸血じゃなくても平気だと、俺の世界にも吸血鬼は居た、みんな別に血を吸ってはいなかった…トマトで代用出来るのだ、別段血を吸う必要はない。

と、言うわけでタバサにタルブ領にエルザを送り届けてくれるよう頼み別れた訳だ。

「ちゃんまくないよ、私はこれが普通なの」

「ああ、ごめんごめん」

頭を撫でてやるとジト…っと見つめられた、そんなに見つめられたら…悔しい…でもびくんびくん…クリムゾンごっこにも飽きたからまつたり手を離してエルザと別れる。

「お兄様、言おうと思っていた事が多々ありました」

シエスタまでもジト目になっている。

「いろんな物を旅先で拾ってくるのはやめてください、ドラゴンとか吸血鬼とか生きているゴーレムとか」

だって知り合っちゃったら見捨てる訳には行かないし…

「言い訳考えない!」

「ママイエスマム!」

「よろしい」

ニッコリと笑ったシエスタにほっとしながら更に先に進む、着いた場所は親父の執務室…シエスタがノックもせず扉を開いた。

「お父様!お兄様がお帰りになりました!」

「ああ、窓から見ていたよ。おかえりエイブラハム…大きくなったじゃないか」

大分老けた親父が前と変わらない微笑みで迎えてくれた、戦争で深く傷つき冷え切った心に再び火が灯った。

「ただいま親父…あんたは老けたな」

「ハツハツハ！十年も立てばそうなるさ！…よくぞ、よくぞ帰ってきた…心配したんだぞエイブラハム」

笑った親父は優しく微笑んでくれた、俺も釣られて笑う…久しぶりに暖かい気持ちでいっぱいになった。

楽しい時間はとは矢のように過ぎる物で気が付くと外は漆黒の戸張が落ちていた。

「もう夜か、エイブラハム。ささやかだがお前の帰還を祝って会食を行う事にした。あの方々も来るから久しぶりによく話すといい」

俺は固まった、あの方々とは間違いなくヴァリエール家と母方の実家であるグラモン家だ。

グラモンの方はいい、だがヴァリエールには幼少のトラウマकारी又様がおられる。

小さなルイズがどれだけ美人になったかも気になるし将来が楽しみであったカトレアにも会いたい、勿論当時から綺麗だったエレオノールに会うのも楽しみだ。

三姉妹はよく俺に手紙を書いてくれた、心配する内容、旅先の話を知ったがる内容…そんな感じだが…カリイ又様だけは違う、帰ったら覚えておけ、よくぞカトレアを泣かした、褒美をやる、まだ忘れていないぞ、

こんな内容ばかりである、冷や汗がボタボタと垂れる。

「甲冑を脱いで楽な格好で出席するといい」

「あ、ああ…」

歯がかちかちとぶつかり合い音を出す、ぶつちやけよう、戦争よりカリイ又の修業と言う名の虐めのが怖かった。

懐かしい自室でラフな格好に着替える、震える手でボタンをはめるのには苦勞したが…殺される事はないと自分に言い聞かせて食堂に向かう。

もーいやだ、中から談笑する声が聞こえないのがいやだ、部屋に帰って毛布を被ってブルブル震えながら眠りたい。

しかし帰ったらカリーヌの攻撃が更に酷くなるだろうから覚悟して扉を開ける。

「エアハンマー！」

カリーヌの声が響き俺に竜巻のようなエアハンマーが迫ってくる、いつになく本気である。

腰に手を伸ばすが何も無い。

(…杖忘れた！？)

やっちゃまった、テンパリ過ぎて杖を置いて来てしまった。

ならばと深く息を吸い込み一口でその息を吐き出す、特殊な呼吸法で体の筋肉のコンディションを完璧にする、手刀を構えて両腕を交差させて風に振る。

「三柳交差翼撃！」

エアハンマーは四つに分割され俺の後ろの壁を破壊した、エアハンマーを撃った人物が接近してくる…早過ぎて人影にしか見えない…だが！

手をぬるりと回すように動かした後跳びはねる、人影もそれを追うように跳んで向かってきた…狙い通り！ 奴の体にある孔をハート型に蹴りで着く。

「三柳羅舞注入脚！カリーヌさん、あなたの体にある孔をハート型に打ち抜いた…いまあなたの体は剥き出しの性感帯に包まれている…指で触れただけで…」

振り向かず指で触れる。

「あんっ」

後ろで人影が喘いだ、そこで俺は冷や汗がダラダラと流れる…カリーヌはこちらを冷え切った目で見て、俺の真正面の席だ。

後ろに居るのはダーレ？

「あつも…もつと優しく…」

「カトレア！？」

「んんっ！…い、息を吹き掛けしないで…」

急いで背中にある廃孔を突く…あまり強く突いてなかったからすぐに効果は無くなった。

「な、何故カトレアが…」

「貴様に強くなった所を見て欲しかったんだと、しかしボクにそれを使おうとしたか」

背後から本物のカリーヌの声が響く、再び冷や汗が止まらない、俺脱水症状で死ぬんじゃないか？

「面白い、使ってみる」

「て、てめえなんかこわかねえ！野郎ぶっころしたらあー！！」

結果は言うまでもなく、完膚無きまでボッコボコにされた。

食堂の片隅でカトレアに治療して貰う。

「久しぶりの再開だつてのにすまんねカトレア…」

「あら、いいのよ。気持ちよくしてもらったから…」

やはり根に持つてらっしやる、深々とため息を吐いているとルイズがちよこちよここと近寄ってきた。

「おお、ルイズか。見違えたな」

「嫌ですわエイブラハム兄様…絶世の美女になっただなんて…」

誰もそんな事言つてねーよ。

「所でエイブラハム兄様、先ほど使っていたミヤナギなんてらとはなんなのですか？」

「先程使つてたミヤナギ…ああ、なるほどね。」

「三柳流爆拳と三柳流斬脚だな、爆拳は相手の体にあるエネルギーの塊…孔を突いてエネルギーを爆発される拳法、斬脚は素手で相手を切り裂く拳法だな。どちらも一流の武術だ…見てろ」

パンを錬金して鉄に変える、そのパンを前にして指を広げ両手を組み合わせて指を網のようにする、そのまま勢いよく鉄に手を押し出す。

「三柳千葉下ろし」

鉄がブロック上に切りわけられて机の上に転がる。

「それって三柳流秘伝書の中にあるあれですか？」

様子を見守っていたシエスタが口を開いた、俺は目を丸くした…
何故シエスタが三柳流を知っているんだ？

「ああ、私のひいお爺ちゃんが持ってきた本に書いてあるんですよ、
ほら…これです」

いつも持ち歩いていたのかシエスタは巻物を懐から取り出した、
それを受け取り広げてみる。

「…こ、これは！」

暗黒メイド闘法と書かれていた、阿保らしいと思うだろう…だが
これは三柳流五大武術の一つだ、つまり最強の一角。

俺が全盛期に唯一負けた相手がこれの達人であった、俺がシエス
タの動きを見切れずに抱き着かれ外に吹き飛ばされた訳がわかった。

「はあ…まあいいや、でカトレアよ。俺って確か転入するんだよな
？カトレアと同じ一年でよかつたっけか？」

「ええ、そうよ。もう年の終わりだけどね。来年はルイズも入学す
るわ」

名前を呼ばれたルイズは怯えたように竦み上がりカトレアの影に
隠れてしまった。

「…なんか前より臆病になつてないか？」

ルイズは俺を見て怯えている、俺自体を怖がっている訳ではなく
何かを怖がっている…何かあったな。

「…ルイズ、言っつていいかしら」

「ダメ！やめてちい姉様！」

ルイズの怯えが酷くなった、まるで信頼する親に零点のテストを
見せないでと言っているようだ。

「話してくれよルイズ、なんだ？俺の部屋の物でも壊したか？それ
なら別段気にするな」

「違うの！…えっとねエイブラハム兄様…私魔法が使えないの…
失敗ばかりして…使用人にもゼ口って」

ふむ、と顎に手を当てる、随分おかしな話ではある。

魔法を失敗？ルイズの魔法は爆発にしかならないがあれは立派な攻撃魔法だ、相手の防御を突き抜ける魔法なんざ使おうと思って使える訳じゃない。

「んー、爆発しなくなったのか？」

「爆発しかないの！」

「なんでい、それでいいじゃないか。」

「だいたい要因は分かった、あれを話すべきか否か…ま、適当にはぐらかしながら言うかね。」

「ルイズ、いいか。普通魔法を失敗すると…：エアハンマー」

杖を壁に向けて振るが何も起こらず魔力だけが減った。

「僅かに魔力が消費され何も起こらない、だがルイズの魔法は全て爆発する」

「そんな魔法一つしかないのだが…まあヒントを与えるだけにしようかな。」

「ルイズ、ブリミル関連の書籍を漁るといい。特にブリミルが使った魔法や作った魔法を調べるといい」

「そう言うとルイズは首を傾げた後シュンとなった、そこまで落ち込む事なのかこれは…」

「…いいかルイズ、四系統だけが魔法じゃない、証拠を見せよう…グラビティボール」

杖の先から発射された黒い玉は積んである壊れた机にぶち当たり十分の一程の大きさまで圧縮した。

「新属性だつてあるんだ、これは闇属性、重力と腐敗を司る」

停滞した世界では新たな物は驚異となる…ま、関係ないけどね。

「ちなみにこれが俺が一番向いている属性だ、凶悪な威力を誇る闇…ただ使うまで長い詠唱を必要とするから…リキャストを覚えなくては。」

「それに例え魔法を使えなくてもルイズはルイズだ、俺にとってはそれだけでいい」

ルイズの頭に手を伸ばして撫でる、相変わらずいい触り心地の頭

だ。

まるで子猫を撫でているような感覚で…なんで俺に杖を向けるかなカトレア。

「ストーンスプラッシュ」

杖から発射された小石がビシバシと俺に当たる、痛いってばよ。

「アシッドミスト」

酸の霧を発生させて体を覆う、石は届く前に溶けて消える。

「…ルイズばかりずるいわ」

「ん？なんか言った？」

「……………なんでもないわ」

カトレアはさも不機嫌そうにどこかに行ってしまった、やれやれ生理か？

「お兄様それはないです」

「エイブラハム兄様は酷い人です」

何故か妹と妹分からバツシング…俺なんかしたかい？

「この下郎が」

カリー又は一体俺になんの恨みが…そんなこんなで俺の帰還パーティーはお開きになった。

自室に帰りベッドに倒れ込むと直ぐさま心地よい眠りに落ちていった

第一章・第一話・ぴっかぴかの一年生（後書き）

次は攻略できるヒロイン達の好感度ですね

ヒロインずいぶんかんど(前書き)

お願いがあります、よろしければ協力をお願い致します

ヒロインずじょうかんぞ

アニエス

好感度：

エイブラハムへの評価：キスしてしまった…次どんな顔で会えばいいのだろう…

フラグ：1・ダンゲルテールの虐殺2…3…

このままだと迎えるエンディング：BADEND【復讐の末路】
ウェールズ

好感度：

評価：頼りになる友人

フラグ：1・助ける

エンディング：NormalEND【俺達ずっと友達だよな！】
カトレア

好感度：

評価：友達として好き、異性としては…嫌いじゃない

フラグ：1・病気を治す2…3…

エンディング：BADEND【望まぬ結婚】
カリーヌ

好感度：

評価：可愛い馬鹿弟子だが邪悪な臭いがする

フラグ：1・弟子入り2…3…4…

エンディング：NormalEND【免許皆伝】
シエスタ

好感度：

評価：優しく強くカッコイイお兄様

フラグ：1・メイドになる2・森の中でオークから助ける3…

-4…5…6…7…

エンディング：BADEND【なんで愛してくれないの？】

ルイズ

好感度：

評価：優しく物知りな義理の兄

フラグ：1 . カトレアの婚約者になる 2 3 4 . .

- . 5 6 7 8

エンディング：BADEND【サイト大好き！】

エルザ

好感度：

評価：拾ってくれた人

フラグ：1 . タバサから助ける 2 3 4

エンディング：BADEND【所詮化け物と人】

タバサ

好感度：

評価：邪魔者

フラグ：1 . エルザを助ける 2 3 4 5 . .

- . - . 6 7 8 9

エンディング：BADEND【私の春を買って下さい】

説明

エンディングとはこの好感度、フラグの立ち具合のままそのヒロインのルートに入ったら起こる事です、フラグが多ければ多い程落とし嫌いと言えるでしょう

ちなみに全てのフラグを立ててしまうとCRASHENDになるとロインもいます、とてつもなく惨い死に方をします

エンディングには

真TrueEND

TrueEND

HAPPYEND

Normal END

BAD END

DEAD END

CRASH END

ちなみにCRASH ENDは原作完全崩壊、迎えてしまうとヒロイン達だけではなくエイブラハムを除く全員が死んでハルゲニアは滅んでしまいます

さて、読者の皆様に協力して欲しい事がいくつか存在致します。

まず自分が次どうしようかと細かく描写して後書きに出すので指定された安価を書き込んで下さい

読者様参加型と銘打っていききたいと思います、話は三日ずつ進んでいきます

ここの後書きから始めたいと思います

ヒロインずこうかんど（後書き）

エイブラハム「入学まで後一週間！自由になるのは三日位だな、一日三回まで行動できるぞ。さて…どこに行こうか」

現在地：タルブの自宅

滞在者：カリヌ、カトレア、ルイズ、シエスタ

自宅内の行ける場所（近場のみなら三回行動できる）：城下街、中庭、自室、地下室、ワインセラー、執務室、書斎
領外に行ける場所

トリスタニア（到着までに行動一回消費）

滞在者：アンリエッタ、マザリーニ、ジェシカ、エルザ

着いてから行ける場所：魅惑の妖精亭、王城、スラム街、メインストリート

ロサイス（到着までに行動二回消費）

滞在者：アニエス、タバサ

着いてから行ける場所：酒場、傭兵ギルド、船着き場、宿屋

エイブラハム「早い者勝ちで一人が決定出来るのは一日のみだ、一日を越したり三回以上行動したり、前の安価と合わなかったら無効だ、行く場所を書いてくれよ、誰かに会おうと書いたら無効だ。それじゃよろしく頼むぜ」

外伝：ダンゲルテールの悲劇（前書き）

外伝ではアニエスがヒロイン役

外伝：ダンゲルテールの悲劇

「つと…流石に地図無しは迷うなあ」

手に持った剣で草や樹木を切り払いながら山道を進む、旅に出て一月、遭難を始めて一週間…そろそろヤバイと思い始めた。

俺は水のスクウェアでもあるから水の心配はない…というか綺麗な水がある場所なら容易にわかるのだが流石に食料となると厳しい。ついでに俺の少年あんよが豆だらけだ、いくつか豆が破けて血が出ており靴の中がヌルヌルして気持ち悪い、由々しき事態である、女に変装出来なくなってしまう。

「ん…？」

阿呆な事を考えて孤独感を薄めていると鼻が何かの匂いを捉えた、頭脳はイースト発酵した小麦粉を焼いた匂いと答えを弾き出したつまりは…

「街だ！イヤッホーイ！！」

匂いのする方向に奇声を上げながら走り出すと狙った通り街が見えた、近くに看板も立っている。`ダンゲルテールにようこそ！`そうハルゲニア語で書かれていた。

背負い袋を担ぎ直して傾斜を滑り降りる…高山の街だけあってか木製の家が多い、いや観光は後にしてまずは宿を取るう。

後は仕事でも探すかな、こう言った場所なら臨時の樵の仕事位ならあるだろう。

そこまで大きな街じゃないので宿屋はすぐに見つかった、宿屋ミラソそれが宿の名前らしい…

扉を開けると扉に括りつけられた鈴が心地よい音を奏でた。

「いらっしやいませー！お客さんですかー！？」

金髪の切れ長の目をした活発そうな女の子がそう尋ねてきた、俺と同じ年だろうか。

「うん、宿を取りに来た」

「おとーさーん！お客さーん！」

少女は後ろのバックヤードに向かつてそう叫んだ、お客さんは俺であってあんたの親父さんはお客さんじゃないってツッコミは無しだな。

「怒鳴らなくても聞こえているよアニエス…いらっしやい、ボウヤ一人かい？」

宿屋の主人であろうおっさんは笑顔でそう尋ねてきた。

「うん、旅の途中でね。ここは一晩いくら？」

「一晩3スウ6ドニエ、食事は一食1スウだ。泊まっていくかい？他に宿はなかったし…まあ対して高くもないから泊まっていくかね。」

「うん、夕食付きで一週間頼むよ」

纏めて金を払うとおっさんは満足そうに頷き鍵を渡してきた。

「アニエス、この子を部屋に案内してあげなさい」

おっさんはそう言ってニッコリ笑うと奥に引っ込んでしまった

「はい、私ねアニエスって言うの！君のお名前は？」

ニコニコ笑うアニエスを見て苦笑しながら右手を彼女に伸ばす。

「名前はエイブラハム、旅のメイジだ。よろしくな」

彼女は右手を見てパアツと顔を明るくした、キツイ感じの顔をしているが笑うと大分かわいらしい。

「うん！えつとね、着いてきて！」

子供らしく駆け出した彼女は階段の前で止まり手招きをしている、思わず頬が綻ぶ、シエスタもあんな感じだったかな。

「ここがエイブラハムの部屋！」

案内された先は個室だった、日がよく当たるように作られておりついでに風も抜け安い工夫をされている、夏場でも涼しそうだ。

「ああ、ありがとうアニエス。これチップな、今回だけ大サービスだ」

10ドニエ硬貨を渡すとシエスタ…じゃなくてアニエスは顔を輝かせた。

「ありがとう！」

そう言っただけに駆け出していくアニエス、何か買いに行ったのだからほほえましい。

服を脱いで水魔法で体を洗い新たな着替えを取る、若草色のチュニツクに着替えてベッドに寝転ぶ…しばらく歩きつぱなだったから疲れた、今日はもう眠って明日にでも行動を開始するか。

「エイブラハムー！ご飯だよー！」

扉が勢いよく開かれた、アニエスは手にパンとシチューと川魚を焼いた物を盆に乗せて持っている。

アニエスの奴俺を犬か何かと勘違いしてないか？

「ああ、いただきよ。テーブルに置いてくれ」

ちよいちよいと組んだ足でテーブルをさす、アニエスはその反応を見て顔を膨らませた。

「お行儀が悪いと始祖ブリミルがお仕置きに来るんだよ」

「おーそら怖い、それじゃ頂くとしますかね」

テーブルの前に置かれた食事の前で手を組み、自然と星に感謝する。

え？命を捧げてくれた魚への感謝？何言っただお前…捧げてくれたってどんだけ傲慢なんだ、コイツが焼かれて食われるのは捕まったコイツが悪い、弱肉強食、強くなければ誰かに食われる…勿論俺も、その覚悟があれば別段捕まった間抜けに感謝はいらん。

俺が感謝するのは命を育む星に大してだ、そして自然に敬意を払う、少なくとも自然はなくてはならない物だからな。

「おっこの魚美味しいな…ってこれピラニアじゃないか…こんな寒い所にも居るのか…」

後で調べる必要がありそうだ、何かしら川に異常があるのだろうか…何しろここらはまだ雪が積もる位には寒いから…

ちなみにピラニアとラザニアは無関係だ。

食事を堪能してから空になった器を重ねて外の食器引き取り口に出しておく…腹も膨れたしとっと寝るかね。

食べて寝る事は人類の至高の楽しみなり…と言つのは言い訳で体力が少ないから疲れているのだ。

「だから漂白剤は食べられないってば！」

自分でもさっぱり訳のわからない寝言で目覚めてしまった、確かに漂白剤は食えないが…それを食べる、或いは食べさせられる夢なんてどうやって見ればいいのか…その方法を頭脳が弾き出したが無視する。

「ん…いい朝だ。」

鳥が囀り朝日が窓から差し込んでいる、とつとと服を着替え剣を担いで下に降りる。

「おはよーエイブラハム」

「おうおはようさんアニエス」

小さな体で一生懸命箒で掃除しているアニエスに出会った、どうやら宿屋の主人は仕入れに行っている様子だ。

「エイブラハムは今日何しに行くの？」

箒を動かしながらアニエスはそう尋ねてくる。

「病人や怪我人を格安で助ける、せめて飯代やら宿代位稼がないと

…」

「あら偉いのね」

聞き慣れない声に振り向くとエプロンを着けた柔らかな女性がこちらを見て微笑んでいた。

「大人版アニエス？」

思わずそう口に出してしまった、アニエスが大きくなったらこんな感じであろうを具現する女性であった。

「まああなたが間違いないわ、私はアニエスの母親のミランよ。よろしくねボウヤ」

しかし夫婦揃ってボウヤ呼ばわりか…まあ俺は今ガキだから仕方ないんだがな。

「私だって大人だよ」

アニエスがなんか言っているが無視する。

「それじゃあそろそろ行つてきます」

「はい、いつてらっしゃい」

「いつてらっしゃーい！」

そっくりな親子に見送られて街に出る、困っている人間を幾人か救った後謝礼を貰い近場の森に行く。

さて三柳流秘伝書は頭の中に全て入っている…徒手空拳を身につけねば…

そんな感じで修業しつつ日々を過ごしていた、一週間たったある日俺は旅立った。

体も十分休める事も出来たし保存食の補給も出来たとホクホク顔で山を下りていた、街からは既に10リーグは離れたであろうか、沢で休憩していると誰かが俺を呼ぶ声が聞こえた気がした。

「…助けてエイブラハム！…」

「…街が燃えてるの！助けてエイブラハム！…」

アニエスの悲鳴が頭の中に響いた、いやいやもう俺には関係ない一期一会の間柄だ。

「…悪いメイジが街を燃やしてる！近所のお爺さんが…」

「あー！もー！！待ってるよアニエス！！」

どうやらアニエスは俺にとって大事な友人の一人になっていたらしい、地面を強く蹴りダングルテールへと急ぐ。

一度見捨てようとした事は謝ろう、だが一度救うと決めたなら俺は必ず救う…救ってみせる。

20分ほどかけてダングルテールに到達したが酷い有様だ、火のメイジで編制された部隊が街を焼いている、人の焼ける臭いが辺りに充満している。

とりあえず部隊の奴らに見つからないようにアニエスの元へと急ぐ、下手に戦うよりはこちらのが早い。

「そーらお嬢ちゃん逃げな逃げな！」

屋根の上からアニエスを見下ろすと巨漢がアニエスに向かって炎を撃ちまくっている、俺は水の魔法を唱え始める。

「あつ…！」

アニエスが転んだ、やばい…早く唱え終われ！

「残念だったなお嬢ちゃん！ファイアボール！」

巨漢のハンマーのような杖から無数の火球が発射された。

「させるかべール…！」

アニエスの回りに水の薄い膜が球体状に張られファイアボールを消した。

屋根から飛び降りて巨漢の顔面に飛び膝をかまし、反動を利用して宙返りしてアニエスの前に立つ。

「助けに来るのが遅くなった、ごめん」

先に謝る、そうしてから振り向いて笑って見せる。

「後は任せろ、俺が君を守るから。もう傷一つつけさせないから！倒れていた巨漢がのっそりと立ち上がる、巨漢に杖を突き付ける。

「小僧：貴様何者だ？」

まるで歓喜に打ち震えているような感覚を巨漢から感じた。

「何者？通りすがりの元ヒーローさ」

「英雄ごっこは余所でやんな！」

巨漢の杖から再び炎が噴出する。

「悪いな、英雄ごっこじゃないんだ」

風を上を吹き上げさせて炎を反らす、奴が呆気を取られている内に強く地面を蹴り肉薄する。

「くらえ！」

両手で奴の腹にある孔二つを同時に点くが…

「そんな物きかん！」

分厚い筋肉に阻まれてしまいカウンターに蹴りを喰らい吹っ飛ばされ燃え盛る家屋を突き破る。

ズキンと背中が痛んだが今は気にしない、背中の孔を突いて痛覚神経を遮断する、ついでに剣を引き抜き構え自分の体に活性の呪文を叩き込み筋肉のパワーを限界まで引き出す。

再び家屋を突き破り巨漢に接近する。

「アイアンテンペスト！」

「！…シールド！」

貯めていた力を解き放ち剣をめちやくちやに叩きつける、敵に叩きつけられる剣の雨はまるで鉄の嵐である、巨漢はそれを受けて石の壁に叩きつけられた。

無茶をした反動で腕の筋肉が皮膚が裂けて体を赤く染める。

「やるじゃないか元ヒーロー」

巨漢はさも嬉しそうににんまりと歯を見せて笑った、俺が顔をしかめると同時に限界を迎えたロングソードが音を立てて砕け散った。
「だがもう終わりだなあ…」

そう言い放ち、得意げににんまり笑う巨漢。

「最後に教えてやる俺はトリステイン魔法実験部隊の副隊長…名前
は…」

「あー別にいらんよ、お前もう死んでるし」

「何？」

ゆっくりと立ち上がり親指を立てて首を掻き切る真似をした後指を下に下ろした。

巨漢にゆっくりと赤い線が大量に…そして無造作に入りバラバラと崩れ始める。

「テメエのような屑にこそその死に様は相応しい、墓標も無く名前も無く…誰に記憶される事も無く死んでいけ」

「い、嫌だ、人を…人をもっと燃やして俺は！あ、あああああ
！」

ただの挽き肉になった巨漢を一瞥してアニエスに向き直る。

「大丈夫かアニエス」

「エイブラハム…お父さんとお母さんが…」

ペールを解除しアニエスの肩に手を置き首を左右に振る、言わなくても理解している…この街からもう助けを呼ぶ声は聞こえない。

「アニエス、君はどうする？俺は街を出て世界を回る…君一人なら養っていけると思うけど…辛い旅になるかもしれない、とりあえ

ず新たな街には連れていく…その街で平和に生きるのもいいし俺に着いてくるのもいい…好きにきなよアニエス」

まだ子供のアニエスにはどちらを選んでも辛い選択になるだろう。「着いていく、私はお前に着いていく…剣を教えてくださいエイブラハム…父と母の仇を…ダングルテールの恨みを私の手で晴らす」

この一瞬でどれだけ考えたのだろう、この虐殺でどれだけ地獄を見たのだろう、子供っばさが消え目には憎悪の炎が灯り口調すら無骨になっていた。

「…君がそう望むなら、俺はそうしよう」

復讐を止める事は出来ない、旅の中で復讐は無駄と教えるしかない…

こうしてアニエスと俺はダングルテールを旅立ったダングルテール内で実験部隊の隊長であるコルベールと出会い次の街まで保護して貰ったりもした、アニエスは今は力がないからかコルベールを見つめるだけだったが…いつか復讐してやると目が爛々と輝いていた。

外伝：ダンゲルテールの悲劇（後書き）

外伝は安価ないよ、一章の安価をよろしくね

第二話前編：シエスタと中庭（前書き）

もじけえ…

ちよつと読者様に聞きたいのですがみんなで選んでルート決めるの止めた方がいいですか？

…つってもそうすると俺BADEND書きたくなっちゃうんですけど…リア充爆発しろが座右の銘ですから

どうか感想に答えをお書き下さい、みんなで行動決めるのって時間掛かりすぎるんですよ

第二話前編：シエスタと中庭

「ふあああ…ふ…眠い」

朝起きたばかりでそんな事を言う、あれだよ、寝起きの心地良い眠気ってなんかいいよね。

二度寝したくなる気持ちを抑えて服を着替える、体内時計が今は午前5時であると教えてくれている。

「ふあああ…ふ…」

さつきから欠伸が止まらない、鏡の前に立ちアチコチにツンツンと伸びている髪の毛を見てげんなりする。

前世からこの髪の毛はそうなのだ、水に濡れようがハードジェルで固めようが決して寝ない髪の毛、根性有りすぎである。

「あふう…」

欠伸を噛み殺しながら体を伸ばす、ちよつと不安になる位背骨が鳴る、不安になりながら朝食までどうしようかと考えながら適当に館内を練り歩く。

ここは十年経っても変わっていない、俺とシエスタが落書きした壁紙もそのままである、二人でメイド長にこっぴどく叱られたのを思い出してクスリと笑った。

「おつ、この壺まだあったのか…ハハハ、轍もあんときのままだ」

カトレアが遊びに来た時転んで割った壺、二人で焦りながら直した覚えがあるが…結局親父にばれたが親父はこれはこれでいいデザインだと笑って許してくれた。

懐かしさに頬を緩ませながら歩いていると…いつい中庭に来てしまった、朝だからか誰もいない。

中庭にある巨大な石碑…これは東のタルブ村…シエスタの故郷の墓だ、ここに全ての遺骨が眠っている。

シエスタの村はまず疫病に襲われた、ガリア風邪…つまりはインフルエンザに、インフルエンザだけならまだ良かった…いやそれで

も村の半数が死に絶えたが…その後野盗の集団に襲われたらしい、俺の屋敷に辿り着いたのはシエスタの姉とシエスタだけだった。

シエスタの姉はインフルエンザなのに無理をしてシエスタを俺の家まで運んでくれた、彼女も家のメイドをやっていてくれたがお金が貯まると城下街で店を借りてパン屋をやっていた。

中々に安く美味い店だった…話が反れた、親父が領軍を引き連れて村にたどり着くとそこには野盗どもしかおらず村人は全員が殺害されていたらしい。

村人の遺体を焼き骨にしてここまで運んだ訳だ、これはシエスタの親父さんとお袋さん、そして兄弟達の墓でもある。

「シエスタの親父さん、シエスタは元気でやっているよ。結構綺麗になった、あれなら嫁の貰い手も沢山いるだろう」

慰霊碑の前で手を合わせてそう言う。

「だが…これで良かったのか？」

…やはり聞いても墓石は答えちゃくれない。

「良かったんですよ」

「うおう！？シエスタ！」

背後にシエスタがニコニコ笑いながら立っていた…気配が全くしない、恐るべし暗黒メイド…

「驚きましたか？」

「うん、死ぬ程」

そう言うときシエスタはケラケラ笑った、俺も苦笑で返して慰霊碑の石段に座り自分の隣を叩く。

「よいしょ」

俺の意を察してくれたのかシエスタは隣に座る。

「いい天気だな」

空を見上げると雲一つない、快晴と言う奴だ。

「そうですね、東方のお茶が飲みたいですね、確か緑茶でしたっけ？」

「ああ、俺がお土産で送った奴か…まだあったかな」

砂漠の方に旅立った時に助けたエルフの女の子から貰ったのだ、人間の人が掠いに捕まりそうになっていた所を助けた…砂漠…荒野…北斗なんたら拳に似ている三柳爆拳で。

お前はもう死んでいるとか言っちゃったなあ…

「そついえばお兄様！」

俺が黒歴史を思い出しているとシエスタが立ち上がって目の前に立った、目がキラキラしている。

「私も強くなつたんですよ！カリィ又様に勝てる位に！」

妹よ、お前は一体何者だ。

「少しはお兄様に近付いたと思います…ですから一度手合わせしましょう！」

ニツコリ笑ったシエスタは顎を引き体の前で手を組んだ、暗黒メイド闘法の伝統的な構え方だ…暗黒メイド闘法は使い手によりがらりと性質が変わる…俺も立ち上がり地面から身の丈を超える幅広の片刃の巨大な刀を錬金する…勿論刃はない。

「来い！」

「はい！」

すつと足を引いたシエスタの体が消えた、もう既に目で追えない速さだ…ならば目を閉じて気配を頼りに剣を振る。

「おつと、やりますねお兄様」

「…うん」

巨大な…鉄塊と言えるサイズの剣が軽々とハンガーで…しかも片手で抑えられてしまった。

何このチート妹。

「でも手加減し過ぎですよ」

そう言つてニツコリ笑つたシエスタは鉄塊をハンガーでバターをゆっくり切るように切り始めた。

「…うそーん」

固定化をかけていないとは言え…木製のハンガーで鉄を切るとか…いや俺も出来るけど…シエスタがねえ…

「あ、隙あります」

シエスタの姿が再び消えて俺の体にそよ風が当たった。

気配は後ろか！ ……か、体がピクリとも動かない…

「暗黒メイド闘法【大人しくして下さいご主人様】」

いやいや…なんだその技名は…暗黒メイド闘法なら使い手を知っているがそんな技使ってこなかったぞ…。

「ご主人様を思う気持ちから雷を生み出してお兄様の神経に流しました、貴方はもう動けない」

名前が負けてる！？ 名前よりずっと恐ろしい技だぞコレ！ 名前勝ちって奴なのか、これが噂の名前勝ちって奴なのか…！

「お兄様なら堪えてくれますよね？」

口を開こうにも開けずに返事が出来ない、シエスタはゆらりと構えを取った。

「暗黒メイド闘法奥義！【メイドカーニバル】！！」

なんだよメイドカーニバルって、祭りじゃないか。

そんなツツコミを頭の中できているとシエスタが俺に抱き着いた、どういう事なの。

「せめて天国を見て…それでは、逝ってらっしゃいませご主人様」
すつと恭しく礼をしたシエスタを見て頭の中は疑問符だらけだ、突如視界に大量のメイドさんが映った。

皆見目麗しく楽しげに仕事をしている、そして全身に衝撃が走った、メイドさん達が殴り掛かってきている…勿論かわせず俺は攻撃を受け続け遙か上空まで飛ばされ地面に叩きつけられた。

「グブホオア！？」

もう訳がわからない…拘束はとけたようでヨロヨロと立ち上がった。

「流石お兄様…カーリ又様を破った奥義すらも受け切りますか」

そこまで言って得意げに笑うシエスタ、両手をパンと叩いて…

「じゃあここまでにしますね！」

と笑顔で言い放った、えーっと…

第二話中編：ルイズのひ・み・つ

シエスタと別れて再び俺は館内をブラブラと歩く、どこにいらっ
か…どこがいいかな。

そつだ書齋へ行こう、新しい本が入っているかもしれないし暇を
潰すには持つてこいだな。

書齋の扉を開けると見覚えのある幼女が本に向かって一生懸命背
伸びをしていた。

後ろから目的であろう本を取つてやると幼女はゆっくりと振り向
いた。

「ようエルザ、この本でいいの？」

本を差し出してやるとエルザは頷いてそれを受け取つた。

「ありがとう、貴方が字を教えてくれてから本を読むのが楽しいの
よね」

別にそんな事は聞いてなかったが一応気のない返事をしてイーバ
ルデイの勇者を取つて適当な椅子に腰掛ける。

「よいしょよいしょ…」

「……………」

エルザが一生懸命俺の膝に乗ろうとしている、確かに俺は今身長
が2メートルある…登り難いのは解るがそもそも俺は登る物じゃない。

「よいっしょつと…ふう…」

「ふうじゃない、何俺の膝を玉座の如く占有してやがるかお前は」

「いいじゃない」

頬をタコのように膨らませるエルザ、これはこれで大分可愛らし
い。

「最近をよくシエスタとかお父さんとかの膝で本を読んでの」

親父の事だ、新しい娘が出来たと喜んで膝に乗せ始めたのだらう、
そついえば出会った頃よりエルザは背が伸びている…本当に吸血は
止めたのだらう、吸血鬼は吸血を止めると力を失い成長…つまりは

老化を始める。

人間として生きる事を選んでくれたと言う訳か、いい子だ。

「その…人の膝の上って暖かくて…その気持ちよくて…ねえいいでしょ？」

エルザが上目使いでこちらを見てきている…うーん、幼女に上目使いされてもなあ…

「ま、いつか、好きなだけ使え」

「わーい」

やる気のないわーいとか初めて聞いた、エルザは俺の胸に頭を寄せて絵本を子供らしいワクワク顔で読み始めた。

タイトルはマッチョ売りの老女…え？ 何ソレ？

話の内容を見るに巨大なババアがマッチョな男達を使って世界を侵略する物語で最後になるとマッチョな男達とババアが戦いを始めて…ダメだ酷すぎて見ていられない。

「はあ…どうなるのかしら…」

本を閉じたエルザは更にワクワク顔になっていた、何がそこまでエルザを駆り立てるのだろう…筋肉か？筋肉なのか？

「ねえエイブラム」

エルザがこちらを見上げながら名前を呼んだ。

「なんだ」

「貴方確か異世界から来たって言ってたわね」

「正確には異世界から転生した…な」

エルザは何かを悩みはじめ覚悟を決めたように口を開いた。

「エイブラムの前世、話してよ」

珍しいな、親父もシエスタも俺の前世には興味すら示さなかったと言うのに…

ま、話してやるか。

「俺は有り触れた異能者家庭に産まれた、愛されて…」

「ストップ、異能者って何？」

そう言えばエルザは異能者を知らなかったな…

「異能者つーのは骨格が金属で出来ている知的生命体だ、人間な
んかと比べ物にならない位強く賢い種族だ…続きいいか？」

「あ、うん、続けて」

多分分かってないんだろーなと思いつつ続きを話す。

「俺は特に頭がよくてな、二歳で新エネルギーを発見して世界に革
新を齎した、平和に暮らしていたが俺が五歳の頃…俺を危険視した
アメリカと言う国は俺を殺そうとした」

ズキンと頭に鈍痛が走る、思い出すといつもこうだ。

「それで死んだの？」

「それで死んでない、聞きたいなら黙って聞け」

目を閉じれば今でも鮮明に思い出せる。

「…親父が俺を庇って俺の代わりに殺された、人間のお袋も殺され
た」

倒れた親父は死んだと頭脳が判断した、俺の体は必死で走った…
心では親父を助けたいと思っていたのに。

荒野に潜伏していたら母親は拷問されて殺された。

「…俺は憎んだ、世界を憎んで憎んで剣を取った」

剣を握りいくつもの戦場を駆け抜けた。

「…そこで出会ったのが俺の初恋の女、ゼノヴィアだ」

白い髪に琥珀色の瞳、彼女はまるで絵本から抜け出てきたお姫
様のようなだった。

「お姫様って…」

「……………」

「大人しく聞きますからそんなに睨まないで…」

彼女はそこ抜けに優しくかった、荒んだ俺にも優しくしてくれて1
3歳という思春期真っ只中の俺が惚れるのも時間の問題だった。

「それから一年、俺とゼノヴィアは婚約者になった…忘れもしない

…あのクリスマスの日…結婚式を挙げるはずだったあの日…彼女は
…ゼノヴィアは…醜悪な化け物に姿を変えられていた」

ウェディングドレス姿のまま体のあちこちから膿を吹き出す肉塊

を生やしてゼノヴィアは涙ながらに俺に縋った。

「私を殺してくれ、愛するお前の手で私を殺してくれ…お願い…お願いだエイブラム…ってな」

強く握った拳から血が流れた。

「彼女は平和が好きだった、子供達が笑いあっているような平和が…ゼノヴィアは悪党でも救おうとした、だが悪党は所詮悪党…ゼノヴィアは化け物にされた」

忘れやしない、永遠に…英雄エイブラム・クルストを作り上げたあの悲劇を。

「俺は彼女にこう言った、君に一つ約束しよう、10年後の結婚記念日の今日…世界を平和にしよう、だから見ていてくれ。星に還っても見ていてくれ」

彼女はそこで笑ってくれた、最後にキスをして俺は彼女の心臓に彼女の剣を突き立てた。

「……だから俺は約束通り10年後の結婚記念日に世界を平和にした。憎き人類を滅ぼして…それから贖罪の時間さ、ゼノヴィアが産んだ二つの卵…俺の子供を大きくなるまで育てた」

「……異能者って卵産むの？」

「…はあ、異能者ってのは胎生型の異能者と卵生型の異能者が居るんだ」

続きいいかと視線で聞くとエルザは力強く頷いた。

「やっぱり自分の子供ってのは自分の命なんかより無量大数倍可愛くて大切でな、人類を滅ぼした贖罪をするなら…やはりその子供に重荷を背負ってもらうしかないんだ。俺みたいな奴だとな」

最低でクソツタレな父親だと俺は理解している。

「子供の…姉の方の記憶を封印して新たな記憶を植え付けた、母親を俺が殺した記憶だ。姉の方…リーナは怒り狂い俺に剣を突き立てた、何度も何度も切り刻まれた」

そこまで言っただけでクスリと笑う、そこでようやく俺の戦いは終わったのだ、リーナに背負わせた重荷は…リーナが子供を産む頃には消

えただろう。

リーナがやった事はただ最後の悪党を始末して世界を完全なる平和にしただけだ。

「ま、こんな所かな。そろそろ昼飯だ、先に行くぞエルザ」

「あ、うん……」

「何辛そうな顔をしてるんだ、俺は俺の生に満足している。それじゃ」

単純明解、俺は悪党になってリーナは英雄になっただけ……リーナが怒り狂った時俺は嬉しかった、見た事もなく触れた事もない母親の為にあんなに怒れるいい子なのだ。

俺の教育は間違ってたなかった、娘と息子は間違った事には違うと言えて正しい事をする異能者を手放して誉められるような異能者になつた。

俺が生きた意味もゼノヴィアが死んだ意味も……全てあの子達だ、あの子達が俺達夫婦が居て愛し合ったと言う歴史を次いでくれる、誇りを持って胸張って言える……俺は間違ってたなかったと。

「むっ……」

気がついたら笑いながら泣いていた、このままだと笑いながら泣ける変態と思われてしまう……涙を拭い食堂への扉を開ける。

「……ルイズ？」

「はむ？は、えひふははむひいはま」

「……飲み込んでからでいいよ」

ルイズがクツクベリーパイつまみ食いしてた。

「んくっ……エイブラハム兄様、早いですね」

ニコニコ笑うルイズ、つまみ食いはよくない事だが……まあ許してあげよう、お昼ご飯残したら怒るけど。

「朝食食い損ねて腹が減つてな、ルイズもやけに早いじゃないか」

「私はこれから魔法の勉強を頑張るので早めに食事を取りに来たんです……」

ルイズの目はやる気に燃えている……ついでに目の下には隈がくっ

劣等感を生み出す… そうした循環で育つ種、俺の前世であった世界を滅ぼしかけた種… 【絶望の種】生き物の暗い感情を吸って育ち、心に根を張って罅を入れてさらに美味しい汁を吸う種。

ここでルイズを殺しておかねばなるまい、さもなくばハルゲニアは…

「すまんルイズ…許せ」

腰に下げたナイフを抜き放ち高く掲げる、狙いは動脈と気道と脊髄…一撃で痛みを感じぬように…

《エイブラハム兄様！》

よせ…思い出すんじゃない。

《また酷くやられましたねエイブラハム兄様》

思い出すな。

《今治癒魔法をかけてあげますね》

思い出すな！剣先を鈍らせるな！！俺の思い出の中で…そんな優しく笑わないでくれルイズ！

《エイブラハム兄様…私魔法が使えないの…失敗ばかりして…使用人にもゼロって》

俺の手からナイフが落ちて床に音を立てて転がる。

「殺せない…できない…俺には無理だ…」

ルイズの頭を撫でようとして手を止める、ダメだ、殺そうとした人間が愛情にかまけて何をやってる、手を引っ込めナイフを拾う。

ルイズに貸し与えられた部屋の机の上には大量にプリミル関連の書籍とメモを取ったであろう羊皮紙が山となっていた、羊皮紙に手を伸ばして努力の成果を見る…羊皮紙に赤茶けた染みがいくつもある、ペンを見ると血塗れだ。

横目でルイズの手を見ると綺麗な手は血豆と絆創膏だらけだ、ルイズはここまで足掻くのか、努力ができるのか…杖を取り出しルイズに向ける。

「キュアル」

詠唱をリキャストして高位回復魔法をかけてやる、血だらけの羽

ペンを握りルイズが書いてある羊皮紙の途中にルーンを書いてやる、俺からのプレゼント…というかお詫びだ。

内容は【エオルー・スーヌ・フィル・ヤルンサクサ オス・スーヌ・ウリユ・ル・ラド・ベオーズス・ユル・スヴユエル・カノ・オシエラ・ジエラ・イサ・ウンジュー・ハガル・ベオークン・イル】

「…俺には使えなかったが君になら使えるだろう」

巻末に村の跡地で待つと入れておく、ルイズはこの呪文を使うだろうか…自分が行った罪には贖罪をしなければならぬ。

これで死んでも…まあ仕方ない事だ。

第二話中編：ルイズのひ・み・つ（後書き）

あれっすわ、やめますね。

安価で行き先決定…全然人きませんしw

第二話後篇・新たな役職リーヴスラシル（前書き）

もじけえです

第二話後篇：新たな役職リーヴスラシル

「来たか」

いつも纏っている黒い甲冑に着替え終わった所でルイズが馬を走らせているのが見えた、相棒たる巨剣を背中に担いでルイズを見据える。

「エイブラハム兄様！なんでわざわざこんな場所に！」

ルイズの顔に浮かぶ感情は困惑、そして期待：え？期待？なんでだ？…まあいい、俺は俺の贖罪を果たすだけだ。

「俺が書いたルーンは覚えて来たか？」

背を向けて聞いてみる。

「え、ええそれは…もちろん」

やはり勤勉だな、溺れる者藁をも掴むと言った次第ではあるが…今回はその藁が城一つ浮き上がらせる浮力を持っている。

「よし、じゃあその魔法を俺に向けて撃て」

「え？いいの？」

口調が素になりやがった、前世のようにクツクツと悪党っぽく笑って見せる、唇をできるだけ釣りあげ目は相手を睨むように釣りあげ…かと言って眉間に皺をよせない、最後に顎を引いて笑うと同時に肩を揺らす。

「かまわんさ、所詮お前の魔法だ…俺に当たると思うか？」

当たるな、間違いなく。

ルイズのムツとした顔に内心申し訳なく思う、俺の自己満足につき合わせて怒らせてしまった…嫌われたかな、まあそれも一興…前世じゃ世界から嫌われたんだ、今更遠慮する必要はないと思う…俺としてはやっぱり悲しいがな。

「後悔しないでくださいね！」

息を吸い込み、魔法を詠唱し始めるルイズ…恐ろしいほどの魔力がルイズの体から噴き上がっている…どうやら魔法は発動するよう

だ、やはりアルビオンで黒髪の女からスリ盗った文献に書かれていたこの呪文間違いないく虚無であり…そして敵も伝説と言われる虚無の使い手らしい。

「【エクスプロージョン】！！…あれ、私なんで呪文の名前を…」
俺の足元に移動した巨大な魔力の奔流が圧縮されていく…来るか、伝説。

剣を引き抜き力を解き放つ、目の高さに巨剣を構える…魔力の巨大な爆発が……来た！その爆発に向かって剣を同時に二回振る、剣が交差した場所の空間が切り取られ黒い穴が出現する、ルイズが発生させた爆発はそれに飲み込まれ……馬鹿な、タイムパラドックスが消し飛ばされた。

残った爆風に巻き込まれて水平に吹き飛びタルブの草原を抉る。

「こ、ここまでか…」

目標の俺以外には全くといって傷すらない…なんだこの対軍団用魔法は…俺の世界でもこんな高度な事できる魔術師は魔王とかその配下の円卓の騎士位だぞ。

「ルイズ……おいルイズ！！」

軽減したとは言えポロポロの体で立ちあがると別の所に居た…
…Why?ここどこ?自慢の糞つたれの脳味噌はここがアルビオンだと告げている…何故?頭脳は回答を寄越さない…情報不足だったのはわかっている。

「あ、あの！」

後ろから声がかげられた、剣を手にゆっくり振り向くと杖をこちらに向けたエルフの少女が居た……アルビオンにエルフだと?どういう事だ…杖を向けているって事は俺とやり合う気か?

「私と契約してください！」

杖を俺につきつけたままそんな事を言ってきたやつた…

「…傭兵は廃業した、戦争なら他当たりなエルフのお嬢ちゃん」

「!…何故私がエルフだと…」

「帽子から耳がはみ出てる」

エルフの少女は慌てて帽子を押さえた、実の所こんな美人はエルフ位にしかないからである、カマかけではあるがどうやら見事に引っかかってくれたみたいだ。

「はあ…で、契約ってなんだ？俺は何をすればいい」

「契約してくれるんですか？」

「その為に呼んだんだろ、サモンサーヴァントでな…」

ようやく頭の中で整理がついた、おそらくこの子は何かの呪文書を読んでサモンサーヴァントをしたくなってやったら俺が出て来た、と言うわけだろう…足元にサモンサーヴァントの後を見つけた、つまりは俺はいつの間にか彼女の使い魔になったらしい…エルフの使い魔かあ。

「えっと…それならき、きききき…キスを…」

…なんだ、サモンサーヴァントってキスがいるのか？目の前で真っ赤になっているエルフを眺める、なんと言うかアレだね、胸でかいね。

「早くしろ」

彼女にひざまずき目を閉じて唇を前に出す、そして触れるか触れないか位の感触が唇に当たる。

「…ふう、ごちそうさまっ！？アッチィ！」

胸に焼けた鉄を押し付けられたような熱さを感じるがすぐに収まった、鎧を外すと胸にリーヴスラシルとルーンで描かれている。

「なんだコレ……」

弱った、なんでこんな所にルーンが刻まれるんだ…

「あ、あの！わ、私ティファニアと言います、貴方は？」

先程から俺にビビリまくっているエルフが自己紹介してくる、どうやらティファニアと言う名前らしい。

「俺はエイブラハム、よろしくなティファニア」

「はい！テファって呼んで下さい！」

ここまでビクビクされると傷つくな…まあかわいいからいいか。

第三話：零とルイズの贈り物

「ふーん…ほー…へー……」

場所は変わってここはタルブの倉庫、俺はガチャガチャと音を立てながら目の前の艦載機、零戦を弄る。

「あ、あのエイブラハムさん、いつになったら貴方のお家に……」

後ろではティファニア…いやテファアが困ったような声をあげている。

「んー後少し、エンジンの擦り合わせが終わってからな」

俺はテファアの事などもうどうでもよく零戦を好き勝手に弄っていた、当時の足りない技術で精一杯作られているのがわかる…そしてこの操縦桿、緊張していたのか手汗の形がくつきりと浮かんでいる。

「よし、離れてるテファア」

最後の部品を組み込んでプロペラを力一杯回した、すると低い駆動音をあげてプロペラがゆっくり回り出した。

テファアを後部座席に座らせて自分もコックピットに乗る、零戦の足元にはカタパルト…零が急加速して揚力を得て再び空に舞い上がる。

「わあああ…空飛んでいます！この大きな龍が！」

零の風防に張り付きながらテファアは歓喜の声をあげた、大分かわいらしい。

「いい眺めだろ？これならタルブまですぐさ…ほら！見えてきた、鍊金！」

城の隣を鍊金して滑走路を生み出す、そこに緩やかに着陸してエンジン止め、まわりにはずっと滞在していたのかヴァリエールの人々が見える。

「エイブラハム兄様！」

ルイズが胸に飛び込んでくる、見た目より遥かに軽い体を受け止めて頭を撫でてやる。

「心配かけたな、俺はこの通り無事だ」

そう言うとルイズは子犬が甘えた時に出す鳴き声のような声をあげた、かわゆいのう……。どこにも嫁にやりたくないのう……。はっ！俺は何を！？

「……と忘れてた、紹介するよ」

テファの背中を押して前に出す。

「俺の御主人様だ」

「ティファニアです！よろしくお願いします！」

ティファニアの声が半オクターブ上擦ったがそんな事は気にならない位の沈黙が辺りを包んだ、俺は首を傾げる。

「ええええ……！？」

数秒後ヴァリエール三姉妹とシエスタの悲鳴があがるのだった。訳を説明するのに一時間程かかってしまった、テファには話が長くなるから部屋で休むか庭で蝶でも追い掛けるように頼んだ。

勿論テファは蝶を追い掛けてる、見た目がメルヘンなら行動もメルヘンだった、現実的に考えるなら温暖な気候のトリスティンの花畑に目を引かれたただだろう、特に家の花畑は王家に勝るとも劣らぬ美しさだ。

「へえ、エイブラハムつてはあんな儂げな子が好みなのね」

同じく儂げなカトレアがそんな事を言いながら俺の頬を突いてニコニコ笑っている、この背中を滑り落ちる冷や汗は何？

「……………フン」

エレオノールは何が気に入らないのか知らないが不機嫌そうだし、そしてルイズも同じように不機嫌だ。

ここに居てはあらぬ疑いを吹っかけられてしまいそうなのでテファをシエスタに任せて俺は部屋に戻る、シエスタは嫉妬するかもと考えていたが妹が出来たと張り切っていた。

「ふう……」

まったりと部屋の中で紅茶を楽しんでいると不思議とため息が出た。

感じているのは祭から帰ったようなけだるさだ、平和だ、本当に平和だ…目から溢れた塩水を拭っていると扉が数回叩かれた。

「どーぞ」

「入りますね」

部屋に入ってきたのはルイズだった、杖を持って嬉しそうにニコニコ笑いながら入ってきた。

「お兄様！成長したんです！」

椅子を進める前にそんな事を言われて思わずルイズの胸を見てしまった、俺の部屋に閃光と爆音が満ちて俺はコンガリと焼けた。

「胸じゃなくて魔法です、見て下さい！フライ！」

ふわりとルイズが浮いて俺の部屋の中を漂っている。

「……頑張ったな」

「はいっ！」

嬉しそうなルイズの顔にズキンと痛みが走った、似てる、アイツに似てる、こイツモ俺ガ……

……して……

……私を……殺して……

「ぐっ！」

昔の情景がフラッシュバックし思わず額を押さえる。

「あ…具合が悪かったんですか？」

喜色満面だったルイズの顔が陰り心配そうな声が聞こえた。

「大丈夫だ、頭痛がしただけだ」

気を取り直してルイズに椅子を進めるとチヨコンとルイズは椅子に座った。

「それで…どうだった？君の両親は」

「凄いい喜んでくれましたよ！あ…そ、それですね…エイブラハム兄様に御礼をと思ひまして…」

モジモジとルイズは体を動かした、そうして差し出されたのは毛糸の塊……いやこれはマフラーだな、お転婆なルイズにもこんな可愛い趣味があつたんだなと関心する。

「似合うか？」

首に巻いて笑ってみるとルイズの顔がばああつと明るくなった後シユンとなった。

「…あの、下手くそでごめんなさい」

「何を言う、例え金で出来た服があるうとルイズが作ってくれたコイツに比べれば小石程の価値もない」

嘘ではない、俺は金銀財宝なんかよりもずっとコイツのありがたい、一生懸命編んでくれたのだらう、編み針が幾度となく刺さった手を見て納得してくれた。

「ルイズ、本当に嬉しいよ。ありがとう」

ニツコリ笑ってやるとルイズは顔を朱に染めて頬に自分の手を当てた。

包帯だらけの手、何と言うか…ルイズがぶきつちよなのは知っているが…とてつもなく嬉しい、杖を取り出してキュアの呪文を手にかけてやる。

「兄様、私もつとつと努力して凄いメイジになります、もしたら…したら兄様に…えっと、その…」

歯切れの悪いルイズ、俺が首を傾げているとピューツと部屋から逃げてしまった、全く持って訳わからん。

「ん…凄いメイジになって俺に…ま、まさか…」

いや、有り得る、何しろカリー又様の娘だ。

「ヒイイイ…」

決闘を申し込まれるかも知れないと言った結論を出した俺は爆発の威力を思い出して部屋の隅でブルブルと震えるのであった。

そしてその夜の晩餐会でルイズは必死に俺の結論を否定するのだがカリー又様は…

「流石私の娘、格上にも立ち向かっていくとは…」

目尻に光る物を出しながら娘の成長に感激していた、被害を被るのは俺なのだが……ちなみにちょっと前にカリー又に何故俺を目の敵にするか聞いてみた所。

「邪悪だから」

と否定できない答えを頂いた、人類八十億人を滅ぼした俺は転生しても魂に恨みがこびりついている、だから邪悪に見えるのだろう。さあ、明日は魔法学院に編入しなくてはならない、早めに寝ておこつ。

第四話：久しぶりの悪行（前書き）

もじけえよ、でもここからきな臭くなってくるよ

第四話：久しぶりの悪行

トリステイン魔法学院での編入を終えて俺は男子寮のベッドに寝転ぶ、やべえ俺の部屋よりいいベッドだこれ。

「ふー……」

堅苦しいスラックスとYシャツを脱いで部屋着に着替える、こう言った服装は好かない、俺は柔らかい絨毯の上でバイオリンの音に合わせてくるくる踊るよりキャンプファイアーの回りで粗野な男の外した歌声で適当に荒々しく踊る方が好きだ。

閉話及第：しかしこの学院はかなりきな臭い、そこかしこにレコン・キスタの残り香がある、トリステインからは長く離れていたから俺は内情とかにはさっぱり詳しくないが：どうやらトリステインはかなりまずいようだ。

「トリステインには花はあっても杖はない：：だったっけか？」

鳥の骨と呼ばれる枢機卿が今は政権を動かしているが：上手く機能していないのが現状だ、新聞を読むに：新聞と言っても瓦版みたいな物だが：アルビオンは王軍が優性らしい、だが俺は確信している、王軍はその内劣勢になりいずれレコン・キスタに敗れると。

学院内の掃除をいつ始めるか考えていると部屋のドアがノックされずに開いた。

「どうしたんだエルザ」

親父に経験を積みと言われて俺と一緒に学院に送られたエルザがいつも違う学院のエプロンドレス姿で立っていた。

だがエルザは上から下まですぶ濡れだった。

「先輩達がガキに食べさせる賄いはないって水をかけたの」

口をへの字に曲げ涙を堪えながらエルザはそう言った、イラツとしながら立ち上がりドアを閉めてエルザを椅子に座らせる、箆笥からバスタオルを引っ張りだしてエルザに被せる。

「風邪引くから着替えなよ、寒いだろ？」

どうせこの様子だと部屋も追い出されてそうだが、そう考えながらエルザの髪を拭いてやる、エルザは黙りこくり大人しく拭かれている。

「酷い奴らだな…だが、今回はお前の勝ちだなエルザ、よく泣かなかつたな、偉いぞ」

そう言つて頭を撫でてやるとエルザは俺に抱き着いてきた、そのまま声を殺して泣いている。

元吸血鬼のエルザははつとなる程美しい、恐らく女の嫉妬であるう…性根が醜い女は見た目も醜い、いくら化粧でごまかしたとて醜い者は醜いのだ。

エルザが落ち着いた頃に食事を出してやる…と言つか俺の夕飯だ、部屋まで運んで貰つてあつたが食べ忘れていたのだ。

すっかり冷めてしまつていたから魔法で温めなおした。

「エルザ、今日は俺の部屋に泊まっていけ。今夜は寒くてな…人肌が恋しかったんだ」

モグモグと白身魚のムニエルを食べていたエルザはコクンと頷いた。

エルザが寝付いた頃、俺は剣を片手に窓から飛び降りた、目指すはメイドの宿舎。

「いっくよ〜 いっくよ〜 エイブラハムはいくよ〜 家族を泣かせた奴を懲らしめに〜」

怒りではちきれそうな頭を静める為に歌う。

「山越え谷越え地獄越え〜 涙の代償払わせに〜 足かな？腕かな？顔かな？それと〜もいつのちっかな〜 メイドの諸君！こーんばーんわー！！」

宿舎の扉を蹴破ると轟音でメイド達がバタバタと現れた、皆ポカーンとしている。

「唐突だけど隠れんぼをしよう、君達は隠れる、俺が鬼だ…30秒あげよう…さあ逃げて逃げて鬼に捕まったら酷い目に会うよ」

皆困惑してる中、リーダーらしきメイドがゆっくりと前に出てき

た。

「ミスタ・タルブ、隠れんぼなんかより私と楽しい事をしませんか？」

いい度胸をしている、エルザの記憶を見た所…コイツがリーダーとなつて虐めているようだ。

「20…19…18…」

「あ、あのミスタ・タルブ？私だけじゃ不満なら…他の子達も一緒に…ね？皆？」

「3…2…1…はい、みつけた！」

リーダーの首を引つつかみそのまま吊り上げる、他のメイドはキヤーキヤー悲鳴をあげている。

「捕まつたからオシオキです」

剣を引き抜きリーダーの臍の下…子宮に向かって突き刺してぐりと動かす。

「屑に子供を作る資格も、産む資格もございません」

剣を引き抜くとポロリとぐちゃぐちゃになった子宮が一緒に出てくる、獣のような悲鳴をあげているリーダーを固まって怯えているメイド達の足元に叩きつけてにんまり笑う。

「どうした？逃げないのか？」

「ひ、酷いです、なななな…なんでこんな事を…」

「お前らエルザ虐めたじゃん、当然の報いだ」

そう言つてやると気の強そうなメイドが前に出て俺に怒鳴つた。

「やり過ぎです！ちよつと水をかけて外に出しただけじゃ…」

「ほお？吹雪が荒れ狂う真冬の寒空の下に小さい子供に水をぶっかけて外に追い出すのがやり過ぎじゃないと？」

エルザが俺を頼る事を考えつかなくなつたら今頃凍死していただろう、エルザの凍死死体を見てコイツら笑っていたであろう事は容易に予想できる。

「ならば貴様らにも同じ事をしてやるうではないか！ウォーター！」
杖を引き抜いてメイド達に水をぶっかける。

「レビテーション！運が良ければ助かるぞ！そら行け！」

遙か遠くの森に投げ捨てておいた。

どうせ生きて帰ってこれまい…さて地面でのたうちまわってるコイツはどうしようか…ま、この時代なら子供が産めない女なんざゴミ程の価値もない、ビバ男尊女卑だ、もうまともに生きられないであらうから傷を治して俺はそのまま帰った。

部屋に戻るとエルザが静かに寝息を立てていた、殺人で荒んだ心が癒されていくのがわかる、エルザの頭を撫でて俺は予備の毛布をクローゼットから引っ張り出して椅子の上で毛布に包まって寝た。

「エイブラハム、起きて」

ゆさゆさとエルザが俺の体を揺すっている。

「チューしてくれなきゃ起きない」

ちよつとふざけてみた、思いきりパンチされた。

「起きた？」

「バツチリだ」

サムズアップして見せるとエルザは苦笑した、どうやら元気になつてくれたようだ。

「ちよつと耳貸して」

エルザが指先でちよいちよいとやっている、屈んで耳を差し出して見ると首筋に吸い付かれた。

驚いて体を離れた時にはエルザは既に逃げ出してドアノブに手をかけていた。

「き、昨日のお礼だから、勘違いしないで！」

そのままバタバタと部屋を飛び出していったエルザを見送り、俺は赤面した、純情な少女のように…こんな時に恋愛経験が必要になるとは…情けない。

第五話：エイブラハムと青タイツと微笑み三歩（前書き）

さあ、ハルゲニア壊滅へのカウントダウン開始だよ！

第五話：エイブラハムと青タイツと微笑み三步

今日は待ちに待ってない召喚の儀：正直病欠したいです：だが残念ながら出なくては進級できなくなるため一年分学費が無駄になる、この学費は安くないのだ。

肩を落としながら俺は外の庭に出る、コルベールが張り切って説明していた。

「エイブラハム！」

ぴよこぴよことカトレアが手を振っているので俺も手を振り返す、胸がバインバインって跳ねてるのに気付いたらカトレア、周りの野郎どもが前屈みになってるぞ。

「てな訳でして：ミスタルブ！まずは貴方から召喚して貰いましょう！」

コルベールに指名されてダラダラと前に出てダラダラと呪文を読み上げて猫位の世話しやすい動物がいいな、なんて考えながら杖を振り下ろした。

「うお！？どこだここ！？」

なんか赤い槍持った全身青タイツの男が召喚された。

「あー：コルベール先生、まさか：」

コクリとコルベールは頷いた、つまりはコイツと契約する訳だ、キスする訳だ：男と。

「よう槍使い、ちよつといいか」

槍を抱えて困惑している青タイツに話しかける。

「：ほう」

「：ふむ」

目があつた瞬間お互いの力量を見抜いた、コイツは伝説級だ。

「貴様：ただの小僧じゃないな」

ゆらりと槍を構える青タイツ、こちらも背中から剣を引き抜く：

「お前もただの青タイツじゃないな、お互い化け物か」

「これは甲冑だ！」

青タイツが突っ込んだ、中々いい腕をしている。

お互い同時に武器を下ろした、今やったら確実にどちらかが死ぬ、それはつまらない。

「青タイツ、あんた名前は？」

剣を背中に仕舞って尋ねる。

「ランサー…とでも呼んでくれ、しかし何故俺はここに…」

急に呼び出された事に困惑しているらしい青タイツ…もといランサー。

「まあ、落ち着け。後で説明してやる今は…我が名はエイブラハム・ヨシユア・クルスト・ド・タルブ…」

契約のコモンを唱えてランサーにキスをする、オウフ…気持ち悪い。

「て、てめえ何しやがる！ってあつっ!？」

ランサーの額にルーンが…ルーンが…ルーンじゃなく犬と刻まれた、すまないランサー。

「おいこら！説明しやがれ！お前はマジモンのホモなのか！」

ランサーは怒り心頭と言った感じだ、まあそうなるだろうな。

「えつとな…ここはどこだか解るか？」

「あん？そら地球のどこか…って月が二つだと？」

「よし、確定だな。いいかよく聞けよ」

ランサーに色々と説明する、元来頭はいいようで理解は早かった。

「成る程…つまり俺は貴様のサーヴァントとなった訳か…」

理解が早くて助かる、だがやっぱり不服そうだな。

「ま、サーヴァントと言っても四六時中一緒に居る訳でもないしな。

ランサー、あんたは限りなく自由にしてくれ、だが三つ約束しろ」

ランサーの前に指を三本立てる。

「一つ、むやみやたらに殺すな、殺していいのは野盗とかそんな奴らだ」

「分かった」

一つ目はランサーも了承してくれた。

「二つ、小遣いはやるから何も奪うな」

「ほお、くれるのか。嬉しいねえ」

二つ目は寧ろ嬉しいようだ、早速手を差し出してきたがあげるとそのままどっかに遊びに行く危険性があるからまだ渡さない。「三つ、俺の命令には必ず従ってくれ」

「ハツハツハ！それは構わねえさ。俺は元々騎士だ、主君の命令には基本逆らう事はしねえ」

初耳だ、どうやらランサーは元々騎士らしい、どこの騎士だったのだろうか…

「ヴァリエールも人を召喚したぞー！」

「うおおおお！今年はどうなってるんだ!？」

「今度はむさい青タイツじゃなくて銀髪の綺麗な人だ！」

有象無象の声の中から嫌な単語を一つ聞き取った、銀髪の綺麗な人？ま、まさか…

油の切れたブリキ人形の如く首を動かすと嫌な予感が的中した。

「あ、クルストさんだあ。お久しぶりです」

腰まである銀髪を風に靡かせ、真紅の瞳をキラキラと輝かせる女、100人に聞いたら100人が美人と答えるクラスの美女、その名は…

「三柳…一葉……」

前世で一番苦手だった人物の三柳一葉、しかも全盛期のとんでもない強さを誇る時の一葉だった。

数回戦ったがああの一葉とは決着が着いた試しがない。

「クルストさあん、ここどこなんですか？あ、なんとなく分かってきました、貴女が私のご主人様ですね、どうでもいいけどお腹空きませんか？」

…俺が苦手とする原因を分かっただろうか、一葉は頭の中が花畑どころか天国なのである。

カトリアは一葉にキスをされて目を白黒している、俺もこれから

起こる事を考えて目を白黒させた、全く持って冗談じゃない…微笑み三步の一葉…ニコニコ微笑んでいて強くなさそうに見えるが戦えばどんな達人でも三手目に斬られると言う意味だ、ちなみに趣味が散歩と言う事も皮肉っている。

「一葉：あんたなんでここに居る」

頭痛を抑える為に額に手を当てつつそう訪ねてみる、これから行われる会話の為だ。

「…今回は真面目に行きますね、クルストさん…もう一度貴方の力を貸して欲しいのです」

やっぱり面倒事だった、俺は昔の顔で一葉を睨む。

「十五回…あんたらに窮地を救われた数だ、それには感謝している」感謝はしている、おかげで俺は人類を殲滅する事ができ、結果地球を元の環境に戻し全ての生物が無用な滅びを迎えるのだけは避ける事ができた。

「だがな、俺は死人だ、死人は生人を救う事は出来ない、そして世界もな…あんたらの知ってる英雄エイブラム・ヨシユア・クルストは死んだんだよ、ここに居るのはただのエイブラムだ、クルストなんて呼び方はされてない」

それでも一葉はニコニコ笑っている、多分一葉の事だ、俺がまた助けてくれると思っているのだろうか…正解だ。

「…で、なんなんだ問題つてのは」

「えつとですねー、地球が吹っ飛んじやいました」

「……………俺にどうしろって言っんだ」

「どうすればいいんでしょうね？」

ニコニコ、ニコニコ、ニコニコ。

つまりはどうしようもないから俺の脳味噌を頼りにきたって所か…ま、これ位ならいくらでも構わない。

「受け入れ先を探さないとな、星の再生の魔術の術式は基点がないと基本不可能だからな、ま、その基点を簡略化する方法もあるにはあるが…それを行うには新ルーンの解明術式の応用とマナイオン陽

性化結界と…後は208式結界の三型をアレンジして…んーまあ
基点を見つけてこい」

まあこんなもんでいいだろう、他の奴らの召喚でも眺めながら俺
は地面に腰を降ろした、隣に一葉も座っている…いやいや、早く帰
れよ。

「あははは、私が最後の地球生き残りだからここで頑張らないとい
けないんですよね」

……何だって？

「おい、俺の息子は？娘は？」

「えっと、ジエームズ君と円ちゃん…じゃなくてリーナちゃんだし
たっけ？そう言えば貴方が死んでからの事を話さないといけません
ね…酷い物でした」

そう言っで一葉は苦虫をかみつぶしたような顔をした後ゆっくり
と口を開いた

第六話：悪党の最後と地球のそれから

「行くぞクルストオオオオオオオオオオオオ！お母さんとお父さんの仇だああああ！！」

目に憎悪の炎と悲しみの光を灯らせて突進してくる白い髪の女の子：俺が世界で最も愛した女の娘：そして俺の大切に可愛い子供である、手には元々俺が使っていた宝具。ピースメイカー：大切な者を犠牲にして平和を齎す穢れた聖剣。

「来い！佐伯円ああああああ！！」

娘に偽物の記憶を植え付け実の父親たる俺を討たせようとしている：最低な父親だ、それ位理解している、理解している全て計算づくだ、円：いいや本当の名前はリーナ、リーナが人類を滅ぼした悪党たる俺を討つてこの止まらなくなった戦争に終止符を打つ：リーナは悪党の子じゃなくて英雄としてこれからも長く語り継がれる存在になる。

それに：俺は嬉しい、若い頃ならリーナに負けなかっただろうが：今はリーナのが強い、リーナに俺ほどの技術はないがお前の母さん譲りの頑丈な肉体と優しい心、そして俺の剣技で悪党たる俺を超えられる。

思えば長かった、五歳の時に復讐の為に戦いを初めて十三歳の時にお前の母さんに出会って嗜められて化け物にされたお前の母さんを殺害し：理想を継いでから、気付けばもう三十三歳だ、人間としては若いだろうが異能者で言えば死を待つだけの老人：リーナはもう十九歳か：いい人も見つけたみたいだし：俺はもう思い残す事はない、だからこのまま全力でリーナを迎え撃つ、全力の俺が負ける事：リーナは次に進める。

これが父親として愛しい子供に残せる最後の贈り物だ。

「とどめだ！」

手から使い慣れた白銀の巨剣、プラチナム・ラヴァーが弾かれて

空高く飛んで行く、予備の小剣に手を伸ばすがそれより早くリーナが接近してくる、もう解つてた最後だ。

「これが…お父さんの剣だ！」

吸い込まれるように切つ先が俺の胸に迫る、この技は剣が描く軌跡からスワローなんて呼ばれている、ピースメイカーが甲冑を砕き胸の筋肉を押しつけアバラを叩き割り見事に俺の心臓を貫いた。

「ぐっ！？…見事だ」

異能者を言うのも厄介なもんで心臓が無くなった位じゃすぐには死なないし数分間は余裕で動ける、目の前には何故か悲しそうなリーナの顔…そう言えばそうだったな、佐伯円とエイブラム・Y・クルストは友達でもあったな…

胸から剣が引き抜かれ俺は地面に倒れ込む、ああ…いてえな畜生。…何故だクルスト、何故お前の剣から敵意を感じない…むしろ家族に向けるような愛情を感じた」

まだ佐伯円であるリーナがそんな事を聞いてくる。

「いずれ解るさ…そろそろ俺がかけた魔術が解ける……」

術者たる俺が死ねば消える類の魔術だ、佐伯円が頭を抱えて目の前で蹲っている…大容量記憶のフラッシュバック、あれは気持ち悪いんだよな。

「あ、わ、私は…」

リーナに戻つたらしく、手から剣が落ちて甲高い音を立てた、リーナの瞳には後悔と懺悔と…

「悪いなリーナ、こんなでかいもん背負わせちゃまって」

畜生、最後まで悪党でいようなんざ無理だ、娘のこんな顔見ちまつたら…

「お、お父さん…あ、あああああ…私なんて事を…」

「大丈夫だ、もう悪党の娘なんて人間に苛められる事も…友達ができないなんて事もないんだリーナ、お前は今日から英雄だ……げほっ！げほっ！」

止まった血が喉から溢れて黒い甲冑に掛かる。

「待つて、今治療を…！」

「止めとけ、資源の無駄だ」

「喋らないで！」

リーナが胸の傷にガーゼを当て始める、リーナには俺譲りの頭脳がある、もう答えは出しているはずだろうに…ピースメイカーは宝具らしく様々な特性がある、たとえば…ピースメイカ で着けた傷は治らないとかな。

「最後に聞いてくれ…」

「お願いだから喋らないで…私は天才なの、こんな傷ぐらいすぐに治して…また三人で一緒に…」

俺の頭脳を引き継いだリーナは間違いなく天才だ、全ての事象に見ただけで答えを下せるほど…

「俺はな、ずっと人殺しを続けてきて…人並の幸せなんざ無理だっ
て思ってた」

「……………大丈夫だから…最後なんて言わないでお父さん、昔みたい
に…一緒に…」

リーナの泣きそうな声…この子は本当に優しく育った、俺はロクに育児なんか出来なかつたと言うのに恨むどころかこうして言葉をかけてくれる。

「だけとお前たちが産まれた時は…嬉しかった、こんな俺でも可愛
い子供を抱けた、あの頃のお前は泣き虫で…いかな、年を取る
と思ひ出話をしたくなる…」

「もつとたくさん出来るから、お願いだから死なないでお父さん…」
もう泣いているのだろうか、目がかすんでよく見えない、それで
もリーナの顔ならすぐ出てくる、声を聞いただけでどんな表情をし
ているのかわかる。

「お前達は俺の誇りだ、そしてお前達だけは忘れないでくれ、俺は
ここに居たと…愛している、リーナ、ジェームズ…俺が必死に掴み
取った平和の中で…達者に暮らせ」

もう言いたい事は言った、丁度時間切れのようで意識が遠のく、

手を虚空に伸ばすと誰かに手を握られた。

「死なないでよお父さん…私もつとたくさんお父さんと…」

その言葉を最後まで聞く事はできなかった、俺はそこで死んで…目が覚めるとハルゲニアに居た。

「そこまでは知っています、ここから、ですよ」

思い出話をしたら一葉に諫められた。

クルストが死んで一週間が立った、悪党としての名を馳せていたクルストだ、みんな喜ぶのだろうと思っていたが泣いている人のが多かった、人類の僅かな数万程の生き残り…全てクルストに助けられた善良な人々だ、彼らはクルストの為に涙を流していた。

クルストは人類を殲滅したのは俺だあ！なんて嘘を吐いていたがなんの事は無い、人間は自ら滅んだだけなのだ、異能者の国たる日本に全ての核を撃ちこもうとした所、クルストの妨害によって自国に到着、結果滅んだ。

「ふう…」

出るのはため息ばかりだ、クルストが誰にも知られずに解決していた問題が全て私達に向かってきていた、国家総動員で当たっているがまだ人手不足は否めない、あの人はとてつもなく優秀だった…それこそ人間が世界規模で恐怖を抱く位に。

「母さん、あまり無理するなよ、僕ももつと手伝うから…」

息子の双葉が珈琲を運んでくれた、私はそれを一口飲んでからにっこりと笑う。

「ありがとう、でも困って泣いてる人がいますから」

そう、クルストの行動理念だ。

困ってる、泣いている、苦しんでいる、俺にとっちゃそれだけで十分助ける理由になんだよ、でしたっけ？ 偽善者、偽善者と揶揄

する人間にそう啖呵を切って見せた、その矮小な人間には理解できなかったみたいだが…閑話及第。

再びデスクに向き直る、あるのは書類の山と山、木で出来ているデスクがきしむほどの量だ、うんざりして閉口しながらペンを取る。「双葉君、そう言えばリーナちゃんは？」

クルストの才能を全て受け継いだ彼女が加わってくれば大分楽になるのだが。

「さあね、プラチナム・ラヴァーを担いでどこぞに旅に出たって聞いたけど…ジエームズの方は世界各地の絶望を倒しているよ」

ジエームズ、クルストを超える者と噂されている少年だ、クルストの理想を理解し、その真の目的の為に世界各地を回っている、まあ真の目的と言っても困った人を助けるだけだけど、それでもジエームズのおかげで私達は大分助かっている。

戦争によつて疲弊した日本軍に絶望を討伐できる力は無い、私達は国家から動けずに戦いに行く事はできない…私達はクルストに頼りっぱなしだと思う、彼はもういないのだから自分達でなんとかできるようにならなくては。

「一葉元帥！！一葉元帥はおられますか！！」

激しく扉が開け放たれて青い髪の女の子が飛び込んでくる、確か彼女はアデイとか言ったかな、最近士官になったばかりの少尉…第十小隊所属の。

「はい、ここにいますよ、どうしましたか少尉」

書類の山から顔を出して彼女に見えるようにするとアデイは嬉しそうに顔を明るくした、私に駆け寄ってきて…

「敵襲です！月軌道上で第四第五艦隊が迎え撃ってますが状況は好転せず！陸戦準備とのことです！」

「なっ…まさか…どこの識別ですか！」

「銀河帝国です…」

不味い不味い、銀河帝国と言えばこの銀河で一番の勢力を誇る大軍団だ、過去に一度地球への進攻があつたがその時に止めたのがク

ルスト：彼がいなくなったと知って再び攻めてきたというのだろうか、官品の居合刀をひっつかみ急いで戦闘服に着替える、双葉はアデイを連れてかけ出して行った。

「ふうー…」

年で鈍った体に徐々に活を入れる、いつ振りだろう刀を振るのは、いつ振りだろうか戦いに赴くのは…年涯もなくわくわくして、久しぶりの戦いの感覚に高揚する。

外に出ると陸軍が私の指示をまだかまだかと待っていた、復興支援ばかりさせていたから彼らも体が鈍っているのだろう。

「全陸軍に告げます、ようやく訪れた平和を乱す莫迦者がいます。

この平和はある男が必死に掴み取った物…誰にだって奪う権利などありはしない！奴らに目に物見せてやりましょう！ピースメイカー！前進！！」

それと同時に降下予想地点のデータを送る、異能者は各々その場に武器を持って駆けて行った。

それからと言う物帝国はいつまでも落とせない地球に郷を煮やし、地球を破壊…火星前線基地で指揮をしていた私達一部の異能者は撤退を開始…逃げるとこなんてありやしないのに…

結局私達数百名は宇宙をしばらく漂ってどこかの星に到着したかと思えば…

「私はここに召喚されていたって訳ですよ」

もう何がなんだかさっぱりわからないが…とりあえず用心するに越した事はない、銀河帝国…まさか地球を吹き飛ばしてくれるとは…多分地球に残っていた異能者達は同盟を組んでいる星に逃げている

るはずだ。

ちれちれ、早く地球を再生してやらねば…

特別編・もしもエイブラムが転生ではなく召喚されていたら前編（前書き）

ちょっと試しに書いてみました、人気あったら中編と後編やります

特別編：もしもエイブラムが転生ではなく召喚されていたら前編

ヴェストリの広場、普段日が差しにくいこの静かな場所はいつもと違い悲鳴に包まれていた、悲鳴の中心には2メートルを超える黒い甲冑の大男が、これまた巨大な白い片刃の剣を携えてぼーっと突っ立っているのだ。

鎧の覗き穴から目の前でもがいている芋虫：訂正、四肢を失った金髪の男を眺めている。

「つまらんなあ魔術士、全く持って貴様はつまらん」

金髪の芋虫：訂正、ギーシュは脳内血圧が下がり既に気絶している。

「ふあああ…ふ…俺の勝ちでいいな、帰って寝る」

大欠伸をした後まるで遊びに飽きたように語り、生徒の波を掻き分けて大男はどこかに歩いていってしまった。

何故こうなってしまったのかとルイズは頭を抱えた、大男：クルストと名乗った男はギーシュとの戦いが始まると同時に背中の中剣に手をかけ、手を離れた。

たったそれだけでギーシュは四肢を切り落とされて芋虫のように転がったのだ、殺気も何もない、クルストにとっては文字通りお遊びだったのだろう。

ルイズが精一杯頑張って呼んだ使い魔は…最強の使い魔だったのだ、それも単騎で国を落とすような強さを持つ化け物、ルイズは意を決してクルストを追い掛けた。

「ちよつとクル…スト…」

ルイズが追い付いた頃、クルストは教師達全員に杖を向けられていた。

「動くな化け物め！風の錆にはなりたくなかろう！」

ギトーが得意げに言い放った、クルストはピクリとも動かない。

「…すまないクルスト君、オスマン学院長に君を連れてくるように

言われたんだ」

コルベールは申し訳なさそうに杖を向けている、そんな中クルストは……

「ふああああ……ふ……」

大欠伸をしているのだった、これまた退屈そうに。

「……で、なんだお前ら」

訝しげな視線を教師達に向けたクルストは苛立しげにそして腹立しげに足を踏み鳴らすのだった。

「ええい！黙れこの悪党めが！」

そして完全に調子に乗っているギトーをクルストは一瞥した後、私に視線を移した。

「ご主人様よ、あいつら殺していいか？」

「ダメに決まってるでしょ！」

全く非常識な使い魔である、一応ルイズの言う事は聞いているらしく、ふむ……と呟くと両手を挙げた。

敵意はないと言った所だろうか、コルベールはホツとしたように杖を下ろしたが……

「食らえ化け物！ライトニングクラウド！」

ギトーがクルストに向かって風のスクウェアアスペルを放ったのだ、クルストに雷が向かっていって……そのままギトーに帰ってきた。

「馬鹿じゃねーの？」

自業自得で死んだギトーに向けてクルストはそう言い放った、目には侮蔑の光が揺らいでいる。

この傍若無人な悪党は少し前、ルイズが召喚した使い魔なのだが……当時の情景を思い浮かべてみよう。

「はあ……はあ……」

進級のかかった使い魔召喚の儀式、その中ゼロのルイズと呼ばれる少女は幾度となく頑張っていた、しかし努力が結果に結び付かないのが世の中の道理、結果少女に向けられるのは罵倒と嘲笑。

少女は今にも倒れて泣き出しそうだった、少女の体を支えていたのは高いプライドと生来生まれ持った諦めの悪さだった。

「ミスヴァリエール…残念だが」

ハゲあがった男…コルベールが本当に残念そうにルイズに近寄る、膝に両手をつけて荒い息を吐いていたルイズは気丈にも顔をあげて…
「もう一度だけ！もう一度だけお願いします！」

諦められない、使い魔召喚の儀は楽しみにしていた、これで私はメイジになれるかもしれないと…だが現実は無情、ルイズはずっと努力を否定され続けた、だが生来の気丈さで乗り越え泣きの一回をコルベールに要求する。

「…後一回だけですよ」

コルベールは優しく微笑みながらそう言ってくれた、ルイズは汗塗れの顔を引き締めて顔を前に向ける。

「この宇宙のどこかに居る私の使い魔よ！お願い！答えて！私に相応しい使い魔よ！貴方の力が必要なの、私は貴方に何も求めない！だから答えて！」

杖を振ると確かに手応えがあつたがやっぱり爆発した、周りが野次を飛ばすがルイズはそんな事気にならなかつた、聞こえたのだ…了解だと言う声が…爆発の余波である煙の中から声がする。

「お前かちびすけ、この俺を召喚したのは…」

荒々しい男の声、煙が晴れてくるにつれてくつきりと輪郭が浮かび上がってくる。

筋骨隆々の体に鋭い目つき、光を返さない漆黒のつんつん髪…全体的に言うつと美青年だった、ワイルド&クールな感じで危険な匂いがする男を醸し出している。

「そうよ！私が貴方を呼んだの！」

一つしかない緑色の目が私を捉えた時には全身が粟立つたが負け

じとルイズは答えた、男はクツクツと悪党のように笑った。

「いい執念だ…最悪の悪党を地獄から呼び出すかちびすけ、いいだろう、気に入った。さあ何を望む！目も眩む宝か！永久に不滅の帝国か！それとも世界そのものか！さあ願いを言え…なんだって叶えてやろう…」

ちびすけと呼ばれたのは気に食わなかったがなんだって叶えてくれると言うのだ、ルイズは意を決して口を開いた。

「あんた、私の使い魔になりなさい」

目の前の男がキョトンとした、何回か瞬きをした後。

「マジ？」

と聞いてきた。

「マジよ」

そう答えると男はゲラゲラと愉快そうに笑った。

「俺を使役したいってか！ハツハツハ！面白いぜちびすけ…いいだろう、それも楽しそうだ、さあ契約だ」

ぐいっとルイズの体が抱き上げられる、そのまま男の顔が近づいて…ルイズの唇を奪った。

無理矢理唇を開かされ舌を押し込まれる。

「ぶあつな、何…んん！？」

ぐちゃぐちゃと官能的な音が自分の唇から鳴るのを聞いて抵抗していたルイズもだんだんと大人しくなり男に身を委ねる。

男が唇を離すと銀の糸がルイズの唇と男の唇を繋いだ。

「契約完了…この時より我が剣は貴様の物だ」

男の左手の甲にルーンが刻まれたがルイズはそんな事気にして居る余裕はなく、ポーツとする体と頭は重力に負けて地面に座り込む羽目になった。

「……大丈夫か？」

怪訝な瞳でルイズを見る男、だが肝心のルイズから返事はない。

「ふあ……あん、んん……」

ルイズは男の唾液に塗れた唇から情欲の声を上げるだけだ、男は

それを見て困ったように頭をポリポリと掻いた。

「オホン！これにて春の使い魔召喚の儀は終了です！」

コルベールは気を取り直してそう言い放った。

官能的で情熱的なキスに見とれていた貴族のチェリー&バージンズも気を取り直して空に浮くのだった、特にルイズに声をかけるのでもなく…男は前屈みになりながら寮に向かい飛んでいく、コルベールもそそくさとどこかに行ってしまった。

「はあ…畜生、コイツおぼこか」

性交どころかキスすらしたことないであろうルイズを見つめる、まだ夢見心地気分で宙を眺めている。

顔を平手で張り飛ばして意識を覚醒させると…

「何すんのよ！」

怒り心頭と言った顔で男の胸倉を強く掴んだ。

「いつまでぼーっしていやがるちびすけ、さつさと帰るぞ」

胸倉からルイズの手を弾いて男はそんな事を言う、ルイズはそれも気に入らなかったように地面を踏み鳴らした。

「誰がちびすけよ！私にはルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・

ド・ラ・ヴァリエールって立派な名前があるのよ！」

そしてやけにラ行の多い名前を披露してくれた。

「そうか、じゃあルイズだな。俺は…まあクルストとでも呼んでくれ」

そう言っつてふわりと浮くクルスト、ルイズが顔をしかめている。

「…どうした、飛ばないのかルイズ」

クルストが不思議そうな視線を向けてきた。

「今日は疲れたから飛ばないの！」

クルストに失望されるのが怖くてつい嘘を吐いた、クルストはどうでもいいように鼻を鳴らしルイズの体を抱え上げる。

「ちよ、ちよっと！」

お姫様抱っこされたルイズがバタバタと暴れる。

「悪いが俺は早く休みたくてな、お前に気遣う余裕はない」

そしてそのまま凄いスピードで飛び、あっと言う間にルイズの部屋の前まで辿り着いてしまった。

「ちょっと、なんで私の部屋を…」

「匂いだ、お前の体臭の残り香を辿ってここまで来た」

「ちよつと！？私が臭いみたいない言いはやめなさい！！」

なんに關してもいちいち怒るな、とクルストは心の中で思う。

「あいあい、そら、部屋に入れルイズ」

面倒臭くなつてルイズを部屋の中にもうり込む。

それからしばらくルイズはピーチクパーチク騒いだのだがクルストは一切反応してくれなかった。

「…それで、なんであなたが召喚されたのかしら」

「ん？呼んだのはお前だろ、俺は悪性英雄なんでな…強い欲望の呼び声に呼び出される」

「英雄つて…あんた平民の傭兵でしょ？」

そこまで会話するとクルストは顎に手を当てて考えた、数秒程だろつか。

「成る程、そういう事か」

一人で納得したのかコクリと頷いた。

「ま、そういう事にしておいてくれ、面倒が無くて良さそうだ」

そこまで言うるとルイズの言葉に一切返答をせずにゴロリと床に横になった、ルイズも何を言っても無駄だと理解したのか何も言わずに自分も寝間着に着替えてベッドに横になった。

そして朝、ルイズはかなり荒っぽく起こされた。

「おはようルイズ」

目の前には大男のクルスト、今は朝六時半で結構早かった。

「おはよ…何よこんな朝早く起こして」

そして不機嫌そうなルイズを見てクルストはニヤリと笑った。

「朝飯が欲しくてな」

眠い目を擦りながらルイズはよろよろと立ち上がった。

「そうね…朝ごはんね…食堂が開く時間までまだあるから…」

「俺に普通の食事は意味がない」

そういうがいなや、クルストはルイズの唇を貪り始めた。

「ん！？ちゅ…ぢゆる…な、何を…あ…んん！だ、だめえ…あふっ」
長いディープキスの後クルストは満足そうに唇を離れた、荒く熱い息を吐くルイズを見て邪悪にわらう。

「なん、で…」

「俺達悪性英雄はこうやって魔力を補給するんでな、本来なら性交渉も行いたい所だが…ま、それ勘弁してやる、俺は燃費はいい方なんでな、無理な戦闘をしなければそんな事をする必要はない」

つまりは激しい戦闘の後そういう行為が必要な訳で。

「んっ…はあはあ…」

涙目になりながらルイズは唇を拭う。

「慣れる、さもなきや俺は消える」

そう言つとクルストは部屋から出て言ってしまった、今まで気丈に振る舞っていたが、ここでルイズの涙腺は決壊する。

散々努力した魔法は使えないし、ようやく呼べた使い魔も言う事を聞かない、自分は本当にヴァリエールの子なのかも疑い…結局声を上げて泣いてしまった、隣の部屋から何事かと飛び込んできたキユルケにも慰められる始末で…まあキユルケと仲良くなれたのはよかったが…ルイズはどうしてもクルストが好きになれなかった。そして使い魔召喚の儀から初めての授業、これには使い魔が同伴する必要があつてクルストを探していたらすぐ現れてくれた、訳を説明すると嫌な顔をせずなんの興味もなさそうに頷いた。

そして今隣に座っている訳だ、机に腕を着いてぼけーと虚空を眺めている、観察して分かった事だがクルストはやる事がなく暇な時はずっとぼーっとしてる事が多い。

「…何見てんだ、教師来てるぞ」

クルストに注意されて慌てて前に向き直る、ミセスシユブルーズがニコニコ笑いながら教室に入ってくる所だった。

「こんにちは皆さん、この時期は（中略）で珍しい使い魔を召喚し

た子も居るようですが…」

シユブルーズがルイズを…いやクルストをチラリと見る。

「魔法が使えないからってそこらに居た平民を連れてくるなよ！ゼロのルイズ！」

「先生！風邪っぴきのマリコルヌが私を侮辱しました！」

ギヤーギヤーと喚き会うデブとルイズ、クルストはようやくかと言った感じで立ち上がり…いつの間にかマリコルヌの後ろに居た。

「コイツを殺せばいいのかルイズ」

ニツコリと笑ったクルストはナイフの切っ先をマリコルヌの殆どない首に突き付けていた。

「だ、ダメよそんな事しちゃ！」

「???…まあルイズがそう言うなら止めとくが…」

不思議そうな顔をしながらクルストは席に戻ってくる。

それからの授業は少し重苦しかったがシユブルーズが気を取り直したように錬金し、ルイズにやらせて教室を吹っ飛ばした。

「……何か言いなさいよ」

罰として二人で掃除しているとルイズが唐突にそんな事を言ってきた。

「ん？そうだな、素晴らしい爆発魔法だった」

「…！馬鹿にしないで！これはね！失敗魔法なのよ！」

ルイズは馬鹿にされたと思ったのか顔を真っ赤にして怒鳴り散らした、クルストは首を傾げている。

「わからないなら説明してあげる！私はね！どんな魔法を使っても爆発しかしないダメなメイジなの！ゼロのルイズなの！」

クルストに掴みかかりそうな勢いで近付きながら怒鳴る、ルイズ自身ただの八つ当たりだと理解している、だけど当たらないとやっていられない。

「…ふむ」

クルストはまた何かを考え始めた、その姿がルイズのしゃくに触ったのかルイズは更に怒り始めた。

「何よ！あんたも馬鹿にするんでしょ！私はダメなメイジだって！
役立たずで……貴族の面汚しって……」

ぼろぼろとルイズの瞳から涙が落ちる、クルストはそれを見てた
め息を吐いた。

「しないよ、絶対に、例え世界がルイズを否定しようが俺だけは絶
対に」

それだけ言うとゴミを袋に詰める作業を再開した。

「何よ……どうせあんたも私の事……」

箒を持ったまま黙り込むルイズ、まだ納得出来ていないようだ。

「ふう……掃除おーわりつと」

最後のゴミを袋に叩き込みクルストは机の上にドカリと座る。

「ここで全部吐き出しちまえ、俺が全部受け止めてやる。そうすれ
ばお前は明日からまた頑張れるだろうしな」

パンパンと自分の隣を叩き座るように促すクルスト、そんな様子
をルイズはじつと見つめる。

「……なんであんたはそんな事出来るのよ」

ようやく絞り出した言葉がソレだった、クルストはその言葉を懐
かしむように頷き口を開いた。

「お前には泣き顔より笑顔が似合うからだ」

ポツとルイズの顔が赤くなる。

「な、ななななな、何臭い事言ってるのよ！格好つけてるつもり！
？」

「バーローおめえ、男が女の前で格好つけられなきやき たまぶら
下げて生まれてきた意味ねーよ」

「げ、下品よ！」

その様子にクルストはカラカラと楽しそうに笑う。

「育ちは悪いもんでな、元気出たか」

ぼむつとクルストの手がルイズの頭に乗る、ルイズは顔を赤くし
ながら頷いた。

「それじゃ昼飯でも食ってこい、食事は体と心を元気にする」

トンツと優しく背中を押されてルイズは頷いた。

「…お礼位は言っておあげる」

「おう」

「それじゃまた後でね！」

そうやってにこやかに別れたはずだった…だがクルストはギーシユの四肢を切り飛ばして死に至らしめようとしていた。

聞く所によるとメイドを虐めているギーシユを止めたらルイズを馬鹿にしたから怒ったとの事、聞いた時少し嬉しかったルイズではあるがその後の行動でその嬉しさは吹き飛んだ、クルストと名乗った男は一介の容赦もなくギーシユに鉄槌を下した。

エイブラハムが居た地球での歴史（前書き）

興味なかったら読み飛ばして下さい

エイブラハムが居た地球での歴史

西暦1936年、極東の国日本で異能者の娘と天皇が婚約、異能者政権が誕生すると共に一條家、二河家、三柳家、四港家、五神家が五摂家になる

1937年、中国が満州国に進軍を開始、満州国に居る3000万人の異能者に殲滅させられる、日中戦争勃発：一週間後終戦

1938年、ソ連とナチスドイツに三柳家の次女と三女が嫁ぐ、

何故かイタリアも混ざり四国同盟が結成されると共に四国民主化開始

1939年、結婚自由法により異能者の数が爆発的に増える、ドイツがポーランドに宣戦布告、フランス、イギリスがポーランドに介入しドイツと開戦

1940年、三柳家がクローン技術を開発、大量のクローン異能者兵団が出来上がる、アメリカが日本に大陸の利権を手放すよう要求、日本はあっさりと手放す、満州の異能者日本に渡航

1941年、イギリスが沖縄を要求、突っぱねるとイギリスは日本に宣戦布告、アメリカも日本に宣戦布告する

1942年、九州にイギリス陸軍18師団上陸、全員が捕虜となる、日本軍フィリピン、ベトナムを解放、シヤムと同盟を結ぶ

1943年、インド解放、日本軍ロサンゼルスに上陸、連合艦隊日本へ空爆開始……空戦異能者兵団に敗北する、連合艦隊空母八隻空飛ぶ斬撃にぶつた切られ連合艦隊後退

1944年、ワシントン陥落、アメリカ軍降伏、独ソ連合軍イギリス本土に上陸

1945年、日本軍連合側植民地をイタリア軍と共に解放、独立させる、イタリア軍七割が女性である異能者の国日本に本気で移住したがる

1946年、連合降伏、イタリア軍、ワインがないと聞いて移住を断念

1947年、中国国民党が共産党に敗北、チベットが中国共産党の支配下におかれる、ドイツポーランドの一部を自国に併合、ヴィシーフランスが独立

1948年、ソ連完全民主主義に移行、国名もロシア連邦国に改名
1949年、エイブラハムの爺さんヤハウエ・スタイマン・クルスト、アメリカ大陸カリフォルニア国で誕生

1950年、元アメリカ国三つに分けられ完全独立、カリフォルニア国に数千人の異能者が移住

1951年、朝鮮半島独立、一年で経済崩壊する

1952年、アメリカ国がカリフォルニア国と南部連合国に宣戦布告、第三次アメリカ内戦勃発

1953年、三柳家本拠地を木星に移転させる、ヤハウエ火星探査ロケットマーズを製作しカリフォルニア国火星に移転を決定、準備に取り掛かる

1954年、南部連合国降伏、ヴァチカン、イタリアに宣戦布告、日本ドイツロシア静観

1956年、イタリア陥落、ドイツロシア参戦、カリフォルニア国火星移住完了、アメリカ再び大陸の覇権を得る

1957〜1970年、平和な時が流れる、ヴァチカンはイタリアを独立させドイツロシアと講話

1970年、エイブラハムの父ヨシユア・エリック・クルスト誕生、同時にヤハウエが行方不明になる

1971年、星人たるアースレスが長き眠りから目覚め神の軍勢で人類と異能者に攻撃を開始する、第一次人異神戦争勃発

1975年、エイブラハムの母マリア・マグダライタリアで誕生
1980年、ロシア陥落、ドイツベルリンまで押し込まれる、ヴァチカンアースレス側に寝返る、エイブラハムの母、マリア・マグダラの母体としてヴァチカンに拉致され数年に渡り凌辱される、

三柳乙葉誕生、三柳家地球圏に帰還

1982年、ドイツイギリス陥落、ポルトガルに多数のドイツ人

とイギリス人が取り残される

1985年、中国戦線崩壊、日本残った国に打信し世界がまとまる地球連邦を確立させる、ヨシユア、マリアを救出、婚約する

1988年、ヨシユア・エリック・クルスト九人の異能者と共にアースレスを封印する

1990年、エイブラハム・ヨシユア・クルスト誕生、三柳一葉月で誕生、三柳龍葉試験管で誕生、ゼノヴィア・リドルビッチロシアで誕生、ミュウ・ライアンアメリカで誕生、リー・ウルフ中国で誕生、シュタイナー・ハウゼンドイツで誕生、エフスキー・ペトリエンコロシアで誕生、トークマン・ジーニアスイギリスで誕生、空天空日本で誕生、メリッサ・フールアメリカで誕生、後にヒーローラッシュと呼ばれる時代の幕が開ける

1993年、エイブラハム新エネルギーを発見、実用化し巨万の富を得る、イラク、アフガニスタンに宣戦布告

1994年、エイブラハム人工筋肉を開発、新エネルギーを利用した無敵バリアを開発、銀河間移動システムを開発、魔星から魔族の第一王子ポコルンベを地球に連れてくる

1995年、エイブラハム人工筋肉からパワードアーマーを開発、人間が異能者に太刀打ち出来るようになった、ヨシユア、エイブラハムと旅行中エイブラハムを庇いアメリカ軍に殺害される、エイブラハムアフガニスタンに逃走、マリア殺害される

1996年、三柳家イラクに軍事支援、三柳龍葉含むクローン兵団がイラクに投下される、エイブラハムと龍葉戦闘、龍葉敗北、撤退する、イラク降伏

1997～2002年

エイブラハムが世界各地のアメリカ軍を撃破、殲滅、結果として住民に感謝される、アメリカ大統領何者かに一家共々暗殺される、アメリカ弱体化

2003年、エイブラハムがゼノヴィアと出会い意見の相違から戦闘：エイブラハム初の敗北、ゼノヴィアの強さの秘密を探る為に

ゼノヴィアに同行……誰に対しても優しいゼノヴィアに惚れる、エイブラハム復讐をやめる

2004年、ゼノヴィアとエイブラハム、一晩の間違いでゼノヴィア妊娠、出産する、お互い恋人はやめて夫婦になる事を決心、結婚式一週間前ゼノヴィア拉致される、結婚式前日、化け物となったゼノヴィアとエイブラハムが対峙、エイブラハムゼノヴィアを殺害し理想を引き継ぐ

2005年、エイブラハムゼノヴィアを蘇らせる、ゼノヴィア記憶を封じられオメガと名付けられる、三柳一葉三柳龍葉と共に三柳脱走、三柳乙葉エイブラハムと接触、陰謀を開始

2006年、エイブラハム、三柳一葉、三柳龍葉、オメガを含む1990年に生まれたヒーローラッシュの子供達が東京第三防衛学校に入学、三柳一葉様々な人の死と恋人たる空天空との出会いで大きく成長、自分のクローンであるアルウエンと双葉を養子にする、エイブラハム乙葉と共に人類管理計画を発動する、エイブラハム、再び一晩の間違いでオメガが出産

2007年、オメガ、ゼノヴィアとしての記憶が戻る、体内の絶望の種が成長し絶望として変貌、エイブラハム今度はゼノヴィアを守らんとし英雄達の前に立ち塞がり英雄達を三度撃破するが四度目に敗れる、ゼノヴィア死亡、エイブラハムゼノヴィアの死体を抱き抱え崩れ始めた搭の内部に残る、エイブラハム行方不明

2008年、アースレスが再び蘇る、第二次人異神戦争勃発、世界連邦敗北、神の軍勢日本以外全てを占拠する、エイブラハムが日本に帰還する、最終決戦でアースレスを討伐、再び封印に成功する
2012年、エイブラハムコールドスリープで眠っていた娘と息子を孤児院に置いてたった一人で平和への戦いを開始する

2013年～2022年
様々な物語があつたが割愛する

2023年、人類壊滅、エイブラハムリーナに殺害される

エイブラハムが居た地球での歴史（後書き）

まあこの後もずっと続くんですが…正直昔の小説なんで覚えていません

第七話：エイブラハムとセブンスカラー

召喚の儀が終わり一週間が過ぎた、明日にはテファやらシエスタやらルイズやらが入学してくるらしい、俺は特に何もせずに日当たりのいい広場の上で昼寝をしている。

「いい天気ね、エイブラハムは今日何するのかしら」
隣に居るカトレアのおかげで眠れず仕舞いだが。

「んー…何かしようって訳じゃないんだがな、虚無の曜日とはいえ無理に出かけると出費がかさむしな」

「そ、そう…」

少し残念そうなカトレアを尻目に俺は空を眺める、真っ白な雲が青空を悠々と流れている。

「人込みなんかに行くより、こつやってお前とマツタリしてる方がいいよ」

自分の額の傷痕を突きながらそう言う。

「もう、口が上手いんだから」

頭をペシツと叩かれた、嘘でもお世辞でもないんだがな…

「おつおつ、昼間からお熱いねえ」

聞き覚えのある粗野な声がする、鼻を鳴らしながら答える。

「うるせーぞランサー、お前こそ一葉を口説くんじゃなかったか？」
体を起こしながらそう尋ねるとランサーは渋い顔をした、この様子を見るにやんわりと…そしてきつぱりと断られたな、ざまあみる。

「…で、どうだった。ここの王都は」

「そうさね、なんと言うか寂しい都市だな」

このトリステインで一番活気のある街なのだが…欲望に忠実な貴族のおかげで衰退の一途を辿っている。

「…それは…ま、仕方ないさ」

ゆっくりと立ち上がりながらそう言う、俺はどうすればいいのだろうか…この頭脳があれば救う方法なんざいくらでも出てくる…だ

が革命を成功させるには血が必要なのだ、少なくとも川を作る位の量はなくてはいけない。

「そついやエイブラハムよお、トリステインで変な女にあつたんだ、弓と槍を抱えた傭兵風の赤毛の女でな」

その容貌を聞いてしばし固まった、まさかアイツか？ いやいや有り得ない。

「へえ、それで？」

「あまりにも美人だから声をかけたら殺されかけた」

カラカラと笑うランサーに呆れながら眉間を押さえる、間違いない…アイツだ、なんでここにレッドが居るんだ。

間違いなく殺したはずだ、セブンスカラーと呼ばれる賞金首…今度確認を…

「…すまんエイブラハム」

「馬鹿野郎…つけられたな!？」

剣を引き抜き飛んでくる炎の矢を弾き飛ばす、衝撃で地面が揺れた。

相変わらず野砲のような威力だ、剣を持つ手が痺れる…プラチナム・ラヴァー程の名剣なら問題はないのだが俺が今持っているこの程度の剣では持って次射を弾いてから後十分…レッドと視線が混じり合う、俺に殺された為か復讐の光を放っている。

レッドまで直線距離にして十三リーグ…俺が全速力で駆け抜けても二十分…

「ランサー、十分以内にレッドまで辿り着けるか？」

「はっ、十分もくれるのか？五分で十分さ!」

言うつかいなやランサーは駆け出す、レッドの第二射が放たれて俺に向かい真つすぐ飛んでくる。

「つらあ!」

気合いを込めて弾き飛ばす、剣が欠けた、ヤバイな…カトレアが俺の背後にいなかったらどうとでも出来るんだが…畜生、守りながら戦うのは苦手なんだ。

俺とレッドは相変わらず睨み合っている、混じり合う視線…レッドはゆっくりと口を開いた、唇を読みやすいように。

「我等が悲願、この世界で実現せん、止められる物なら止めてみせよ。我等が天敵クルストよ、その半分人間となった体で止めてみせよ」

ニヤリと笑ったレッドはさっさと逃げて行ってしまった、ランサーもそれを感じ取ったようでこちらに引き返してきている。

レッドの最後の言葉に舌打ちする、どうやら奴らは俺が弱体化したのに気がついているようだ、元来異能者は子供でも完全武装した人間の大人を一蹴できる、肌はライフル弾を弾き返し撫でる位の力加減の一撃はたやすく人類の命を奪う、内臓が潰れようが心臓と脳が無事なら平気な異能者に比べて俺はたかがマスケットに傷つけられ強く殴らなくては人類は死なず、内臓の一つでも傷つけば命に関わる…だが。

「レッド一つだけ勘違いしてやしないか？」

そう、奴は一つだけ勘違いをしている。

「俺は最初から最後まで格上だけには負けてねえんだよ」

半分人類となった弱々しい体？ そんな体で宇宙最強の生物異能者に立ち向かえてか？ 余裕だぜ、アースレスに比べれば奴ごとき子犬にしか見えない。

…とは言え俺に勝ち目は殆どない訳で、気合いは空回りしかしなかった。

「説明して貰いましょうかエイブラム」

顔をしかめたカトレアが夜遅くに俺の部屋を尋ねてきた、一葉は一応使い魔らしく振る舞っておりカトレアの後ろに立っている……うさぎ柄の寝巻を着て枕を引きずると言った私半分寝てますよスタイルではあるが…一葉にしては頑張った方である。

一葉は鼻提灯を出して幸せそうに寝ている、立ったまま。

「一葉さんも寝てないで起きて下さい！」

まあカトレアには知る権利があるだろう、襲われたのだから。

「ふえ〜…寝てないれしゅ……すび〜…」

嘘だ、あの状態の一葉は半分寝ている、冗談抜きで半分だけ寝ているのだ、会話も出来るしちゃんと話した事を覚えている、気配探知もしてくれている。

「もう……いいわエイブラム、話して」

「ふむ…俺が話すより一葉に聞いた方がいいかもな、セブンスカラーの事は」

セブンスカラー、その単語を発した途端一葉はぱつちりと目を開けた。

「…来ているんですね、ハルゲニアに……」

「有り得ない事だが…まあ俺と言う事例がある」

「…セブンスカラー、異能者至上主義の過激派異能者達のリーダーです、星を支配しようと目論んでいましたけどくじけました」
ぺらぺらと先程まで寝ていたと思えない饒舌ぶりだ。

「へえ……そいつらつええのか？」

自分のベッドの上で胡座をかきながらランサーはそう問い掛ける、一葉は頷いて返事を返す。

「はい、彼らは全員戦闘型ですから」

戦闘型、異能者は戦いが得意な異能者と研究が得意な異能者に分けられる、一葉は戦闘型異能者だ。

「へえ……いいねえ腕が鳴るねえ」

ランサーはさも楽しそうに笑う、これはただの戦いつて訳ではないのだがね。

「うーん……なんでセブンスカラーはエイブラムを狙ってきたのかしら…」

カトレアは顎に手を当てて何かを考え始めた、これは俺の癖である。

「…恐らく彼女達はクルストさんを一番の障害と認知したんだと思います、クルストさん軍隊率いてれば誰にも負けないから」

過大評価だ、俺だって負ける時は負けている。

「嘘つかないで下さい、貴方撤退する時殆ど味方の戦力温存しているじゃないですか」

一葉にじとつとした目で見つめられる。

「撤退つて味方の被害少なくなる為にやるもんだからな、被害が少なければ次の戦いは有利に進む、有利に進めば被害は減る、被害が減れば…と言う訳さね」

戦略の基本だ、兵の被害は極力少なく…兵がいなければ敵は倒せない、戦車も動かないし飛行機も飛ばない。

「あ？兵がいなくても一人で暴れれば敵の前進は止まるだろ」

素っ頓狂な事を言うランサー…そんな事出来るのは一葉かお前位だ。

「エイブラハムはどうするの？」

カトレアはランサーをスルーして俺に尋ねてきた、俺はどうするか…か。

「奴らの理想を再びへし折るさ、奴らも俺を消したがつているみたいだしちょうどいい」

敵となつてくれた為に判断はしやすい、敵になったら殺せばいい、味方だつたら守ればいい。

「ルイズ達が入学してくるまでは平和だろ、ルイズ達にも警告しとかなきゃな」

第八話：焦躁のエイブラハム（前書き）

最近暑いね、凄く暑いね

第八話：焦躁のエイブラム

入学式が終わった次の日は休みだ、俺は部屋に籠りきり何をしていたかと言つと…

「出来た！無煙火薬！」

黒色火薬に変わる新たな火薬、無煙火薬を開発していたのだ、これでタルブ軍を強化出来る。

「ほお…これは素晴らしいですね」

コルベールは俺の技術に興味深々だ、さてコルベールの方は…

「先生の研究も完了しましたか」

コルベールは蒸気タービンの開発をちょうど終わらせていた、次は石油の抽出技術と…後は蒸気タービンを使った工作機械の製作…忙しくなるぞ。

「ふう…私は明日の授業の準備があるのでまた今度にも」

名残惜しそうなコルベールはさっさと俺の部屋から出て言った。

産業革命の開始…明日にはトリスタニアに赴き女王陛下と謁見せねばなるまい、恐らく多くの血が流れる事だろう。

強大な工業力のせいで戦争も起こるかも知れない、だが…それでもこの工業力は人類を救う。

人間は弱く脆く愚かだ、それは俺が一番よく知っている。

だからこそ人間は強い、弱いからこそ武器を作り脆いからこそ科学を発展させ愚かだからこそ戦争をする、そして戦争は武器を強くし科学を更に発展させる。

「ふう…」

疲れを織り交ぜたため息を吐いて椅子の背もたれに寄り掛かる、どうやら俺はこの世界が好きになりかけているらしい。

「兄様～いますか？エイブラム兄様～？」

「ルイズさん！抜け駆けはダメです！」

「何よ！いいじゃない、貴女達私より有利なんだから！」

「エイブラハムさ〜ん！遊びに来ましたよー！」

部屋の外が騒がしい、ルイズにシエスタにテファの声が聞こえた、何かしているのだろうか…

「鍵は開いている」

そう言っただけで、用があるなら勝手に入ってくるであろうしな。

「失礼しまーす」

テファががちゃりとドアを開けた、相変わらずSOSだ。

「あちよつと！」

続いてルイズが焦りながら入ってくる。

「お邪魔します、あ、お兄様の部屋の匂いです」

最後にシエスタ、つまりはオイルや薬品臭いと言いたいのだろう… 技術屋の部屋なんざそんなもんだが。

「よいらつしやい、お茶でも出すよ、ランサー」

「俺ががよ？」

部屋の片隅で槍を磨いていたランサーが嫌な顔をしている。

「いいから手伝え、淑女を歓迎するのが紳士だろ」

そう言われて渋々と日本茶を煎れ出すランサー、よしよし、俺は自作冷蔵庫から大福を取り出しテーブルの上に置く。

「さ、どうぞ」

魔法で椅子を引いてやる、三人はお互いを威嚇しながら椅子に座る…なんだ？何かあるのか？

お茶が入った頃にランサーと共に自分も席につく、偉くぎすぎすしているなあ…

「お兄様！今度の舞踏会私と踊って下さい！」

シエスタがいきなり叫ぶように言い放った、ランサーのまたかと言った顔が印象的だ。

「…もしかして三人共その用事？」

「…はい！」「」

元気があって大変よろしい、だが…

「すまんが俺は舞踏会には出ん、諦めてくれ」

誠に残念ではあるが俺は舞踏会には出ない…いや出れないのだ。

「えー…」

勇気を出したシエスタがしょげている、いやはや本当に申し訳ありません。

「残念です、エイブラハムさん…」

テファ、そんな捨てられた子犬のような顔されてもなあ…

「ど、どうしてですかエイブラハム兄様…」

ルイズがそんな事を聞いてきた、俺は冷や汗を垂れ流しランサーは笑いを堪えている。

「……………れないんだ」

「え？」

「踊れないんだ！俺！全然ダメなの！」

天は二物を与えず、俺は踊りや歌はからつきしダメなのだ。

歌えば音を外しまくり踊れば相手の足を踏み抜く、絵を描けば地獄が完成すると言った具合だ。

「カトレアと練習もした…だが…」

カトレアの足は青痣だらけで先にカトレアが根をあげてしまった。

「そ、そうだったんですか…すみませんお兄様」

シエスタが申し訳なさそうに頭を下げる。

「気にしないでくれシエスタ…」

悲しい気分になりながらほむほむとシエスタの頭を撫でる。

「……………諦めません！私は諦めませんよエイブラハムさん！」

テファの目が燃えている、まさか…マジでやるつもりなのか？

「あ、踊りはやめましょう」

よかった、じゃあ何を諦めないんだらうか。

「舞踏会には一緒に出て私達をエスコートして下さい」

ああ、成る程…そういえばカトレアも去年は大層声をかけられたらしく疲れ果てていた、ちなみに俺も前日声をかけられまくった。

皆様は忘れていらっしやるだらうが俺は絶世の美男子である、異

能者だからね。

「そうね、兄様が一緒にいれば声はかからないわ」
ルイズはそう呟いた。

つまりは話しかけてきたり口説いてきたりする男がうっとおしいから俺をダシに断ろうと……俺は猫よけ水か……

純粋なお誘いでなかった事にちよつとガツカリして三人の案を承諾する、俺もダシに出来るしな……一応カトレアにも伝えておくかな、誤解されて三柳流の何か喰らったら困るし。

「おーエイブラハム、俺ちつと出掛けてくらあ」

ランサーはいつものアロハに着替えて槍を担いでどこかに行こうとしている。

「おう、どこ行くか知らんが行つてらっしゃい」

今日の分の小遣いを渡して満面の笑みで出ていくランサーを見送り俺はベッドに寝転ぶ。

無くなった左腕の代わりについている義手を眺める、運よく砂漠に落ちていた義手……これは間違いなく前世の俺の義手だ、もしかしたら他にも落ちているかも知れない。

……探す気にはなれないが、そのまま眠ろうとゆっくり目を閉じたが……部屋に誰か入ってきたのを感じそつとナイフに手を当てる。

入ってきた奴はゆっくりと俺のベッドの前まで来て……ベッドに腰掛けた、ん？何故？俺の知り合いか？

……誰だ？」

目を開けて確認するとそこには一葉が居た。

「あ、起きちゃいました？」

ニッコリと聖母のように微笑む一葉……一体なんなんだ。

「セブンスカラーが現れたそうで……私の所にも来ましたよ、ホワイトが」

頭を抱える、あんな厄介な奴もこつちに来ているのか……セブンスカラーのリーダー格のホワイト……名前が白川幸江、奴の厄介な所は死なない所である。

否、ちゃんと死にはする、死ぬんだが…ひよっこり戻ってくるのだ、死体に取り付いて…奴は悪霊の異能者であり何かに取り付く事で蘇り再び行動を開始する…まだまだ厄介な所はある、例えば奴の能力だ、ペインザルーレットと呼ばれているあの能力はお互いを拘束しあつてルーレットにより体に傷をつけていく…しかもどちらかが根をあげるか死ぬかしないと止まらないルーレットだ。

「…よく無事だったな」

「はい、ランサーさんに助けていただきました」

ニッコリ笑う一葉：おいこらランサー、何も聞いてないぞ俺…

「ホワイトいわくセブンスカラー全員がトリスティンに居るみたいですよ、この学園にもグリーンが潜入してるって…」

相変わらず自分の計画をベラベラ喋る奴である、一葉は困ったように笑っている。

「…よし、一葉は西側を頼む。俺は東側を探す」

「やめときましよう、下手に刺激して暴れ出されたら…」

それは考えていた、グリーン…詐欺の異能を持つ者、全てを欺く事が出来る為こういう場所での戦いでは俺達が不利だ、気がついたら一葉と俺が戦っている…なんて事態に陥るだろう。

「しかし…」

グリーン of 詐欺の被害に遭う生徒も増えるだろう、それを見過ごすしかないのか…

「今は様子を見ましよう、下手をすれば貴方はカトレアさんやルイズさんを…」

そう言われて俺は渋々と頷いた、仕方ない…彼女達だけは殺したくない、俺の大切な友人だから。

「お互い警戒だけは最大限で生活しましょう、ランサーさんにも手伝って貰って下さい」

頷いて返事を出しておく、さてランサー、強敵との戦いの出番だぞ。

「……やられた」

いくら呼んでも返事すら帰ってこない、これは…

「ええ！？」

俺の一言に一葉が驚いた。

「強力なマジックジャミングだ！位置もわからん！畜生！一葉！西を！」

頭脳が凶悪なマジックジャミングと結論を出した、ここまで強力な物を俺達に気付かれずに出すとは…

「はい！」

返事をした一葉は窓を突き破って外に踊り出た、俺も後に続き東側に走り抜ける、気配探知に寄るとランサーの近くにルイズとシエスタの気配があるのだ…急がねば…

第八話・焦躁のエイブラハム（後書き）

クーラー涼しいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!

第九話・所詮貴様は力不足（前書き）

いろいろと読みづらいです

第九話：所詮貴様は力不足

よりもよってグリーンがここに来ていたとは…最悪だ、カトレアやランサー、シエスタが敵に回る事を想定しなくてはならない。今にも雨が降り出しそうな程の最悪の天気の中平原を駆け抜けて奴の姿と…倒れたランサーとカトレア、奴の前に仁王立ちするシエスタを視認する。

「あろくはくクルスト！いい天気だねえ」

日差しが俺の肌を焼く、クソツタレ、こんな時だつっのにいい天気だ。

「ああそうだな…テメエ、カトレアとランサーに何をした」

奴を睨みながら背中の中剣にゆっくり手を延ばす。

「何って彼らは勝手に戦っただけさ…それよりクルスト、何故剣を持っていないんだい？」

急いであるはずの剣に手を延ばすが虚空を切るだけだった、馬鹿な…俺が剣を忘れるだと？

「だったらシエスタは必要ないね…僕がやるっ」

動かないシエスタの前にグリーンが出て手を前に出しユラユラと動かす、俺も猫足立ちで手刀を構え奴の動きを待つ。

「行くよ？蛇刀百連撃！」

奴の手が蛇のようにのたうち無数に襲い掛かってくる。

「ちっ、三柳九十九斬手刀！」

こちらも無数の抜き手で対抗する、お互いの技をぶつけ合い決めの一撃のさい奴の首に抜き手を延ばすが切れたのは首の薄皮一枚、奴の手が俺の額に迫る、首を上へのけ反らせてかわす。

「はっはっは！流石だよクルスト！」

げらげらと笑いながらグリーン…いや嘘つきはそう言い放つ、何かがおかしい…違和感が…

「そらどんどんいくよ！蛇刀拡散手！」

奴の手から無数の蛇…いや蛇に見える攻撃が放たれる、蛇刀拳、五本の指と握力で相手を切り裂く異能者拳法、蛇のような動きで手を幻惑しつつ攻撃出来ると言った一対一専門の拳法だ。

一見強力ではあるが…

「ふっ！」

地面を蹴り嘘つきに肉薄する、奴の蛇刀拳が俺の体を引き裂くが…威力不足だ、握力を使う為に実は危険な有効打面接は少ない、掠れば皮膚と僅かな肉は裂けるが…俺達異能者にとってそれはたいしたことないダメージだ。

「三柳千枚通し！」

俺の手刀が奴の心臓を貫いた、案外呆気なかったな…

「あーあ…なんて酷い事を…シエスタちゃんを殺すなんて」

俺の腕の先で力無く垂れる手足は男の物ではなく女の肉付きのいい手足だった、顔を上げると口から血を垂れ流し力無く体を揺らすシエスタが…

「あ」

腕を引き抜くとシエスタは地面に倒れ込みそのままぴくりとも動かなくなった。

「あ、ああああ…」

シエスタの骸の隣に膝を着く、殺してしまった…シエスタを…「可哀相に…あんなに『やめて下さいお兄様！なんで私を殺そうとするんですか！正気に戻って下さいお兄様！』って必死に声をかけてたのにね」

ケラケラ笑いながらグリーンが近寄ってくる…やれやれ、俺も中々名演技だったな、背中の虚空を掴み嘘つきに振り下ろす。

「ギッ!？」

ちっ、浅い、腕一本しか落とせなかった、嘘つきは後ろに飛びのいた。

「何故だクルスト…何故僕の口先八寸が通じない…！」

傷口を押さえながら唸る嘘つき、俺はその様子を見て鼻で笑って

やる。

「確かに前世貴様の能力に苦しめられた、だがな。俺には一度見せた技は通用しねえんだよ、俺の能力を教えてやる、バレても対策は取られないしな」

コツコツとこめかみを指で叩きながらニヤリと不適に笑ってみせる。

「オールアンサー、俺の能力さ、貴様の嘘を現実と誤認させる能力の対策は既に済んでいる」

そういうとグリーンは苦虫をかみつぶしたような顔をして能力を解いた。

「…僕の負けだ、だが聞かせて欲しいクルスト、何故君はこんなゴミのような世界を守ろうとする？ トリスタニアの商館で売られてたエルフの少女は泣いていた、あの娘が何かしたの？ なんであの娘があんな酷い目に会うの？ ねえ教えてよクルスト… 彼女は誰を恨めばいい？ 彼女は何を嘆けばいい… 変態貴族に買われた後あんな酷い事をされて… どうして君は僕達戦友と戦ってまであんな奴らまで守ろうとする」

嘘つきはこんな奴だ、誰かの為に泣けて誰かの為に戦える… 確かに世界一優しい嘘つきと呼ばれていたな。

「質問で質問を返そう、その娘を助けてお前は どうしたい？ 貴族はお前達を怨むだろう、逆恨みって奴だ、敵がゼロになるまで戦い続けるか？ 何故そんな無駄な事をする」

「無駄！？ 無駄だと！？ だったら彼女はあのままにしろって事か！？」

「その通りだ、人身売買… トリステインではそんな悪法が罷り通っている、そんな悪法の上に胡座をかいて儲けてる屑が居る… お前が本当にエルフの小娘を助きたいのなら… あの時みたいに俺についてこい、策がある」

嘘つきは俺の顔をまじまじと見て来ている。

「た、助けられるの？」

驚いた表情に対して昔のようにニヤリと笑って見せる。

「俺を誰だと思っていやがる」

いつも見たく、エイブラハム・ヨシユア・クルストらしく笑ってやる。

「忘れてたよ、君は…そんなのが嫌いだったね」

嘘つきが苦笑する、やったね、外交官ゲットだ。

嘘つきは戦いにはとことん向いていないが交渉事になると無敵の力を発揮する、嘘つきが口先八寸を解くと倒れていたカトレアやラonserは消えたが仁王立ちするシエスタは変わらない。

「…嘘つき、シエスタになにをした？」

「え？君が夜忍び込み激しく彼女を求めあう幻覚を見せてるだけだけど」

嘘つきの傷口に蹴りをかましてやると潰れた蛙のような声をあげた。

「俺の可愛い妹になんちゆう夢見せてやがるか貴様！」

傷口を押さえながらからからと笑う嘘つき、奴は空に浮かび上がるとニッコリと笑った。

「ありがとうクルスト、僕は傷が治るまで再び学院内に潜伏するよ、いつも君の側に居る。用があつたら呼んでくれ」

「…おう」

返事をするとう嘘つきは消えた、さあいろいろときな臭くなってきた、どうやら嘘つきと他のセブンスカラー共は別の目的で動いているみたいだな…セブンスカラーの中で一番戦闘能力が低いのが学者型の嘘つきだ、遠距離中距離専門のレッドも低い方に分類される…それにセブンスカラーだけじゃないな、ここに来ているのは…どうやら動く必要があるようだ。

「あ、あれ…夢？」

シエスタが目を覚ましたみたいだ、頬が上気していてそこないエロスを感じる…いかんいかん。

「シエスタ、よく聞け」

シエスタの両肩に手を置いてシエスタの瞳を見つめる。

「俺はこれから王都に向かう、その間ここは手薄になるから…頼んだぞ、いいか？赤青黄色以外とは絶対に戦うな、一葉に任せておけじゃ」

魔力で体を浮かせて気力を推進剤として王都に向かう、この速度なら十分つて所かな…しかしどうもおかしい…こんな上空にまで焦げ臭さが漂っているなんてまるで都市でも燃えているような…

「うおおおい！？燃えてる！？トリスタニアが燃えてる！？」

おお、偉大なる我が祖国の王都よ、暁に燃えてるとかそんなレベルの話じゃなくてマジで燃えてるよ町全体が、一体何が言っても貴族の軍隊相手にここまで出来るのはセブンスカラーしかあり得ないしな…王都の中に着陸し辺りを見渡す、敵影無し…どうやらすでに去った後のようだ、王城に向かおう。

「我らが希望の七色バンザイ！！」

大通りで誰かがボルトアクションライフルを掲げて叫んでいた、ゴミ箱の中に身を隠し様子を窺って見る…見た所平民階級の奴らみたいだが…なるほど不真面目そうな顔だ、どうせ自分が原因で仕事に就けないのを貴族のせいにしてた口だな…職人など真面目に働いていた平民の姿は見えない。

「平民を弾圧する貴族に鉄槌をー！！」

しかし厄介な物を持っている…あれは世界第二次大戦後の人間の武器…対異能者用弾頭ライフルだ、アメリカのスプリングフィールド社製の高性能銃だ…当たったら人間なんざ木端微塵になるぞ…丁度ゴミ箱にも隠れたし変装していくかな、マントをナイフで切り裂き服に満遍なくゴミをくつつける、着け髭をつけて髪の毛を白く塗れば…どっからどう見ても老人の物乞いだ。

ゴミ箱から出てふらふらと平民の集団に近づく。

「あん？なんだこの汚えジジイは…」

一人の平民が気がついた、周りの仲間を二人ほど引き連れてこちらに向かってきている、ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべて俺を

取り囲む。

「…パンを分けてくれないか若いの」

声を掠れさせて呟くように言ってみる。

「くせえんだよこのジジイ！」

銃を振り上げて俺を殴ろうとしてくる、腰に手を伸ばしナイフを引き抜く、奴の首にナイフを突き立ててライフルを握る、照準は右の奴…そのまま引き金を引くとそいつは粉微塵に吹き飛んだ、状況を理解した左の奴がこちらに銃を向けようとしている、ナイフを喉から引っこ抜き左の奴の頭に投げた、スイカに包丁を叩きつけたような音がして動かなくなつた、奴らの体から弾とライフルを奪い体に身につける。

「ステルス」

杖を振って隠密魔法をかける、姿が消えて足音すらなくなる完全隠密魔法をかけて街中を急ぐ…略奪に加え暴行…やつてる事はまるで反政府ゲリラだ、正義も糞もない…余談ではあるが戦争に正義は必要だ、正義がなければただの犯罪となる、戦争はあくまで外交の最終手段だと言う事を覚えておいてほしい、俺達異能者ならまだしも不完全な人間だつたら必要な事だとは理解している…がいつもながらにやりすぎだぜヒューマン。

トリステイン城の前には多数の平民が集まっている、門を破ろうとしているみたいだが固定化のかかった石壁や鉄の門に四苦八苦ししている、ならばとうつぶせになりライフルを構えバイポッドを地面に突き立てる、距離は七百メートル、北西からの風…風速八メートル、残弾八十五、目標二百人…余裕過ぎてあくびが出るぜ。

「第一射…」

息を止めて引き金をゆっくり絞る。

「命中、死亡十八人、負傷二十七人」

ターンボルトを起こして次弾を薬室に送り込む。

「第二射」

再び目標に狙いを定めて引き金を絞る、俺が人間相手に弾を外す

わけでもなく…スコープ無しの狙撃でも俺は必ず敵を殺す。

「エイブラハム、私の部下を殺すのはそこまでにしていたかどうか」

後頭部に当たる冷たい金属の感触…いつの間に後ろに回り込んでやがったこいつ…ライフルを手放してゆっくりと立ち上がる、奴もそれに合わせて刀をゆっくりと動かす。

「いよう、久しぶりだな。狂った姉よ」

「そうだな久しぶりだな、愚かな弟よ」

異能者には珍しい黒髪の女…俺の姉クラリス・バーナジア・クルストが俺に刀を向けて立っていた。

「姉…いや、ブラックよ、聞いていいか？何故こんな事をする？」

クラリスはにっこり笑うと俺に刀を向けたまま俺の周りを歩き始める。

「再び復讐の時を得たんだエイブラハム、見なよ人間の愚かさをさ…ほらあそこなんてあんないたいけな少女に三人がかりで…」

そんなクラリスの様子に舌打ちする、彼女は紛れもない俺の姉であり血の繋がった家族でもあった。

「俺に殺されて星に還っても尚貴様は復讐を望むか…父さんはそんな事望んではない！」

「黙れ！お前がいなければ父が死ぬ事もなかった！何故産まれてきたんだ、この疫病神！！」

切っ先が薄皮を貫き血が刃を伝う、どんよりとした雨雲はたつぷりと貯め込んだ水蒸気を凍らせて地面に向かってそれを吐き出させた、雨が屋根を地面を俺を姉を容赦なく叩く。

「言っただろうクラリス、俺は平和の為に産まれて来たんだ」

エイブラハム・ヨシユア・クルストの様に笑って見せる、姉は俺から十二歩距離を取った、俺は背中 of 剣を引き抜き正眼に構える。

「気に入らない、私は高慢な貴様が気に入らない！」

クラリスは大声で叫ぶ、俺が気に入らないと。

「気に入られようが気に入らなろうが俺の知ったこっちゃねえ、

俺は俺の道を行く…さあー 笑顔の化粧《 smile make
》の時間だ」

クラリスを中指で刺してにやりと笑って見せる、クラリスは歯をむき出しにして眉間に皺を寄せ俺に対する怒りを隠そうともしていない。

「それが高慢だと言うんだ！エイブラハム！！」

一足で音速を超え、俺を砕こうとクラリスが接近する。

「高慢だろうがなんだろうが、ゼノヴィアの正義を俺は貫き通した…今までも、これからも！」

黒塗りの刀と白銀の巨剣がぶつかりあう、衝撃で辺りの家屋が吹き飛ば、そのまま鏝迫り合いを続ける、やはり俺の筋力は全盛期と程遠い…クラリスにすら力負けしそうになっている。

「エイブラハム！お前は父を殺した人類が憎くないのか！」

クラリスの剣を弾き、距離を取り今度はこちらから接近し横薙ぎに剣を振るがいなされた、体制を立て直すために蹴りを放つ。

「ああ、憎いね！犠牲の上でしか自分達の正義を語れない愚かな種族さ！」

蹴りを食らったクラリスは僅かにバランスを崩したがすぐに立てなおした、俺もその頃には再び剣を構えている、クラリスの手数に任せた剣技を確実に防御し隙を探す。

「ならば何故！ここで人類の味方をする！」

俺の眼帯に刀が掠り、どこかに飛んでいく…ああ、アニエスから貰ったお気に入りなのに…

「それが彼女との約束だからだ…なんてな、この人間もやっぱり例にもれずクソツタレのゴミ野郎ばかりだったさ、だがそれでも俺はあんた程人類に見切りも着けてなきや嫌ってもいない」

つとかつこつけてみるがヤバいなこれ…奴の打ち込みでもう手に感覚がない、それに比べてクラリスはめがっさ元気だ、俺このまま負けるかもしれん。

「ほざけ偽善者ぁー！ー！ー！ー！っ！！」

医者の様だが…

「最悪だ、胸の傷が痛い…名前はエイブラハム・ヨシユア・クルスト・ド・タルブ…」

ふむふむと白衣の人間はカルテを書いている、畜生痛み止め位よこしやがれ。

「しばらくは安静にしててくれよ、私は他の患者を見て回るから」
俺にカルテを押し付けると医者はそそくさと出ていった、部屋の机に置かれている剣と杖を装備して窓から外に出る、俺の気分と違っていい天気だ。

よろよるとおぼつかない足取りでトリスタニアを歩いていく、どうやらあの平民共は鎮圧されたようで広場に斬首された首が大量に並べてあった、腐敗具合から俺は二週間以上寝ていたらしい、それを横目に俺は酒場を目指す。

ドアを開けると軽やかなベルの音が鳴り響いた。

「おや、エイブラハムじゃないか」

そこにいたおひげが眩しい紳士、ワルドと見とがめ隣に座る。

「何かあったのかい？」

ワルドは俺の様子を見てエールを呷る手を止めた。

「別に」

掠れた喉から絞り出した言葉はたった三文字だった、運ばれてきたエールを啜る。

「…ふむ、言いたくないなら聞かないさ、だがエイブラハム、君はそろそろ僕に恩返しさせてくれてもいいんじゃないか？君には母さんを助けて貰った借りがある」

「…ならば頼みがある、ワルド、お前が見つけた砂漠の巨大な銀色の遺跡に案内してほしい」

俺の言葉を聞いてワルドは目をぱちぱちと瞬きさせた。

「あんなよくわからない遺跡にかい？まあいいけど…」

ワルドの返事を聞き俺は、一旦満足した、さあ力を取り戻そう、全盛期の体を…異能者の体を。

第十話：リメンバー・ア・ヒーロー

エイブラハムが行方不明になって一ヶ月が立とうとしていた、人類平等主義のセブンズカラーはトリステインに宣戦布告しその戦火は力のない女子供にまで広がっていった、トリステイン軍は平民が持つ新たな銃に苦戦を強いられ敗北に敗北を重ねて行った。

残っているトリステインの国土はタルブ領地、魔法学院、そして首都のトリスタニアだけだった、トリステインは求めていた、英雄を…戦争を終わらせるだけの力を持った英雄を…

「お父様…」

先日のヴァリエール領襲撃の際ヴァリエール公爵は負傷、王都の軍人病院に収監されているが意識はいまだ戻ってはいないらしい、私の主であるカトレアは毎日こうやって祈るだけだ、やっぱり人間の雌は戦う力はないと思われる。

「カトレアさん、あんまり根を詰めないでください」

なんとというか娘が増えたような感覚だった、私は大軍を指揮することはできない、精々小隊指揮かその程度の教育しか受けていない、ランサーはたった一人中央戦線で敵を引きとめている、彼は私に語ってくれた、アイルランドの英雄セタンタだと、まさに伝記通りの活躍である。

「…伏せて！」

カトレアを押し倒して場に伏せさせる、学院内に備えつけられた聖堂が揺れステンドグラスが砕ける。

「何！？何！？」

轟音の中カトレアの金切り声が聞こえてくる、頭を上げようとしているから無理矢理頭を押さえつける。

「敵の砲撃です！頭下げて！絶対に動いちゃダメです！」

砲撃は五百発を境に止まった、えっと…たしかクルストさんが言うには次弾発射まで一分位はロスがあるからその間に逃げろってい

ってましたね。

カトレアを抱きあげてボロボロになった聖堂から飛び出す、そして急いで掘られた塹壕の中にカトレアと共に飛びこむ。

「あ、一葉にちい姉さま！ご無事だったんですね！」

ルイズが青い顔で必死に笑っている、魔法が届かない距離からの砲撃は怖いだろうに：私は意を決して刀をひつつかむ。

「ちよつと敵をやっつけてきます」

「か、一葉？」

「大丈夫、カトレアさん、今日は枕を高くして寝られますよよかったですね」

そう言って塹壕を飛び出し崩れかけた壁に飛び乗り目を凝らす、砲撃陣地はここから二十リーグ先に鎮座している、歩兵牽引式の野砲だから機動力はゼロに等しい：そこからライフルを持った歩兵がばらばらに進軍してきているから：そうですね、野砲を全て潰した後歩兵をバツクアタックしても十分すぎるほど時間は得られます。

「いってきまーす」

そう言ってカトレア達に手を振り砲撃陣地に向かって水平跳躍する、腰の刀の鯉口を切り目を閉じる、明鏡止水の境地：クルストに教えて貰った最高の技能をフルに活用し刀を引き抜く、一撃で五百門の野砲を切り捨てる：どうやら私の剣術は鈍っているようだ、本来なら砲兵の足も落としている予定だったのだが：一息で砲兵達を切り刻み歩兵の後ろに向かって走っていく。

「シャツ！」

急所を外した一撃で複数人の意識を刈り取る、気付かれる前に半分以上を仕留める自信はある。

刀を鞘に戻してタメを作る、目を閉じて明鏡止水の境地に近付ける。

「三柳飛翔桜舞乱斬」

刀を鞘から解き放ち、再び鞘に戻す、まだ何も起こらない、この技は空から桜の花びらが舞い散るように相手を切り刻む。

「終わりです」

パチンと指を鳴らすと同時に阿鼻叫喚のコーラスが開始される、いつ見てもこの景色には吐き気を催す。

「ごめんなさい、でもこうしなければ貴方達がカトレアさんを殺していた：だからごめんなさい」

死亡者はいない、動けない程度に痛めつけられた兵士達が足元で呻いている、彼らに頭を下げてその場を後にする。

所詮ただの自己満足、私は誰一人として殺せない臆病者だ、自身自身が嫌になる：自己嫌悪に陥る前に遙か彼方から飛んでくる黒い飛行物体に目を向ける、やっぱり来た。

「ちっ！遅かったか：脆いから人間は嫌いなんだ」

舌打ちをするその人はクルストの姉たるクラリス：私との直接の面識はない、だが噂は聞いている：過激派に属している為共存派だった私を狙っていたという噂だったがクルストに敗れ彼女は星に還った。

「おやおや！これはこれは：悪名高き微笑み三歩の一葉さんではないですかあ！」

なんと言うかこのクラリスと言う人物はクルストにそっくりだと思っ、両手を広げ胸の前に突き出し不敵に笑う：まんまクルストである。

「そういう貴方は卑劣なクラリス様、お元気ですね」

とりあえず挨拶として返事をしてにっこり笑っておく、クツクツとクラリスは笑い私に刀を向けてきた。

「いやあ光栄だ、まさか英雄の一人に皮肉を言っていただけとは：ぶち殺すぞ糞野郎」

「嫌ですねぇ、私は女ですよ」

チリツと首筋が熱くなる、どうやら向こうはやる気みたいだ。

ぶっっちゃけ私はやる気なんて皆無なのだが仕方なしに刀の柄を握る、私は後の先の極み、向こうは先の先：相性はお互い良いと言えるだろう、ゆっくり腰を落として鯉口を切った。

「シャオツ！」

クラリスの刀が袈裟に振るわれる、それを刀の中心で受けて刃の上を滑らせて流す。

「シツ！ハツ！」

微妙にリズムを狂わせた二撃を放つクラリス、そこらの使い手ならこれで終わりであろうが私には通じない、クラリスの刀の平をぶつたたいて軌道を反らす。

「ちっ！やっぱあんたのが上か」

クラリスは後ろに飛びのいてこちらを睨んでいる。

「まだやりますか？次は…」

刀を翻して日光を反射させる。

「斬ります」

そう言い放つとクラリスは非常につまらなそうに舌打ちした、刀を納めて両手を上に上げた。

「わかったよ、今日の所は引いてやる…だけど覚えてる、いつか貴様の喉笛食いちぎってやるからな」

私を指差してそう言い放った。

「ええ、楽しみにしていますよ」

ニツコリ笑って返事をしてやる、クラリスは殊更つまらなそうに舌打ちして遙か彼方に走り出していった。

「ふう…」

久しぶりに本気で動いたら疲れた、どうやら私も年らしい。

「ぐっ…がっ！…はあ…はあ…」

痛い…全身が痛い…鉄製の床の上でのたうちまわる、体を異能者

の体に変化させた、やはりこの研究所は昔アメリカが作っていた異能者錬成所だった、研究は一応成功、人間は異能者となる事が出来たが二十四時間年中無休で全身を襲う激痛に耐え兼ねて自殺するか気が狂うかの二択だった。

「あぐあっ！…げほっ！げほっ！」

鉄製の床は血まみれだ、俺の体は全てが異能化していない、まだ人間の血を追い出している最中であり床は真っ赤になっている。

まるで全身の皮膚を焼けたナイフで剥がされているような痛み、内臓には溶けた鉄が波をうっているような感覚がし全身の骨は粉碎される痛みを味わう。

だが脳だけは元々異能者の物だったようどこに痛みはない、充血し真っ赤になった視界は研究室をノイズ雑じりに映し出している。

「……！……！」

自分が何を叫んだのすらわからなくなった、全身から噴き出す血は止まったようだ…激痛はまだまだ終わらない、あまりの痛みに俺は意識が遠退くのを感じた。

「…ブラハム、エイブラハム！目を開ける！」

誰かに揺すられ激しい痛みで目を開ける。

「…ワ、ルド？」

毎日痛みに堪える事に精一杯で日にちの感覚なんざ消えうせていた、見覚えのある友人の姿、彼がここに居ると言う事は約束の一ヶ月後になったようだ。

「…君の髪は黒かったと記憶していたが」

ワルドは怪訝な顔をしている、ゆっくり立ち上がり鏡を見ると俺の黒髪は真っ白になっていた、エメラルドグリーンだった目は金色に輝き筋骨隆々だった体はほっそりしてしまった。

「…どうやら前世の妻が力を貸してくれているみたいだ」

この姿はまるで俺が愛したあいつの姿だった、ほっそりした体に白い髪、星のようにキラキラ輝く金色の瞳…だが俺の眼はまるで地獄の釜のようにギラギラとしている。

「…そうか、それじゃあ行くところかエイブラハム」

「ああ、全てを守る為に」

「トリステインの為に」

ワルドと拳をぶつけあって外に出る、さて急がなくては…痛みを
押さえながらトリステインに向かう

よいこのえほん【せかいいちかなしいえいゆう】（前書き）

読みにくいです、殆どひらがなです、99%位平仮名です

よいこのえほん【せかいいちかなしいえいゆう】

へいわなへいわなあるとき、おとこのこはうまれました。

おかあさんとおとうさんにあいされて、おねえちゃんにちよつとだけしつとされて、そしてかみさまにしゆくふくされてうまれました。

へいわなへいわなあるときです、おとこのこはあたらしいえねるぎーをはっけんしました、じんるいはみんなよろこびました、けどじんるいはやさしいひとばかりじゃありません。

おとこのこをころしてあたらしいえねるぎーをどくせんしようとおもいました、けれどおとこのこはおとうさんとおかあさんにまもられていてわるいひとはおとこのこをころせませんでした、おとこのこはじんるいにたいしておこりわるいひとにたずねました。

「おお。おろかなじんるいよ、ぼくのおとうさんとおかあさんがなにをした、ぼくがなにをした」

おとこのこのなみだながらのこばをわるいひとはげらげら笑いながらこたえます。

「おまえのおやじとおふくろはおまえをうんだつみでてんばつがくだったのだ、おまえはうまれてきてはいけなかったのだ」

わるいひとはじんるいのえらいひとでした、おとこのこはもっとおこりました。

「じんるいよ、おまえたちがそこまでこうまんでむちであるかだとはしらなかつた、そこまでみにくいのならはなるちきゆうのだいちにたつことはゆるされない、ぼくがおまえたちのかみにかわりおまえたちをだんざいしてやるう」

おとこのこがそういつてりょうつてをうえにあげるとたくさんのおんせきがわるいひとのおうちにおちてきました、わるいひとはしんでしまいました。

かたきはうちました、でもおとこのこのきははれません。

「もつとじんるいのちをだいちにながせ、もつとじんるいのたましいをほしにかえせ」

やさしいえがおだったおとこのこのおもかげはもうありません、おとこのこはおにのようなかおでじんるいをころしていきます。

「おやめなさいおにのこよ、つみもないものをころしてはなりません」

いつもどおりじんるいをちきゅうからそうじしていたおとこのこのまえにしろいかみのおんなのこがあらわれました。

おんなのこはとてもきれいでまるでおとぎばなしにでてくるおひめさまのようでした、ですがにくしみにこころがとらわれたおとこのこにはおんなのこのすがたがよくみえませんでした、おとこのこはわるそうにわらっていいはなちます。

「にんげんはそんざいしているだけであくだ、わるいやつだ、だからぼくがころすんだ」

おとこのこにはむかしあったやさしさどころかちせいもきえうせていました、おんなのこはそれをみてひどくかなしいきぶんになりました。

「かわいそうなひと、わたしがあなたをたすけてあげます」

おひめさまのようなおんなのこはおとこのこのためになきながらそういいました、おとこのこはなぜおんなのこが泣いているかわかりません。

おとこのこはおんなのこにつるぎをむけました、おんなのこはかなしそうなかおをするとぴかぴかのしろいおおきなつるぎをかまえました、おとこのこはわらいます。

「そのつるぎはきれいすぎる、おまえたいしてつよくないな」

おとこのこはいかりのあまりれいせいなはんだんりよくも、するどいかんさつがなんもうしなっていました、よくみればわかったはずです。

おんなのこのけんはぴかぴかでしたがよくみるとちいさなほこぼれがいくつかあってちいさなきずがたくさんありました。

おとこのこはよろこんでおんなのこにきりかかりましたがおんなのこはとでもつよくおとこのこはまけてしまいました。

「そんなにぶいけんすじじゃわたしにきずひとつつけられません、それではあなたをすくうとしましょう」

おんなのこはきらきらのえがおでそういいます、あっさりまけたおとこのこはくちをぽかんとあけました、まけてれいせいになったおとこのこのめにはとてもきれいなおんなのこがうつついていたのです。

「ぶざけるな、おまえにたすけてもらうことなんかない」

おとこのこはつんでれでした、さてさてふたりはいつたいたいどうなるのやら…つづきはまたこんど

よいこのえほん【せかいいちかなしいえいゆう】（後書き）

エイブラハムのその後とエイブラハムが所持していた武器

元となった小説常闇学園では死亡後にも数回出てきます、エイブラハムは死後妻と一緒に墓…というかダンジョン化した遺跡に埋葬されますが本人の魂は悪霊となってそこを守り続けています。

エイブラハムが所持していた武器はいくつか存在します、中にはエクスカリバーなどにも劣らない武器もあります、好んで使用していたのはプラチナム・ラヴァーと銘が入った巨剣とピースメイカーと呼ばれたクレイモアでしょう。

プラチナム・ラヴァーは正に名剣です、元はエイブラハムの妻が使っていた物ですが理想と共にエイブラハムに受け継がれたみたいで、ピースメイカーは小説にも出てきていますが名の通り平和を作り出す事が出来ます。

ピースメイカーは平和への一撃と言う大切な物を犠牲にして打ち出す必殺技があります、エイブラハムの場合は妻との思い出と幸せな未来を失って打ち出していました、発動すればどんな敵でも一撃で殺せる威力を誇ります、簡単に言えば防衛不能で回避不能で必ず相手を死に至らしめる事が出来る程度の技って事です

第一章最終話：さようならエイブラム、こんにちはクルスト

揺れる馬車の中で薬煙草を吹かす、この煙草には強い鎮痛作用があり今の俺の体には打ってつけの煙草だ。

「お客さん、見えてきましたぜ。トリスティン魔法学院だ」

馬車の運転手がそう言うてきた、煙草を口にくわえてフードを被る。

「ここでいい、ありがとうな」

運賃に少し色をつけて渡すと運転手は喜色満面の笑みで去って行った。

そのまま学院に向かって歩いていく、酷いなりだった、草原だった学院の回りは穴ぼこだらけで壁は所々崩れかかっている、鉄製の門は吹き飛ばされて門としての機能を失っている、その門の前に椅子にもたれ掛かって眠る女が一人…

「……おかえりなさい」

女はうつすらと目を開けると口に微笑を浮かべて俺にそう言うてきた。

「…ただいま、あいつらを守ってくれてありがとう一葉」

そう返事を返すと一葉は満足したように微笑み、再びコックリコックリと船を漕ぎ出した。

恐らく一ヶ月間毎日戦闘していたのだろう、かなり疲れているようだ、弾丸が掠ったのか体のあちこちに薄い切り傷がある。

一葉に向かって深々と頭を下げてから学院内に入る。

「…補給不足による餓死者数名か」

幾人かの死体が転がっている、どれも痩せ細り酷い有様だ、ただやはり少ない補給も貴族に全て回っているようで死んでいるのは平民だ。

「ちっ」

気に入らずに舌打ちをする、とりあえず自室に向かってみよう…

…死体や痛みには呻く兵士達を横目に部屋までの階段を足早に歩いた、自室の扉を開けるとそこには…

「…ダレ？」

弱り果てたカトレアが俺のベッドを占拠していた。

「…俺だカトレア、随分と痩せたな」

俺を見るとカトレアはヨロヨロと立ち上がった、倒れそうになるのを見て思わず手を貸した。

「エイブラハム…助けてエイブラハム、大変なの、シエスタが大変なの…！」

思わず首を傾げる、あの糞強いシエスタが一体ダレにやられると言っただろう…

「よし、案内してくれ」

だが心配なのも事実、カトレアを抱き上げて部屋の扉を蹴り開ける。

「彼女の部屋よ、急いでエイブラハム」

頷いて男子寮の窓からそのまま女子寮の窓を突き破る、シエスタの部屋の扉を蹴り開けるとそこには…

「あ、ちい姉様と…誰よあんた」

怪訝な顔をするルイズと包帯だらけのシエスタが居た、カトレアを下ろして体を覆っていたフード付きマントを脱ぐ。

「エイブラハム兄様！今までどちらに…」

「話は後だ、今すぐアルコールと綺麗な布を持ってこい」

「…はい、後で絶対話して下さいね」

ルイズに頷いて返事を返しシエスタに近寄る、まるで拷問されたかのような傷痕、どうやらシエスタはセブンスカラーの一番厄介な奴と戦ったらしい…

「意識は無し、脈拍微弱…さらに失血、傷は…裂傷が56ヶ所、火傷が皮膚の26%、右肩粉碎骨折に頸椎破損、大腿骨複雑骨折…頭蓋骨に亀裂、左の足も脱臼しているな」

酷い怪我だ、この時代の遅れきった医療ならまず助からないだろ

う…だが俺に不可能はない。

「よく頑張ったなシエスタ、兄ちゃんがすぐに助けてやるからな」
シエスタの頭を撫でる、触診って奴だ、この糞つたれの脳味噌はこうやって触るだけで治療法を教えてくれる、さあ…黒いジャックだろつが神の手だろうがあっさりを超えてさらに高みに行つてやるうじゃないか、背中のリュックサックを下して中から簡易手術キットをひっぱりだす、研究所におかれていた使い捨ての物だが十分な手術ができる…アメリカ軍海兵隊衛生兵御用達の便利な品である。

麻酔を全て打ち、傷口を消毒する。

「エアスキン」

杖を二三度振つて呪文を唱える、簡易式だがこれでしばらく無菌室が出来あがった、メスを被っているビニールを引っぺがして骨折箇所の皮膚を斬り裂く、左手に持った糸で太い血管を縛り止血をしながら骨を継ぎ合わせる、ちっ、どうやらこちらの腕も鈍っているらしい…粉碎された骨全てをつなぎ合わせるのに十八秒もかかった…傷口をふさいで次の傷に向かう…

「おゝわりつと」

最後の傷口を縫合するとどつと疲れが押し寄せた、所要時間三時間、まだまだタイムを縮められそうだ…って妹相手に研究者魂燃えあがらせるなんて俺はマッドサイエンティストか、手術キットを厳重に密封してゴミ箱に捨てる。

部屋の隅を見るとヴァリエール姉妹にエルザ、テファが重なり合つて寝ている…そんなに待たせたつもりはないのだが…まあ致し方あるまい、手術中外で砲撃音や剣戟音が響きわたっていたが彼女たちは目を覚まさなかった、どうやら大分疲れているらしい。

「ひい…死んじゃいます…」

へ口へ口と一葉が部屋の中に現れた、こちら也大分疲弊している

…そら一ヶ月も毎日寝る間もなく戦い続けるとなると異能者だって疲弊する、ただ三柳一葉は少なくとも後一年は同じように戦えるし今夜一晩ぐっすり眠ったらまた明日の朝には元気で傷も疲労も全て取っ払って同じように行動できる。

異能者が人間に恐れられる理由は解って貰えたかと思う、異能者十人と人間一億人が戦ったら勝つのは異能者なのだ、そして異能者は一億六千万人居る上に更に鍛えられた三柳クローン兵団が五十億人いる…一葉はその内一人であつたが今では最強の一角を占めている…まあ何が言いたいかと言うと人間が異能者を迫害するのは自明の理である、人間が弓矢を持って甲冑を着こみながら戦争していた頃には異能者は車に乗ってテレビを見て空を飛んでいたのだ、しかも全て片手間のお遊びで作り上げた物だ…というのだから驚きだ。

「クルストさん、酷い姿になりましたね」

一葉は俺の姿を見ながらそう言い放つた、鼻を鳴らして返事をする。

「俺がどんな姿をしようが関係ないさ、敵を殺せればいい」

窓の外を眺めていると非常に悲しい気分に陥ってきた、一葉のおかげでここは落ちていないみたいではあるが…やはり俺が決着を着ける必要があるみたいだ、リーダーが死んだら奴らも撤退するだろう…この体でどこまで戦えるかは未知数ではあるが…前回のようは無様な結果にはなるまい。

「相変わらず悲しい人…」

相変わらず一葉は聖女のような微笑みで俺を見ている…なんというか、一葉は俺の母さんに似ていた、マリア・マグダラ、神の子を産むと予言されていた女。

「言うな、俺はこの生き方に満足している」

一葉がいつも通りなら俺もいつも通りに返す、ふてぶてしくにんまり笑って見せる、常に油断し油断せず、慢心し慢心する。

「今度はなんの為なんですか？…彼女の為？…あの子の為？」

一葉がにっこりと笑った、聖女から少女へのシフトチェンジ…全

く持つて腹が立つ、だったら答えてやるうじゃねえか、てめえが常闇学園で最初に友達になったあの男みたく、俺の前世みたく。

「何回答えさせやがるんだ三柳、自分の為に決まってるだろうが」
いつも通り、そういつも通りだ。

「…おかえりなさいクルストさん」

そして一葉は少しだけ悲しそうな顔をした後そう言った、その様子に鼻鳴らしてみる。

「おう、ただいま」

帰ってきた事に少しだけ後悔して、彼女たちとの別れにもっと後悔して、今更引き返せない自分の意地に少しだけ嫌悪して…そして覚悟した。

「三柳、この部屋に居る奴に伝えてほしい事がある」

だからこれはカトレアの婚約者からルイズの兄貴分からシエスタの兄貴からエルザのご主人様からテファの使い魔からのメッセージ。
「なんででしょう?」

戦友はにこにここと微笑みながら辛い役目を受け取ってくれた。

「今までありがとう、さようなら…そう伝えてくれ」

そう伝えた時、頬に涙が伝った、どうやら俺は泣いているらしい、そうだな悲しいな…悲しいよな俺よ、でもなこれじゃダメなんだ、クルストが最初に殺すのは自分の心…泣くんじゃない笑うんじゃない怒るんじゃない楽しむんじゃない…ただ只管に…敵を殺し続ける。
「…確かに伝えます、後は?」

一葉は少しだけ俯いてそう答えた。

「お前に頼みがある、こいつらが一人立ちできるまで守ってくれよ」

一葉は満足したように頷いた、そのまま椅子の一つを占領して寝息を立て始める一葉…もう行けと言う事だろう、どうやら一葉は納得してくれたようだ。納得してくれなかったら一葉は俺を行かさなかつただろうしな。

そのまま部屋を出ると振りかえりたい衝動に襲われたがそれをねじ伏せて俺は前に進む…本当にさようならだ。

エピソード

「えーっと…お肉屋さんお肉屋さん」

マルトー料理長から渡されたメモを眺めながら私は復興した王都を歩く…あ、どうも皆さん、私カトレアさんの使い魔の三柳一葉です、私は現在戦争終結祝いの為に学園のお手伝いを命じられまして王都にお買い物に来ています。

「よぉー一葉ちゃん、魚はこんなもんでいいの？」

ランサーが大量の魚を抱えたまま私に接近してくる。

「はい、それも荷馬車に乗せてくださいねー」

ランサーは頷いて荷馬車に魚を乗せた、ちゃんと野菜と区切っておいてくれるか心配だが…まあエルザが指揮を取ってくれているから大丈夫だろう。

「一葉？」

「あ、カトレアさん今いきますねー!!」

カトレアに駆け寄る、カトレアは思ったよりも元気だった、エイブラムはそんな人だわ、とか言っていたが…恐らく辛いはずである、クルストさんは公式では王都防衛戦に参加中行方不明となっているが…大切な人にだけは真実は伝わっている、クルストはこれで満足であろうと私は確信出来る。

まあさようならとあの男は言ったんだ、運の巡りあわせが良くなくてはもう会う事もできないだろう…それは仕方ない…さて、これから世の中はどうなるのやら…どうやらクルストは星復活の基点はすでに用意してくれていた、地球は見事に復活したが…私は帰る事は出来ない、どうやらこの体…老けてないからおかしいと思ったが思念体らしい、私は宇宙船の中で老衰でくたばっていたらしく生前活躍しすぎた為にどうやらランサーと同じ英霊としてこちらに召喚されたみたいだった。

だったらこの命、主人たるカトレアの為に尽きるまで尽くすのが

儀と言う物…まあ楽しくやろうと思う。

そういえば明日ルイズが召喚の儀を行うと聞いた、カトレアのよ
うに異能者を召喚するのであるうか？　だとしたら誰が呼ばれるの
であろう…どうやら私達希望側の異能者とセブンスカラーのような
絶望側の異能者を召喚出来る魔術師がここにはいるようだ。

どちらにせよ楽しみである、新たな戦友か…それとも強敵か…
私はそんな事を考えてクスリと笑う。

「…？どうしたのかしら一葉、芸人でもいたの？」

カトレアがきよろきよろと大通りを見渡している、なんとというか
年齢に比べて子供っぽい人だ、首を左右に振って否定しておく。

「これから先がちよつと楽しみなだけですよ」

そう答えておく、配役は変わった、古き視点は別の視点となって
新たな視点が元の可能性に割りこむ…さてさて次は一体どうなるの
やら…

エピソード（後書き）

次回より新たな主人公が…ようやく原作の流れになりますよ、
やっとう

第二章プロローグ・君に呼ばれて（前書き）

ようやく…ようやく本編に入れた…長かった…長かったぞうう！
！

第二章プロローグ：君に呼ばれて

平和となった学園の広場にまるでトンネル工事をしているかのような爆音が響き渡っている。

「はあ…はあ…」

その中心に居るのは綺麗な顔を汗だくにして一生懸命杖を振る発育不良の鳶色の女の子…その様子を見兼ねたハゲた男…コルベールは申し訳なさそうに口を開く。

「ミス・ヴァリエール、残念だが…」

ヴァリエールと呼ばれた女の子は気丈に顔をあげてコルベールを睨んだ。

「もう一度…もう一度だけお願いします！」

睨まれたと言うのにコルベールは微笑みを携えて。

「後一度だけですよ」

正真正銘最後のチャンスをヴァリエール…ルイズにくれてやった、ルイズは気合いを入れて前を見る。

（私になら出来る…エイブラハム兄様がそう教えてくれた…諦めちゃダメ、他のコモンだって私は出来るんだから！）

自分にそう言い聞かせて杖を振り上げる。

「この宇宙のどこかに居る私の使い魔よ！」

押して駄目なら引いてみな、それを体言するように自分で考えていた呪文を高らかに唱える。

「強く気高い最強の使い魔よ！貴方の力を私に頂戴！変わりの望む物は全て貴方に与えるわ！だから答えて…私の名前はルイズ！貴方が必要なの！」

杖を振り下ろすと爆発は起こらず…ブラックホールのような球体がそこに浮かんでいた。

ブラックホールのような球体が砕け散ると…今まさに戦場に居たような汚れ具合の白銀の甲冑を着た男がその場に倒れていた、大い

びきをかきながら。

「こ、こんなのが私の…使い魔……」

そしてルイズはその姿を見てがっくりと落ち込むのだった、男が目を覚ましたのかソノソと立ち上がったくる。

「…ん、ここは………?」

辺りをキョロキョロと見渡しゆっくりと立ち上がった、兜をこれまたゆっくり脱ぎ…現れた素顔にルイズは驚いた、中性的な顔立ちをしていて少年にも少女にも見える、エイブラハムのようなツンツンの黒髪は太陽に照らされて宝石のように輝いている、美形だ、物凄い美形だ。

「………何見てんだよ、そんなに僕の顔がおかしいか?」

その美形は物凄く不機嫌そうに…唸るようにそんな言葉を放った、さて…負けず嫌いのルイズが聞いたらどうなるか…解るだろう。

「な!? あんたちよつと美形だからって貴族にそんな態度取つていいわけないでしょ!」

そして甲冑の男もカチンと来たようで反撃の為に口を開いた。

「僕はあんたつて名前じゃないっ! アデル・モトローラ・クルストつて立派な名前があるんだ! 馬鹿にするなチビスケ!」

前に乗り出し怒鳴るアデル、ルイズもやはりカチンと来たようで…。

「私だつてチビスケなんて名前じゃないわ! ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールつて立派な名前があるのよ!」

「はん! お前なんかチビスケで十分だ!」

「何よ女顔の癖に!」

「なんだと!? 乳無しぺったん娘が!」

「なんですつて!? 平民の癖に!」

睨み合う二人、コルベールはその様子を見て深く深くため息を吐いた。

「コルベール先生! やり直しを要求します! こんな…こんな下品な

平民嫌です！」

ルイズは口喧嘩に負けたのか半泣きでコルベールに詰め寄った、後ろではアデルがドヤ顔をしている。

「駄目です、もう時間もありません」

「ですが！」

「……ミス・ヴァリエール、貴女一人の為に大分を消費致しました、それに召喚した使い魔は最後まで面倒を見るのが当たり前……わかりましたね？」

そう子供に言い聞かせるようにコルベールが言つとルイズは渋々とだが頷いた。

「……あんだ、アデルとか言ったわね」

ルイズは覚悟を決めて前に出る、アデルは不思議そうな顔をしている。

そう言われて頷く、一体何を言っているのだろうか……

「我が名はルイズ……五つのペンタゴン……」

なんかぶつぶつと喋った後……ルイズは僕にキスをした。

「っ！？おまつ！？ぼ、僕のファーストキス……ってあつっう！？」

左手に焼きごてを押し当てられたような痛みと熱さを感じた。

「我慢なさい、すぐに終わるから」

ルイズの言葉を聞いて思い切り睨む、めっちゃ熱いんだよこれ……腕につけているPDDが精神汚染を感知している……くそっ、精神汚染 八型……刷り込み式洗脳魔術の類であると俺は覚えている……しかもかなり古いタイプの洗脳魔術であり僕はこれに対するワクチンを持ってはいない……結局熱さは収まり左手に何かのルーンが刻まれた。「ほお……これは珍しいルーンですねえ、ちよつと書き映させていただいても？」

なんかハゲがメモ帳持つてわくわくしてる、きもい。

「まあいいけどさ……」

残念ながら僕にルーンを読む事は出来ない、使える魔法も簡単な物だけだ……手榴弾程度の威力の火球をぶついたり、切り傷擦り傷をある程度まで癒したり……そんな物だ。

「……さて、ではこれにて解散です。各自自分の使い魔と友好を深めて下さい」

ハゲがそう言い放つと回りに居た奴らはぶつぶつと文句を言いながら去っていく、だいたいはルイズに対する罵倒……そしてルイズの回りに何人かの女が集まってくる。

「やったじゃないですかミス・ヴァリエール！」

ボブシヨートの黒髪を持つソバカスがチャーミング（死語）な女の子がルイズに話しかけている。

「ええ、ありがとうシエスタ！……でもこんなのが……」

不満そうにこちらを睨むルイズ、不満なのは僕も一緒だよ。

地面に座り込み様子を見る。

「おめでとうルイズ、私と一緒にね」

ルイズと同じ髪の色をしたなんと言うか……綺麗な人がルイズの頭を撫でている。

「はい！ちい姉様！」

ルイズは凄く嬉しそうだ、ちい姉様はこちらに近寄ってきた。

「私はカトレア、アデル君……でいいのよね？」

にっこり微笑む彼女に少し見とれた、まるで女神のような笑顔だ……なんて事を考えていたら頭をひっぱたかれた。

「何ちい姉様をすけべな目で見てるのよ！このエロ犬！」

ルイズだった、あの杖で僕の頭をひっぱたいたらしい。

「誰もそんな目で見てねーよ！お前と違って綺麗だから見とれていただけだ！」

「なっ……！まるで私が綺麗じゃないみたいじゃない！」

「ほお……！皮肉も通じやがらねえか！胸だけじゃなくて脳もミニマムなんだなお前」

「ぬぁんですつとうえ〜！〜！」

「なんだ戦るか!？」

「戦ってやるうじゃないの!〜！」

お互い罵り合いとうとう殴り合いの喧嘩まで発展しまった、母さんが見たら……あの母さんなら混ざってくるな、うん。

いつも背負っている剣に手を伸ばして…剣がないのに気がついた、仕方なしに拳を構える…戦いの基本は格闘だつて誰か言ってたしな。

「はあ…ルイズもアデル君も……一葉、止めてあげて」

「はいはい、えいや」

なんだか余り聞きたくない声が響いて地面が揺れた、僕とルイズは地割れに挟まれて見事に動けなくなつてしまった。

「喧嘩は駄目ですよー、ルイズちゃんと……あ、馬鹿弟子」

「し、師匠……」

顔をあげると僕の剣の師匠たる三柳一葉が鬼もしよんべん漏らしで裸足で逃げ出し肥溜に落っこちるような微笑みを浮かべていた。

「…よいしょ」

襟首を掴まれて引っっこ抜かれた、全身が震えて歯が噛み合わずガチガチと音を立てる。

「私、剣はなんの為にあるつて教えましたっけ？」

耳元で囁かれる死神の宣告。

「よよよよよよよ弱き、ももも…者をままま守る…た、為にと……」

ギリツと首が絞まる。

「続き」

ゴクリと唾を飲み込みえずく、半泣きな僕はすごいと思う。

「けっ…決して、自分の怒りや憎しみで振ってはいけない物…」

くるりと手を反して僕の顔を見る一葉、つまりは僕も一葉の顔を見てしまう訳で……心臓が止まるかと思った。

「人間のルイズちゃんも君より強いですか？」

そんな事はわかりきっている、首を横に振る。

「教えた事位守りなさい馬鹿弟子、いつか大切な人を失いますよ……はい、立って」

一葉が悲しそうな顔をした後、僕は地面に下ろされた……これは許されたのだろうか？

「気をつけ」

どうやら許されてはなかったらしい、逃げだそうにも蛇に睨まれた蛙のように動けない。

「ビンタ一発で許してあげますね、後でルイズちゃんにも謝る事……体型の事はタブーですからあの子……飛んでらっしゃい！」

一葉が振り上げた手は……初速であっさり音速を超えて振り下ろされた、頬にインパクトとする瞬間……走馬灯が脳内を駆け巡った。

母さんに遊園地に連れて貰っていた辺りでベチュツと僕をビンタした音が響き……音を置き去りにして僕は壁にたやすく突き刺さり……

……後は記憶がない、どうやら気絶したらしい……ビンタされた音が可笑しいとかツツコミは無しね……ぐはっ……

第一話：動き出す悪党

ここはタルブの屋敷：中庭の慰霊碑に寄り添うように建てられた小さな二つの墓の前で祈る。

「親父：お袋：あの世で仲良くやってくれ、タルブは俺が守るからさ」

荒らされ果てたタルブの屋敷に振り返る…思い出は全て胸の中、形ある物は全て破壊されてしまった。

「もういいのかいエイブラハム中佐殿」

後ろで嫌みつたらしく中佐を強調する妙齡の女…マチルダを睨む。

「ああ、問題ない…それでオスマンの爺の返答は？」

「はい、これ」

マチルダが差し出してきた手紙を引つたくり荒く中身を広げる、長ったらしい文だが要約すると嫌だとしか書かれていない。

「狸爺め」

手紙に魔力を通して燃え上がらせる、苛々しながら煙草をくわえる。

「マチルダ、計画はCプランに変更。やれるな？」

火を点けて吹かした後マチルダに言い放つ。

「いつでもやるさ…あんたの方も準備出来ているんだろっねえ？」

相変わらず小ばかにしたようなマチルダ、その姿にニヤリと笑って見せる。

「全ては事もなし、オールオツケーさ、ミスロングビル」

「あらそうですか、流石ですわミスタレイブン」

マチルダは見事に化粧をして、俺は顔に包帯を巻いて馬車に乗り込む。

「やあ同志諸君」

中にはワールドが待っていた、どうやらワールドも仕事を終わらせてきたらしい…

「ようワルド、王女殿下からの許可は取り付けられたか？マザリー
二にはバレていないだろうな」

「僕を誰だと思っっているんだい？」

「…それもそうだな」

ワルドの得意げな顔に苦笑する、案外子供っぽい男だ。

「…ではこれよりナラシン八隊任務を開始する、各々持ち場に付き
尽力せよ、散！」

各々の持ち場に向かい馬を走らせる、俺は…向かわなくてはなる
まいな、アルビオンに。

懐かしのアルビオン、ウェールズは元気だろうか？新聞によれば
首都は陥落し王軍は西に後退したとの事…あの悪運の強いウェール
ズが死ぬとは思えないが急ぐに超した事はない。

港にはアニエスを待たせている、アニエスと俺ならどんな敵にも
負けやしない。

「……チツ」

馬を止まらせる、道が倒木で塞がっていた、迂回しなくてはなら
ないな…だが倒れ方が不自然だ、まるで巨大な像にでも張り倒され
たような…

「…マチルダ、アイツ何ヤツテンダ？」

顔をあげると巨大なゴーレムが魔法学院に向けて歩いていて、思
わず片言になってしまった。

阿呆は無視して先を急ごう…気にしちゃいけない、クールにク
ールに俺は去る。

呆れかえりながら馬を急いで走らせると港町が見えて来た、町の
入り口では見覚えのある相棒が手を振っている…思わず口が綻ぶ、
懐かしいな、あいつと戦場を駆けた日々…こうして再び靱を並べて
共に剣を振れる日が来るとは嬉しいかぎりだ。

「クールスト！！」

馬を駅に預けているとアニエスが近寄って話しかけてきた、頬は
紅潮し目は輝いている…なるほど、あれを見たか、それは興奮する

だろうな…まだ艦装を施してない為に戦闘には使えないが飛ぶ位なら十分だ。

「ようアニエス、見事なもんだろう？コルベールの設計したフネは馬に乗せていた荷物を担ぎながらにやりと笑って見せる。」

「ああ、あれならロイヤル・ソヴリンも目ではないな、どんな大砲が積まれる事やら…やはり青銅製のカノン砲か？」

目を少年のようにキラキラ輝かせながらアニエスは語る、俺はその言葉にちよつとした笑みをこぼす。

「違う、そんな時代遅れの物は積まない、見せてやる、こつちだ」

手招きして駅の後ろに隠してある港…まあ造船所もかねているが…に入る、しばらく進んだ後灰色の扉を開いた。

「鋼の…龍？」

アニエスが呆けたような声を出した、そういえばティファニアも零を見た時そんな事を言っていたなあなんて考えながら鋼の龍…翼に大きく零と書かれた黒一色のそれを軽く叩く。

「こいつはゼロ、そしてアニエスが見た船はオストラント級空母…ゼロを空中から飛び立たせる事が出来る…おつと見せたかったのはこつちだ」

工場内の電気式照明のスイッチを入れる、そこに映しだされたのはロイヤル・ソヴリンクラスの巨大なフネ、全て鋼鉄で出来ており巨大な煙突を持っている、翼をもち八発もの原動機がついているが今はプロペラは回っていない、甲板にはこれまた大きく長い二つの砲身を持つ主砲が一門、主砲より小さいがそれでもカノン砲とは比べ物にもならない位大きく長い副砲が後部に三門、そして艦橋はまるで城の天守閣のように聳え立っている、まさに空飛ぶ要塞である。「フォーミュラー級巡洋艦エイリアだ」

アニエスからの返事はない、隣を見ると女性にあるまじき顔をしている…まあ驚くだろうな、フォーミュラー級は三隻出来あがっている、アニエスが見とれているのはエイリア、その横にサニー、最後尾にアリスだ、ぶつちやけこの三隻とオストラント級が一隻あれ

ばレコンキスタはどうにでもなる…が後ろに居るガリアの存在が気がかりだ、ガリアではすでに蒸気機関による工業化が着々と進んでおりこれと同じ艦船を持つてる可能性が出て来た。

「…アニエス？」

「はっ！？な、なんだクルスト」

「船の出港時間はわかるな？いつだ」

「あ、ああ…明日の十時だ」

「よし、明日の九時に港に集合だ、アルビオンに行くぞ。ウェールズをでかい仕事に巻き込まなきゃならん」

不安そうな顔をするアニエスから視線を反らしてクツクツ笑う、さて…俺はこの世界をどういじくろうか、トリステインで天下でも取るか？ガリア王は邪魔だな、人間にしては賢い、さあ行こうか全ては平和の為に…

第二話：ようやく僕はゼロの使い魔

「だから竹輪じゃミサイルは無理って言ったじゃないか！せめて筈に……はっ」

……自分の訳のわからない寝言で目を覚ました、内容から察するに竹輪で弾道ミサイルを撃ち落とそうとしたらしい、どれだけ切羽詰まった状況でもそれだけはしたくない、つーか筈でも無理。

「あら、起きたの？」

机に向かっていたルイズがこちらを見ていた、僕は藁の上に寝かされていた……マジでペット扱いだね。

「ああ、うん……」

ほりほりと後頭部を搔く、ルイズは机から離れてこちらに向かってきた。

「異能者って凄いのね……あんなビンタで生きているなんて」

ルイズが僕をマジマジと見ている、ルイズの目から視線を下に落とすと……見えた！ピンク色のが！

「あー……ルイズ？」

「何よ？」

「……見えてます、乳首」

蹴りを喰らった、今のは……視覚効果分のでチャラにしてやる……。

「……はあ、あんた、もしかしくなくても一葉と同じ世界から来たのよね」

近くの椅子に座ったルイズは足を組んでそう言い放つ、どうやら地球の事は話されているようだ……頷いて返事しておく。

「だったらエイブラハムって異能者……だっけ？……まあ知らない？」

その名前には聞き覚えがある。

「僕のおじいちゃんだ、エイブラハム・ヨシユア・クルスト……クルスト一族の誇りだよ」

ルイズは目を丸くした、まあたしかに僕はクルストの容姿ではな

い、僕はおばあちゃん似なのだ。

「そ、そうなんだ…：ねえ、エイブラハム兄様はどんな人だったの？」

そこで少々違和感を抱いた、エイブラハム・ヨシユア・クルストの名前を知らない者は地球上には赤ん坊位しか存在しない…：そう言えば師匠と同じ世界とか言っていた。

空には二つの月があるからここは火星かと思っていたけど…

「…ルイズ、この世界の名前は？火星じゃない…：よね」

そう聞くとルイズは怪訝な顔をして鼻を鳴らした。

「ハルゲニアよ、ここはトリステイン王国の魔法学院」

頭が痛くなつた、僕がレバノン星系で戦っている間にどうやら異世界に召喚されてしまったらしい…

「…ルイズ、僕を帰してくれ」

それを聞いて張り詰めていた虚勢が崩れそうになつた、レバノン星系に帰らないと…：戦況は至極不利、艦隊が撤退した為補給すら届かない状況だ。

「無理よ」

ルイズの一言に頭をハンマーでぶん殴られたような衝撃を感じた、からつぽの胃から胃液を吐きそうになるが堪える。

「…僕を帰してくれ」

「ごめんなさい、無理なの…：帰したって事例は過去にないから」

「そっか…」

藁の上で胡座をかいてうなだれる、僕はおじいちゃんやおばあちゃん、おじさんやお母さんみたいな英雄になりたかった、十三歳で軍に徴兵されて…：いくつか戦争を経験しレバノン星系に派遣されて…：ここに至ると言う訳だ。

英雄？ 見てみなよこの様を…：自分と大して歳が変わらない小娘の犬だ、砲撃の中で涙と鼻水を垂らして駆けずり回ったり、命乞いする敵兵を指揮官の命令で始末したり、やりたくない事は必死に我慢してやってきた。

それがこの有様だ、英雄に成れはせずとも親愛なる仲間達と共に果て同じ墓に入れるかと思いきや…小娘の犬だ、犬、おじいちゃんみたく誰もやつつけられない悪党をやつつける訳でもなく…おばあちゃんみたいに全ての生き物を無償で助けるでもなく…師匠みたいに無敵になれる訳もなく…小娘の犬として一生を生きる。

「…いやだ、そんなのいやだ」

膝を抱えて顔を伏せる、僕は何も出来てない、可愛い奥さんだつていないし子供だつていない…歴史に名を残す事も出来ない。

苦しい戦線に舞い戻って戦う事も出来ない、仲間を助ける事も出来ない、僕に残された選択は犬か死か…あんまりだ、あんまり過ぎる。

「…そんなに嫌がらなくてもいいじゃない」

ルイズはまた不満そうな顔をしている、だから不満なのはこっちだよ。

「嫌がるに決まってるだろ、さっきまで誇り高い異能者の戦士として戦ってたのに…いきなり呼び出されて僕は君の犬だ、考えても見るよ。いきなり知らない場所に呼び出されて犬になれって言われたらどう思う？使い魔って事は君に生死を決められるって事だ、誇りも尊厳もなく君のご機嫌を伺いながら尻尾を振るの？ そんな生き方嫌だよ……」

代々受け継いだ鎧が僅かに音を立てるだけで暫く沈黙が場を支配した、痺れを切らしたルイズが唾を飛ばしながら僕に怒鳴った。

「だつたら…！だつたらどこへでも行きなさいよ！ただ覚えておきなさい、あんた絶対野垂れ死にするわ！この世界で何が食べられて何が食べられないかわからないでしょ！？私に従って生きるか…餓死するかどつちがいいの！？」

うじうじしていたらルイズが癪癪を起こした、こんな事聞かされたら誰だつて怒るのは目に見えている…だが言わないとやってられない。

「…どつちも選ばない」

「……じゃあどうするのよ」

「自決する」

幸運なのか不運なのかはわからないが…電子分解投擲弾は一発だけ残っていた、自殺なら出来る、選択は三つ…ルイズの犬になるか、野垂れ死ぬか、自決するか…

「離れてて、巻き込まれたら君も死ぬ」

投擲弾のピンを掴む、抜いたら五秒後に爆発する…指が震えてピンがカチカチと音を立てている。

「ほ、本気なの？」

ルイズが心配そうな声を僕にかけてくれた。

「本気……だよ………」

死ぬのは怖い、けど…僕は立派な異能者の戦士なんだ、覚悟を決めてピンを抜いて胸に投擲弾を抱え込む。

「一葉！」

「わかつてます！」

扉が荒々しく開け放たれた、顔を上げると一葉の足が迫っている…一葉の足は爆弾を蹴り飛ばし、蹴り飛ばされたソレは窓を突き破り遙か彼方で爆ぜた。

「ちい姉様、わ、私…私…」

ルイズが泣いているのに今気がついた。

「大丈夫よ、ルイズ…ほらこっちに来て」

カトレアはルイズを抱き留めている、その姿を横目で確認して一葉を睨む。

「何故です師匠」

「自殺なんてさせる訳ないでしょう、異能者なら戦いの中かベッドの上で死になさい」

優しく説くような口調…そのどちらも叶わそうだから誇りを汚される前に自決しようと考えたのだ。

「不安で孤独なのはわかります、けれども諦めちゃいけませんよ」

「けど師匠！」

「けどもにっちもさっちもドイツもコイツもイタリアもありません、貴方が一端の戦士？私達から見れば未熟も未熟です」

一葉はまるで母のような顔で僕に語りかける、いつものドメステイックでバイオレンスな師匠ではない。

「貴方はクルストですが英雄クルストではありません、今の貴方では戦友を救う事も…誰かを守る事も出来ません」

一葉が僕を抱きしめる…なんだか凄く落ち着く、少し安心出来た。「帰る方法は必ずあります、自棄にならないで…ルイズちゃんは貴方が必要とされています、そして貴方に大切な物をくれます。名刀よりも要塞よりも強く堅固な…ね？」

なんと言うか…自分はまだ子供だと改めて認識した、師匠…三柳一葉は僕を育ててくれた恩人だ、僕の実の母は僕を産んだ後宇宙中を転々として困った人を救っている、父はもとより研究が忙しく家に帰ってこない。

そんな中僕を身請けしてくれたのは一葉だった、実の息子のように愛情をたっぷり込められて育った…まあおかげで僕は今だに甘えん坊ではあるが…歪む事はなかった、と思いたい。

「男は覚悟、女は度胸、アデル…ルイズちゃんを守る気概を見せなさい。いえ、守って見せなさい。貴方が一端の戦士を自称するのならそれ位やってみなさいな」

その言葉に力いっぱい頷く、おじいちゃんは守ると決めたら全てを守つたらしい…だったら同じ血が流れ魂を受け継いだ僕でも出来る、出来るはずだ。

「なら…後は二人きりにしても大丈夫…ですかね？カトレアさん」

「ええ、こっちも大丈夫、ルイズも大分落ち着いたわ」

ルイズの目は赤いが先程みたく痲癩は起こしていない…よし、謝れ…謝るんだ僕…

カトレアと師匠はそそくさと部屋を出て行ってしまった、大きく息を吸い込んで謝罪の言葉を…

「さっきは悪かった、帰るまでだが君を…ま、守ってあげてもい

「いんだぞ！感謝しろ！」

「な、生意気ね！誰もあんたに守られたくないわよ！」

「生意気ってお前には言われたくねーよ！」

「なんですって〜！だいたいあんたいくつよ！」

「十五歳だ！文句あるか！」

「私より年下じゃない！年上は敬いなさいよ！」

「嫌だね！」

…どうやら僕は素直になれならしく結局口論になってしまった、先程とは違いじゃれあいレベルではあるが…ね。

「…まったく、あの子は………はあ」

「ま、まあまあいいじゃない一葉、あれ位のが可愛いげあるわよ」

扉の向こうで聞き耳を立ててた一葉は呆れ返り、同じく聞き耳を立てていたカトリアは一葉を宥めるのだった。

第二話…よじやく僕はゼロの使い魔（後書き）

シンデレレ×シンデレレコンビって誰得だろうね

第三話前篇：息子は正直者

「ちくしょ〜…なんで僕がこんな事せなあかんだ…」

ルイズの洗濯物が入った籠を抱えて寮から外に出る、たしか水場の近くに洗濯板も石鹸もあるとは言っていたが…あの女…あま肝心な水場の場所を伝える前にとつと寝やがりやがった、こんな場所見た事も聞いたこともない僕は見慣れない建築様式に戸惑うのだった。

余談ではあるがこの建物は普通ではありえない作りになっている…自重で倒壊してもおかしくない程に柱が少ない…それに石造りの床や天井は鉄筋やセメントなどでは接合されていない…非常に脆い作りとなっており昨日は不安で寝付けなかった…閑話及第。

「水場ちゃんや〜い、出ておいで〜って出てくる訳ないか〜…ぬははは、虚しい」

女物のパンツやブラウスを抱えてうろつくと女子寮付近を漂う男…どう見ても不審者です、本当にありがとございました。

「あれ？ちよつと貴方」

背後から声をかけられ振り向くとエプロンドレスを着たちっちな女の子がこちらを見上げていた。

「…ちよつと似てる、けど違うわね。知り合いかと思ったの、それじゃ」

「あ、待って！水場の場所を教えて！」

僕がそう言うと小さなメイドはゆっくりと振り返った。

「こつちよ、着いて来て」

そうして手招きされて僕は後ろにノコノコ着いて行く、結構距離があるのだろう、彼女は饒舌だった。

彼女の名前はエルザ、元々はタルブ辺境伯のメイドでここには経験を積む為に派遣されたらしい…こんな小さな子供がメイドやってる世界の文明って……宇宙艦位あるだろうと高を括っていたけど僕本当に帰れるのかな。

夜眠れなくて地球からの距離を計って見たらどうやらここはバーナード星系から30万光年離れた場所らしくそれほど離れていないのに気がついた。

科学文明レベルは8、魔術文明レベルは12とかなり低めの星ではあるが…参考までに地球の文明レベルは科学魔術共に2359である。

「どれだけ差があるか分かってくれたならありがたい。」

「え？ギャグ？」

案内された先ではマーライオンが酔っ払いのおっさんよろしく水を吐き出していた、何これギャグ？

「えつとエルザ、まさか魔法の工業化すらされてないってんじゃ…」

僕の言った一言にエルザは首を傾げている、どうやら普通の工業化自体も起こっていないらしい…大丈夫かこの国。

「何言ってるのよ、魔法はメイジしか使えないでしょ。あなたも平民ならそれ位わかって…」

手から炎を出してみせるとエルザは目をぱちぱちと瞬かせた、不思議そうな顔をしている…魔力ゼロの僕が魔法を使ったのが不思議だそうだ…異能者と言うのは星の魔力…アストラルとエーテルの混合エネルギー【アストライト】を使って星の水を綺麗にしたり砂漠を森に出来たりする、炎を出すなど攻撃用の魔法はその応用だ。

「どうやらそれすらも知らないなんて…普通の魔法とは別の道を辿って発展しているみたいだ、僕は徴兵される前はただの編みぐるみ屋の見習い職人だったので詳しい事は解らないがかなり異端らしい、他の高度魔法文明星などはだいたいアストライトを使って魔法行使している…どうやらこの世界の魔法は体の中の何かを使って魔法を起こしているらしい、不思議な地球人型の知的生物だ。」

「貴方エルフか何か？」

しかしクールな幼女である、表情を変えたのは一回だけで後はみーんな無表情である、ボブカットの金髪で可愛いつちゃかわいいのだが…表情がないとなあ、まるで人形と話しているようだ。

「違うよ、僕は人間のネロ・サピエントの異能者、アデルだよ」

「…そこまでエイブラハムと一緒になのね」

彼女が何を言ってるかさっぱりわからない、エイブラハムなんてよくある名前だしこの世界におじいちゃんが居る訳もない、おじいちゃんは母さんに殺されて…まあそれはいい、母さんの事だ深い訳があつたのだろうしね。

「さて、口を動かす前に手を動かさなきゃ…」

水を桶に組んで洗濯物と洗剤をぶち込む、いやぁ懐かしいな、洗濯機が壊れた時こうやって洗ったっけ、手で水をゆつくりとかき回し桶を持ち上げる、水から手を挙げて桶を回転させ始める、泡が空に立ち上り旋風のように桶の上で回る。

「あらよつと」

エルザの分も受け取り全自動洗濯機の中に放り込む、みるみる白い泡が汚れに染まっていく、何度か桶の水を交換して要訳奇麗になった、同じように水ですすいで桶を空に放り投げる。

「軍隊式徒手空拳…擦手熱殺！」

掌底を桶にぶつけ思い切り擦っていく、これを生き物の皮に使うと中身を焼く事が出来る危険な技だが加減をすれば…よつと、ねじられて一本の綱のようになった洗濯物の端を掴み思い切り振りまわした後に空に放り投げる。

「ほっ！」

両手を広げるとそこに畳まれてアイロンまでかけられ皺一つ汚れ一つない洗濯物が落ちてくる。

「はい、案内のお礼」

エルザに洗濯物を差し出すとエルザは抑揚のない歓声をあげて手を叩いていた。

「大道芸人？」

「戦士ですう」

エルザの失礼な一言に唇を尖らせるとエルザは初めてクスリと笑ってくれた、その笑顔に少々身惚れてしまった、おちゃらけて照れ

をこまかしたが…なんだかこの世界の女の子は内面が魅力的な気がする、とりあえずしばらくエルザと談笑してから別れた、現在は朝七時位かな…起こすには丁度いいかもしれないね。

部屋に戻りベッドで幸せそうに寝ているルイズを見てため息を吐く、いやはや、なんとというか…平和ボケした女の子だ。

こんな時間まで寝てるとはよほど裕福な家の出なのだろう。

「ほらルイズ、朝だよ、起きて」

ルイズの体を揺さぶる。

「う〜ん…」

「あうち!？」

蹴りを右頬に喰らった、なんつー寝雑の悪さだ…こんなんじゃ木の上で仮眠もとれないぞ、すぐに落っこちて蜂の巣か野砲でミンチだ、って彼女は異能者じゃなくて人間か。

人間の女は戦争には出ずに家で子を育てると聞く、異能者とは真逆である、異能者は男が少ない上男はたくさん女の妻にする…女が狩りや農業に行ってる間に男は食事を作り子をあやし掃除をする…異能者は男より女のが体が強いし凶暴だ、まあ…鍛え上げれば大差はないんだけど…

「ん、あんた誰よ…」

ルイズが半開きの目で訪ねてきた、頭を左右に振って呆れ顔を消す。

「君に召喚された憐れな犬だよ、ほら着替えて、今日は学校でしょ」
「僕たち異能者の学校と言えば東京第三防衛学校だ、あそこは毎年英雄と呼ばれるような優秀な異能者を排出する…僕？試験に落ちて一兵卒だよ。」

「あー…そうだったわねえ」

寝ぼけ眼のルイズはそのままネグリジエを脱ぎ始めた、昨日は恥ずかしかつてたのに…部屋から出るべきか眼福と喜ぶべきか…とりあえず見ておこう、奇麗だし。

「…早く着せなさいよ、朝ごはんに、ふあああ…遅れちゃっうでしょ

…」

…人間の女つてのはさっぱりわからない、昨日は見られて恥ずか
しがつてたのに今日は服を着せる…だって？一体なんなんだこの世
界。

「……わかった」

怒っちゃいけない、役得と思え…だが…こんな甘ったれた小娘に
顎で使われるのは気に食わない…我慢だ我慢…我慢しろ僕。

…ヘイマイサン、君は正直だな。

第三話前篇：息子は正直者（後書き）

ハルケギニア歴史書 - 大トリステイン皇国の章 -

影の存在ジヨナサン・クルスト大佐

この存在には謎が多い、虚無の担い手ルイズに召喚されたアデルだという説と当時のタルブ辺境伯であり第一艦隊司令サー・エイブラムだという説があるがどちらも信憑性に欠ける。

だがどちらもクルストという名前が入っている事から二人のどちらか、もしくは血縁者と考えられる、いつも黒い甲冑を身にまといしやがれた声でモゴモゴ話す様は会う貴族達に強い嫌悪感を抱かせたとさせる、タルブ辺境伯と言えば五連発ボルトアクションライフルのデビルシンガーと百連発軽機関銃クラレッタの鼻歌の開発者としても知られ、工業化の父でもある。

大してアデルと言えば伝説の勇者イーヴァルディとして名を馳せた、彼の逸話は尽きず何が本当で何が嘘かわからないと言う有様だ、どちらもメイジを軽視し、工業化を強く訴えた事から同一人物ではないかとの噂があがっている、お互い面識があつたのは大隆起の時のみでそれ以降は会っていないと言われている。

さて話は戻るがジヨナサン・クルスト大佐と言えば大佐で異例の陸軍司令となつた男であり奇抜な戦法を好んで使う事が多い、とてつもなく奇抜でそして非常に有効的な戦法を取る事から神の頭脳ミョズニトニルンなどと呼ばれたり、先住魔法と詐称されたりしたようだ、それに対しジヨナサン大佐は鼻で笑い飛ばしたという、ブリミルに対する信仰心まったくのゼロでありそれを揶揄してかゼロのジヨナサンとも呼ばれた事もようだ、いつも隣に槍を持った青タイツの男が居た事が確認されている

優秀な戦術家や現代ハルケギニアの戦争論を作つた男でもあり、そしてブリミル教を大陸の片隅の小国で行われる小さな宗教としてしまった、この男、もしくは女がいなければハルケギニアでは魔法

の効率運用も工業製品も卓越した医療による人命救助もなく差して変わらぬまま数千年過ごしていた事になろう。

トリステインがハルケギニア全土を支配する事もなく、貴族が消える事もなかった為平民からは平和の使者、笑顔の産み手などと呼ばれている、元貴族からは救いようのないテロリスト、下らない男と呼ばれているようだ。

だがこの男は最初から最後まで王家を支え続けハルケギニアに長い平和をもたらした事を忘れてはいけない

体の蛇が音速で動いて神経毒の塊を吐き出してくる、僕は今弾き飛ばされ学院に直帰中だ。

まさに強制退去である、剣一本あれば遅れは取らないんだけど……あの蛇打撃に対する耐性が物凄い……百発二百発ぶっ叩いてもケロリとしていた。

「あわびゅ!?」

そして学院の中庭に叩きつけられ僕は呻くのだった、しかもルイズが呼んでる……畜生飯抜きは堪えるぜ……適当に泥を叩いてルイズの元に向かう、手元には大蛇の鱗……緑色で綺麗だなあ……値打は……ゴミ並だ、引き取り料を取られる価値しかない。

「はあ……」

やはり剣がないと僕はどうしようもない、ああ、腹減った……

「遅い!どこで油売ってたのよ!」

開口一番にこの罵倒……耐える……耐えるんだ僕。

「……学院の外で蛇を狩ってた、これが証拠だ」

「それ、バジリスクの鱗じゃない!」

鱗を見せるとルイズは驚嘆の声をあげた、その様子を鼻で笑ってやる。

「違う、これはバジリスクモドキの鱗だよ、バジリスクの鱗は深緑色、これは黄緑色で……ま、そんな知識はいらんか。で……なんの用だい?」

「そうそう、召喚して初めての授業は使い魔同伴なの、一緒に着いてきて」

「え……」

「文句言わない!早く着いてきなさい!」

まあ情報収集だと自分に良い聞かせて渋々と彼女の後ろを着いていく、辺りにはたくさんの貴族と使い魔が居るがこっぴど見るとどうやら本当に人型の使い魔は僕だけみたいだ。

「あ、ミスヴァリエール!こっちの席開いてますよ」

「ありがとうシエスタ」

黒髪の女の子が手を振っている、僕は適当に壁に寄りかかる…あなたも床よーなんて言われそうだしね。

「シエスタは何を召喚したの？」

「私はこの子です」

「…何この間抜け面の鳥」

「不死鳥の雛ですよ、この顔も見慣れてくると愛嬌があるんですよ？」

ルイズにはどうやら友達がすっかり居るようだ、うらやましい事…僕の友達はみんな戦場で粉微塵になってるか病院で冷たくなっている、なんだか教室に小太りの女が入ってくると静かになった、デブ女は俺を見て何か言っている…何か用か下等生物。

「おい！ゼロのルイズ、魔法ができないからってそこらへんに居た平民を連れてくるなよ！」

「先生！風邪つぴきのマリコル又が私を侮辱しました！」

なんだかギャーギャーと騒いでいるが…僕には関係ない、傍観している…と風邪つぴきとやらが粘土で口を封じられた、授業がようやく始まったのかデブ女がもくもくと話している、内容は土属性の魔法の事…どうやら貴族はインフラの担い手でもあるらしい、僕達異能者には道路とか必要無いが人間には道路がないと移動すらままならないと聞いた、まあ道路歩きやすいもんね。

「では錬金を…そうですね、ミスヴァリエール貴女にやってもらいましょうか」

「ミセスシユブルズ！危険です！」

そして教室が阿鼻叫喚の渦に…こらなんかあるな、甲冑のアンチマジックシールドをオンにしておく。

次の瞬間、僕は思い切り壁に叩きつけられたAMSを貫いて僕本体の抗魔力もぶち抜いて直接身体に響いた、揺れる視界を頭を振って無理矢理治し壇上を睨む。

「…ちよつと失敗したわね」

「ちよつとじゃないだろ！ゼロのルイズ！魔法成功率ゼロのルイズ

！
澄ました顔のルイズとそのルイズを罵倒する貴族達、澄ました顔の下で握った拳は震えていた、なんとというか…物凄いデジャビユである、目を閉じれば思いだせる、全てから逃げ出した僕に向けられる罵倒に嘲笑、異能者は弱者にも強者にも同じく寛容だ…だが臆病者だけには容赦しない…だがルイズは違う、彼女はまだ立っている、嫉妬しちゃうよ全く。

「なんか言いなさいよ」

今は二人で部屋の掃除をしている、僕がテーブル三つを担ぎあげた所でルイズは睨みながらそう言ってくる、さて…なんと答えるべきか。

「よつこらっしょ」

とりあえずテーブルを元あった場所に戻しながら考える、あまり長く考えすぎたのだろう、ルイズが箒を投げ捨てた。

「あんたはいい気分でしょうね！私はゼロ！魔法成功率ゼロのルイズ！どう？あんたにあんなに偉そうな事言ってたのよ？さぞかしい気分でしょうよ！！」

「ふ…まず言える事は落ちつけ、僕は君を馬鹿にしたりしないしていない、これは異能者の誇りに誓って言える」

並べた机の一つに座る、ルイズと視線を合わせてみると…目に涙が浮かんでいる、そうだよねえ、辛いもんね。

「…僕の師匠の言葉だけど、剣折れる時勝敗を決するのは気高き心、真の武器は折れぬ信念に有り。…まあ僕もあんま意味は解ってないんだけどね」

ただ武器が折れた時に勝つのは根性だ！なーんて事ではないらしい、師匠は根性じゃどうしても実力の差は埋められないと言っていた。

「…何訳わかんない事言ってるのよ、あんたなんか…あんたなんか

！……………ご飯抜きよ！バーカ！」

僕に雑巾をぶつけてからルイズは部屋を飛び出して行った、そんな事より臭いぞこの雑巾！あ、でもほんのりルイズの匂いがする、でもくせえ！それにゴ飯抜きだと！？…ああ、畜生余計に腹が減ってきた。

よくよく考えたら僕は包囲戦の最中でロクに食事取って無かったぞ…このままだと飢え死にするかも…いや異能者は一ヶ月位飲まず食わず不眠不休で戦い続けられる体力を持っている、死にはしないが…それでもお腹は減るもんですよね、さっさと掃除を終わらせて僕は中庭で行き倒れる事にした、優しくないルイズに対するせめてもの抗議である、恥かけばいいんだ。

「……………何してるの？」

頭の上から声がかかる、顔を上げると雪のように白い肌と青と白のストライプ模様の布が見える…なんだこれ？あ、パンツや。

「えいつ」

「おぶし！？鼻があゝ！鼻があゝ！！」

思い切り顔面に蹴りを食らった、思った他痛かった、のたうちまわっていると話しかけた人物は呆れているのかため息を吐いていた。「ここで何しているの？」

屈みこんだ声の主は…エルザだった、相変わらずの無表情でこっちを見ている。

「えつと…行き倒れ、かな？」

「なんで疑問形なのよ…はあ、まあいいよ、顔色見ればわかるわ。ついてきて」

首をかしげながら立ち上がる、服に着いた草や土ぼこりを叩く、一体腹ペコでハングリーでアングリーな僕になんの用だろうか。

「ご飯食べたいんでしょ？賄いでいいなら食べさせてあげる」

思わず膝まづいて両手を合わせてしまった。

「エルザ、貴方は僕の女神だ！」

何故か思い切り蹴りを食らった、後で聞いた話だが貴方は僕の女

神と言うのは使い古されたプロポーズの言葉らしい、どうやら僕は
やっちまったらしい…でもご飯食べさせてくれたよ、エルザ大好き
だ、友達として…

第四話中編・異能者の掟（前書き）

中途半端な回

第四話中編：異能者の掟

「さあ諸君！決闘だ！」

目の前で両手を広げた金髪のあほ面、ギーシュとか言う奴が声高に宣言した、辺りはヒートアップしやれ殺せだのなんだの騒いでいる、僕は鼻息荒くギーシュを睨んでいる、こいつは僕の目の前で一番やってはならない事をした…あれは数十分前にさかのぼる。

「いやあ…食った食った…」

エルザに案内された先で賄いを出してもらった、やはり腹に何かいれると活力が湧いてくるね。

「おう！いい食いつぶりじゃねえか！」

恰幅のいい男が鉄鍋を巧みに操りながら話しかけてくる、確かこの料理長のマルトーとか言ったか…どうやら追加の料理の調理中のようだ、そこらへんの木片を爪楊枝代わりにしながら立ち上がる。「どうもごちそうさまでした、見事な味でしたよ、あのシチューの隠し味はシナモンですね。絶妙なバランスで入れられていて我の強いシナモンが肉や野菜を見事に引きたてていました、この料理はまさに芸術ですね」

僕の母親代わりであり師匠である一葉のおかげで味覚は鍛えられている、そう言うのと料理長たるマルトーはにやりと笑った。

「おうあんた！解ってるじゃねえか！味もわからない奴だと思っただけ…気に行った！これからもここにきて飯食っていいぜ！」

「ありがたい」

しばらくはマルトーと料理についていろいろと話していた、僕の世界のレシピには特に興味を示してくれた、流石は料理人…後で師匠も連れてこよう。

「君のせいで二人の女性の名誉が傷ついてしまった！一体どうして

くれるんだね!？」

アルヴィースの大食堂の方から間抜けな怒鳴り声が響いてくる、コック達は何事かとそちらを覗きに行ってしまった、僕もマルトーにさそわれ見に行く事になった、なんだかものすごく面倒な事になりそうな気がしないでもないけど…

「…ごめんなさい」

金髪のあほ面に絡まれているのはエルザ、深く頭を下げて謝罪をしているが…どうやら相手はただ八当たりのしたい屑のようだ、とりあえず調理場から出て近場のテーブルからナイフを一本拝借する。「ダメだ!反省の色が見えないね!これだから平民は…僕が一から教育しなおしてやる!」

杖を振り上げるあほ面、杖めがけてナイフを投げる、角度、スピード、威力…完璧だ、杖を見事に弾き飛ばした…なんだか左手が一瞬光って威力が上がった気がしたけどそんな事を気にしている場合ではない。

その際にエルザとあほ面の中に自分の体を割り込ませる。

「なんだね!?!君は!?!」

あほ面を見て当たりの様子を見て状況を把握する…テーブルに置かれた女物の香りがする香水、あほ面にぶっかけられたワイン…あほ面に浮かぶ女の手の形をしたもみじ…なるほどね、悪魔で予想だけどこいつ二股をかけていてポケットから香水を落とした、その香水はそれなりに有名な物品で誰かのお手製、親しい人にしか渡さない贈り物だと仮定して…カマをかけるか。

「なんだね君は?と聞かれたら…さあて、答えてやってもいいがここで問題です、その一…僕は君に八つ当たりされている憐れなメイドを助けにきたただの騎士、その二、浮気を許さないただの紳士、その三、浮気がばれて他の女に八つ当たりする情けない奴を殴りに来た見物人…さあどれだ?」

みるみるあほ面の顔が赤くなっていく、どうやら予想の半分は当たっていいそうでした…ここから奴を怒らせてやるかね。

「やれやれ…同じ男として恥ずかしくなるよ、恥を知りなよ貴族、常に誇り誇りうるさいんだからさ…てめえで誇りを貶めてちゃ意味がないぜ」

「なんだと…貴族を愚弄するか!!」

「愚弄もなにも事実だろう、今君の状況を見てごらんよ、女二人にフラれた上に反撃する事もできない小さな少女相手に武器を振り上げ喜ぶ、まるで山賊だな」

まるで親の仇を睨むような目だ、その憎悪が心地よい…戦場に渦巻く憎悪にも事足りないちっぽけな物だが久々の戦いの空気に気持ちが高揚する、僕はやっぱり異能者の戦士だ。

「…おや、君はゼロのルイズが召喚したへいみん!じゃないか、主人がゼロなら使い魔もそれにふさわしい物だ。彼女には貴族の誇りなんてないんだろう…そんな君が僕に恥を説く?はっはっは!お笑い草だね!」

あほ面の首を押し折ろうと腕を僅かに動かした所である異変に気がついた、静まりかえる食堂内、響くのはヤケクソ気味のあほ面の声だけだ、貴族たちの視線を追うとルイズによく似た女性…カトレアがこちらを見て微笑んでいた、その微笑みに彼女特有の慈愛や母親の暖かさは感じなかった、まるで身を潜める肉食獣のような雰囲気だ、傍らには困ったような微笑みを浮かべている一葉…そうか、彼女はルイズの姉だったな…カトレアはゆっくり立ち上がるとギーシユの傍まで歩いてきた。

人垣がモーゼの奇跡のように左右に割れる、ギーシユは彼女を見て明らかに顔つきが変わった、表情を読むのが苦手な僕でも解る、あれは”やっちまった”といった顔だ。

「こんにちわミスタ・グラモン、その言葉は我々ヴァリエール、ひいてはタルブへの挑発と捉えてよろしいでしょうか?」

そういえばこいつら貴族だったな、と僕は頭の中で考える…さて僕はどう動こうか、一応僕は二千年の歴史を持つ騎士の家系で騎士の血を引いている…主君とする人物がいるとすればルイズだ、主君

が侮辱されたのにそれを晴らさない騎士がいるだろうか？それに契約の時に刻まれた呪印が言っている、目の前のあほ面の首をたち切り心臓を抉り出して主人に捧げると……いちいちうるせーなこの呪印。「カトレアさん、待って下さい」

手を挙げてあほ面苛めを楽しむカトレアを制する、一葉はじつとこちらを見ている……悪いけど今日は止まる気はない、僕はそれなりにルイズの事を認めている、努力家たる彼女がいつまでも貶められているのは気に食わない。

「僕は主人の恥辱を雪ぐ為に貴様に決闘を申し込む！貴様の血で主人の恥辱を雪ぐとここに星へ誓おう」

あほ面は好機と見たのか、意気揚々と学園の外で待つと言葉を残して取り巻きと去っていった。

「いいの？」

エルザが僕の後ろからそう声をかけてくる、首をかしげる事で答えとする。

「……貴族はとても強い、貴方はただの平民でしょ？魔法が使えると言ってもあんなちっぽけな炎じゃ……殺されちゃう、私のせいで決闘して……いいの？」

無表情のエルザの瞳に僅かに悲しみが灯る、エルザの頭に手を置いて笑ってみせる。

「大丈夫、心配なら見においで」

そう言つて一葉の顔を見ないように振りかえる、さて学院の外とか言つてたか……歩き出すと扉の所に仁王立ちするルイズが居た、ご丁寧に腕まで組んでいる。

「あんだ、何勝手な事してるのよ」

「ん……」

確かに今回は勝手すぎた、勝手にルイズの名を使って決闘まで約束してしまった、後頭部を掻きながら言葉を詰まらせる。

「……私なら我慢するから、あんだの気持ちはすごくうれしいけど、事実なの……私は我慢できるから、殺されちゃう前にギーシュに謝

つてきなさい」

…よし、きまった。

「嫌だ」

「っ！平民じゃメイジには勝てないの！あんたの気持ちは十分解つたから！私は大丈夫なの！！」

「僕は大丈夫じゃない、あんな奴に君が馬鹿にされるのが気に食わない、君がああの言葉を聞く度に辛そうな顔をするのが我慢できない、っ！か君にも解つてほしい、君は平民を召喚したんじゃない。君が呼んだのは最強の使い魔だつて…ここいらで貴族どもに知らしめてやる、二度と君を馬鹿にできないようにしてやる」

「……………こ、この馬鹿！！勝手になさい！！」

顔を真っ赤にしてどこかに走つて行つてしまった、顔真っ赤になるまで怒る事言つたかなあ…後で説教位されそうで怖い…さて、行くか、今日でゼロは蔑称じゃなくなる、そもそも僕の世界じゃゼロつて強いつて事なんだけどね。

そして場面は初頭に戻り…

「諸君決闘だ！」

馬鹿は自分が勝つと信じて疑っていない、なんだがピエロを見ているような気分だ、なんだかウジウジと僕に何かを言ってきたが全て鼻をほじりながら聞き流した、鼻くそをそこらに飛ばした所でルールを説明してきた。

「君が参つたと言うか僕が杖を落としたら決着だ」

つまり僕は杖を落とさない限りあいつをぶん殴れるという事だね。

「それじゃあ始めよう！僕は鋼鉄のギーシュ！土のトライアングルだ、よつて魔法で戦う、文句はないね？」

「早くしてくれないかな、お腹が空いてきた」

こちらを思い切り睨むギーシュを鼻で笑つとギーシュは思い切り杖を振つた、ギーシュと僕の間には三メートルはある鋼鉄の人形が現れ

た。

「さあいけバルキリー！！生意気な平民を叩きつぶせ！」

鋼鉄の人形：バルキリーは奇妙な雄たけびを上げるとハンマーのような拳を振り上げ僕に襲いかかったが…

「欠伸がでるような攻撃だね」

指一本でその攻撃を止めて見せた、まずパンチに腰が入ってない、腕だけでパンチされたら腕の分の重みしか喰らわない上…こいつは厚さ一サントの鋼の裏には何も無い、空洞だ。

「さて、核の違いを教えてあげるかな」

つきだされたままの拳を思い切り握ると音がして拳が変形した、そのまま思い切り振り回す、何度も地面に叩きつけているとバルキリーの腕が千切れ地面に突き刺さってしまった。

「さあお次は？」

ゆずるようにギーシュに向かって片手を向ける、ギーシュは再び杖を振るって同じようなのを三体出した、どうやらあれが限界らしい…違いと言えば手には武器を持っている事かな…ショートソードを模してある。

あれ奪えば僕にも扱えるサイズかな。

「悪いけど…この程度じゃ」

まず前衛の一体に向かって走り出す、懸命に剣を振っているがこの程度ならかわすまでもない、刃が体にぶつかった瞬間に剣を掴み自分側に引つ張る、蹈躡を踏んでこちらにきたバルキリーにパンチをして吹っ飛ばす、腕ごと千切れた剣が僕の手に残った…ってやっぱり小さな僕にとってはクレイモアサイズだなこれ…握りも太くて使いづらい上に研がれてないからさして鋭くもない、ついでに僕がぶつかった所と掴んだ所は刃が欠けたりゆがんだりしてしまっている。まああるだけ文句は無い、これでようやく本領を發揮できると言う物だ。

「くっ！その余裕が命取りだ！」

ギーシュが無傷な二体とひしゃげた一体を差し向けてきた、やれ

やれ…腰を落として剣を構える…なんだがとてつもなく左手が光っているが気にしている場合じゃない、貯めに貯めて引き絞った筋肉を、ここぞと言う場面で一気に解き放った。

結果は言うまでもなく三体のバルキリーは一太刀で真つ二つに分断された、ゴーレムだからかまだ動けるがどうやら体が重すぎて攻撃には移れないようだった、啞然としているギーシュに一気に肉薄する。

「ひっ!?!」

「歯あ食い縛れ!」

僕の拳が奴の頬に突き刺さる、そのまま振りぬくと空中で十二回半程回ってギーシュは地面に叩きつけられた、その際に持っていた杖が手を離れて地面に落ちる、ゴーレムが消えて僕が持っていた剣も消えてしまった、この世界のメイジはドット、ライン、トライアングル、スクウェアにランク付けされると聞く…つまりコイツは二番目に強いメイジだと認識してもいい…この程度ならスクウェアもたかが知れると言う物…だが…いや考察は後にしよう、こいつの首をルイズに持って帰らなくては。

「よつと」

「うっ…あああ……」

どうやらまだ息があるようだ…何、どんな生物でも首を落とせば静かになる、いつも腰に着けているサバイバルナイフを引っ張りだしてギーシュの首に押し当ててどこから切るか決める。

「ちよつと何してるの!?!」

人ごみを掻きわけてルイズが走ってきた、何してるって…

「えっと、君に倒した証として首を持っていこうとしたんだけど」

「そんな事したら死んじゃうじゃない!」

「????????…そりゃ決闘だもん、当たり前でしょ?」

ルイズは怖い物を見るような目で僕を見ている、もしかやこの国の決闘では主人に首を持って帰らないのだろうか?…そっいやルイズが目の前にいるしね、よし、じゃあとどめだけ刺して…

「ちよ、ちよお~~~~!!」

心臓に突き立てようとナイフを振りあげたら振りあげた手を奇声で止められた、ルイズは一体何がしたいのだろう…殺すな…ふむ、そう言えば名誉を取り返す戦いだっただな。

「君の言いたい事がようやくわかった」

ナイフをしまつて立ち上がるとルイズはようやくほっとしたようだった、やっぱりこつちが正解かな、思い切りギーシュの足を踏みつぶし骨をへし折る。

「何してるのよ!!」

またルイズが金切り声をあげた、あ、折るんじゃないで引きちぎるほうだったのか？

「えっと、手足をへし折って見せしめに死ぬまで晒すんじゃないの？」

「そんな事なくていいのよ!!」

「あ、生きたまま顔の皮をはがして二度と外を歩けないような顔に…」

「なんでそんな怖い事するのよ!? もういいのよ! 決闘はこれで終わり!」

「え? この程度でいいの? 君の誇りを侮辱した代金をこいつはまだ払ってないでしょ?」

逃げようとしているギーシュを指差してこいつと言ってみる、もう一本脚をへし折って逃げられないようにする。

「…恥辱なら十分あんたに削いで貰ったからもういいわ」

「そういう事が、わかった」

つまりルイズはこいつを見逃してやるらしい、彼女は随分と優しい…ただの高慢ちきの努力家だと思っていたがこれは再び評価を変えなくてはならない、ギーシュにそばかすが浮いている女の子が駆け寄ってきていた、女の子は怯える目で僕を睨むとさっさとギーシュの治療に入ってしまった。

ルイズに手を引かれて僕は広場から去っていく、先程まで僕を馬

鹿にするように見ていた貴族は誰一人たりとも目を合わせようとはしなかった…はっ、腰ぬけ共め！って僕の母さんなら言うんだろっな、僕はそうは思わない…力のない者は力のある者が怖い、僕が師匠に抱く念とさして変わらないはずだ、この世界では貴族〓最強らしいからその最強がなす術もなく敗北し無様に地面に転がる…恐怖以外の何物でもないような気がする。

「あんた！」

ある程度離れた所でルイズが僕を壁に押し付けた。

「自分が何をしたかわかってるの！？」

第四話後篇：ギーシュとゼロの歌姫（前書き）

~~~~~

#### 第四話後篇：ギーシュとゼロの歌姫

こつてりとルイズに絞られてしまった、どうやらこちらの世界では決闘で生き死にを決めないらしい…バカバカしい、自分の命すら賭けられない漢に価値はない、と言うわけで今日は野宿だ。

要するに口喧嘩して追い出されたのである、情けない話だ…口では戦士だの誇りだの言っても所詮僕はルイズの犬だ犬、食事はマルトーンとこで済ませたから空腹ではないが…しかしこつちの夜も向こうの夜も同じく綺麗な星空である、こうして見てみると地球に帰りたくなってくる、地球か…母さんが元気なのは間違いないとして…妹と姉さんは元気だろうか？まあ大事には至ってないと思いたい…三人か、やっぱりどこの世界にも馬鹿はいるものだな」

飛んでくるエア・ハンマーとファイアボール、恐らくギーシュの取り巻きであろう…全く良い夜になりそうだ、唾を吐き捨てると名も解らぬ襲撃者に向かって走りだす。

「んーやっぱりこうなっちゃいましたかあ」

カトレアの部屋から見える光景に呆れ果てる、貴族達のランクは一番高くてライン、トライアングルを下したアデルの敵ですらない、あつさりと吹き飛ばされ蹂躪されてしまった。

「あら一葉、彼が心配なの？」

掬ような声でカトレアがそんな事を聞いてくる。

「ええ、心配ですよ。あれで天狗にならなきゃいいんですけど」

後ろでカトレアが残念そうな顔をしているのがわかる、この人は一体私をいくつだと思っているのだろうか…私人間で言つと百に近いおばあちゃんなんですけど…老体も老体、最近腰が……とは言つても異能者の見た目はいくら老化しようと変わらない、無理はない



と思う。

「うん…けどおかしいなあ」

「最近ずっと悩んでるけど…一体何を悩んでいるの？」

カトレアが私の肩に手をおきながらそう聞いてきた。

「アデルの事ですけど…彼、私が居た世界ではレバノン星系から帰ってきているんですよ」

もの言わぬ死体となって…この言葉はのみ込んだ、アデルは英雄じゃない、凡百の異能者で英霊として星の中心に招かれ契約すらしてないから…普通なら召喚なんて出来ない。

勝ち鬨を上げるアデルを眺める、間違いない…あれはアデルだ、だが彼は最初なんて名乗った？アデル・モトローラ・クルストと名乗った、違うアデルの名前はアデル・エイブラハム・クルストだ、私が知らないアデル？それはない、クルスト家は今は二つの家しかないから私が知らないと言っるのはあり得ない。

「…でも彼戦いの最中だっって言ってたわよね」

「はい、そもそもレバノン戦争はもう終戦なんですよ、私達の暦ですけど西暦二千五十八年から二千六十年までの戦争ですね、アデルが今戦ってる訳がないですよ」

そう言つとカトレアは困つたように眉を寄せた、私もそんな顔をしているのだろう…窓から身を離して部屋の中に戻る。

「悩んでいても仕方ありません、寝る前にお茶にしましょう」

考えていても仕方ない、彼が本当にアデルなら…自分の道は自分で見つけるだろうし、私は温めたポットに手をかけた。

「いつきしー」

くしゃみが出た、しかしこの夜は冷えるなあ…近くに建物があるのに野宿とは…虚しい、自分の左手を見るとルーンが刻まれている。

る…なんなんだこのルーン、僕は抗魔力が高くないとは言えあんな簡単な呪文で精神干渉まで行っなんて。

「うん…魔術は専門じゃないからさっぱりわからない」

顎の下に手を当てて考えてみるがやっぱり解らないので諦める、僕の異能ってオールアンサーじゃないしね。

「君たちがこそ僕たち貴族の陰口を叩いているのはしってるのだよ!!」

この耳に残る気障つたらしい声は…たしかギーシュとか言う奴が奇麗に折れていたとは言えこんなに早く復活するとは…恐るべしハルケギニアの魔術、何か厄介事らしいし僕が出ていくしかないだろう。

「…私は言っていない」

「敬語も使えないのか平民は!!」

そこまで歩いていくと…絡まれているのはまたエルザだった、彼女はトラブルでも呼び込む体質なのだろうか…よく見るとエルザは何か包みを持っている、あれが原因かな…みせるよお〜いやだよお〜お前マジでふざけんなし!!…こんな感じだろうな。

「はいはい、そこまでだ」

ギーシュとエルザの間に入って手を叩く、ギーシュが一瞬すごい顔をしたが…やはり昼間の事が堪えているのだろう、向かってくる事はなかった。

「…ふん、所詮平民など強き者の影に隠れている事しかできないのさ」

そう吐き捨てて去ろうとするギーシュに声をかける。

「力がある癖に弱い奴にしかその牙を向けられないのかお前は、だから僕にも勝てない。負け犬のまま…家紋に傷をつけたまま一生を過ごせ、腰ぬけのギーシュ」

その言葉を聞いたギーシュはぴたりと足を止めた、どうやらまだ負け犬ではなかったようだ、こちらに漢の顔…と言うにはまだまだ足りないがそれらしき顔をしたギーシュが振り向いた。

「もう一度言ってみる平民！」

杖をこちらにぴたりと突きつけそう言ってきた。

「何度でも言ってみようよ、腰ぬけ、臆病者、インポの玉無しギーシユ」

「そこまで言えとは言っていない！ストーンブラスト！」

杖の先から大砲の弾位の速度で岩が発射された、後ろにいるエルザを抱いて右に飛ぶ、先程の戦いと今回の動きで解った事がある、こちらの魔術師は一つ以上の呪文を同時に扱う事はできない、こっちでの魔術師の戦いはチエスのような物だろう。詠唱の早さを除けばだが。

「アデル、これ使ってみて」

エルザが包みを渡してきた、首を傾げながら包みを解いてみるとそこには少々草臥れたブロードソードがあった。綺麗に手入れされているな、古い物だけど。刃は鏡のように磨きこまれている。

「…えいぶら…コホン、私の主人が若い頃に使ってた剣」

「え、大切な物なんじゃないの？いいの？」

「…本当はさっきのお礼だったの」

「………そっか、じゃ遠慮なく」

鞘を腰に下げて剣を引き抜いてみる……これ魔剣だな、紫色の刀身が双月の明かりを反射している。

「たそがれている場合かい？いけ！アイアンメイデン！！」

地面から15メートル程の鋼鉄の巨人が生えて来た、どうやら剣に見とれている内に詠唱を完成させていたようだ。このサイズの鉄の塊は一撃じゃあ敵しいかな…

「ふう…」

息を限界まで吐いてから

「すう…」

肺に一杯になるまで吸い込む。

「つつつつ…」

全身が痛くなるまで体を捻る、背骨が軋む…筋肉が悲鳴を上げる、

だがまだ捻る捻る捻る、こうして溜めたバネを…

「アイアンツ…！」

特殊な呼吸法と気合いの言霊と共に…

「テンペストオ…！」

一気に解き放つ、クルスト流：出来てから僅か百年程の剣術ではあるが四代の天才が戦場で鍛えあげた究極の無形の剣、形は適当、振り方も適当…だがクルスト一族特有の圧倒的計算能力により撃ちだされる一発一発の剣戟は防御不能の素人剣術：その内の一つたるアイアンテンペストはまさに名の通り鉄の暴風となつて相手を粉微塵に打ち砕く！！

秒間二百五十発の鉄の暴風はあっさりとギーシュの鋼鉄の乙女を無残な鉄くずに仕立てあげた。

「くっ！」

ギーシュがこちらを忌々しそうに見ている、恐らくあれがギーシュの奥の手だったはずだ、そして奴の魔力はカラ…さあこれからどう出るギーシュ。

「…僕の負けだ」

ギーシュは杖を地面に捨て膝をついた、昼間の決闘の決着は確かにここについた、僕は剣を元々戦闘服に着いている皮の鞘にしまいギーシュに近づくと。

「僕の名前はアデル、アデル・M・クルスト、君は？」

そう言い放つとギーシュはキョトンとした顔をした、そんな顔をしたギーシュを尻目に彼の杖を拾う。

「……ギーシュ・ド・グラモンだ」

名を深く心に刻み込み杖を彼に返す。

「いい勝負だった、だが君の名前と御先祖様が築いた名誉に誓つてルイズを馬鹿にした事とエルザを苛めた事を二人に謝罪しろ」

「…解った」

ギーシュは困ったように笑ってそう言い放った、これでようやくこいつもすつきりするだろう…

「ん」

頷いて踵を返す、とりあえず今宵かぎりの寢床に帰ろう…帰ったらルイズ許してくれるかなあ…くれないよなあ…一晩たったら日本人特有の外交工作に移ろう…そうDO GE ZAだよ。

…とは言ってもこつちで土下座なんて通じるはずもないしなあ、どうしようか、まあなるようになると思いたい。

「で…エルザ、君はいつまで着いてくるの？」

「え？迷惑？」

キョトンとした顔をしゃがった、ついて来られても適当なシエルターしかないし歓迎する物もないから困っているんだけどな…それでもエルザは着いてくる、一体なんなんだろう。

「ルイズちゃん、いますか？」

カトレアの妹君、ルイズが居る部屋の扉をノックする。

「誰よ…って一葉じゃない、どうしたのこんな夜遅くに」

不機嫌そうな顔が一気に明るくなる、部屋を見渡すとアデルがない…どうやらあの馬鹿弟子はどこかをほっつき歩いているようだ、夜遊びなんて教えた覚えはないが……恐らく兵隊時代に覚えたのだらうと納得する。

「力不足に悩むルイズちゃんにちょっととした秘儀を教えとこうと思いまして、ちよつと上がらせて貰っていいですか？」

ルイズはまた何か編み物を教えて貰えるのかと思ったのか喜びながら部屋にあげてくれた…残念ながら今回は戦いの秘儀なのだ、編み物の師匠は今日はお休みだ。

「えつとまずこれを」

自分が嵌めている腕輪と同じ物をルイズに渡す。

「これは？」

受け取った腕輪を眺めて頭にクエスチョンマークを浮かべるルイズ、編み物だと思っていたみたいだ。

「私の宝具…の模造品ですね、効果はさして変わりません。あ、それを着けた腕でアデル殴っちゃだめですよ、宝具が誤作動しちゃうですんで」

大変な事になりますよ…と凄んでみるとルイズは青い顔をした、大変な事になるにはなるが恥ずかしいだけで危険性はほぼゼロなのだけど脅しておく、女の子には大変だから。

「その宝具の名前は私<sup>アクチベーションオーケストラ</sup>だけの交響楽団直接的な戦闘能力はゼロですけど使い方を間違えなければ無敵の力を発揮します」

なんて指を振りながら言ってみたらルイズは目を輝かせた、そうだよ名前だけはカツコイイよね。

「使い方は至って簡単です、腕輪の宝石を押すだけ…するとあら不思議、きらきらり〜んと一瞬で…」

きらきらり〜ん。

どうやら説明されている最中にスイッチを押したようだ、ルイズが輝いて空中でクルクル回っている。

「ん…？な、ななななななな…なんじゃこりゃあああああああああああああああ！？」

そして自分の姿を見て乙女にあるまじき悲鳴を上げた、説明途中で変身するから…アイドルのようにひらひらのスカート…というかデフォルメされたドレスなのだ、私のは真っ黒なゴシックロリータドレスだった<sup>が</sup>…ルイズのは露出が無駄に多いピンクと白のロリータドレスだった、彼女の手にはマイクと呼ばれる拡声器、言うなればこの宝具…アイドルになれちゃう宝具なのだ。

「その状態で歌うのがその宝具の真価なんですよ、我希望ノ偶像ト成リテ崇拜ヲ集メ士氣トシテ返サン、勇ましく歌えば味方の身体能

力と士気を上げる事も出来るし…我恐怖ノ偶像ト成リテ畏怖ヲ集メ  
混乱ヲ招カン、驚々しく歌えば敵に恐怖を抱かせ敗走させる事も出  
来ます。私の世界のプロイセンという国で平和の聖女と呼ばれた方  
が700年前に使つてた由緒正しい宝具なんですよ」

「これが!？」

「それが、です」

信じられないだろうが…事実なのである、これでポーランドを無  
血で追い返した実績があるのだ、平和の聖女は結局異端審問で殺さ  
れてしまったが…生きていたのなら多少違う世界になつていたはず  
だ。

「そ、そうなのね…でもはずかしいわ」

衣装を見ながらルイズは頬を朱に染める。

「慣れれば楽しいですよ、よいしょ、きらきらり〜んっ」と

自分も変身してみる、まずは実践して教えてみせねば…世界第二  
次大戦の名将山本五十六もそんな事を言っていたような気がする…  
そういえば英霊の座で会つて手合わせした事あるなあとぼやく、ゼ  
口戦と97式が山のように飛んできて空を大和と長門と武蔵が支配  
し大昔の英霊化した異能者達が山のように襲つてきたと身震いする、  
勝敗?勝てたと思います?一対五十三万ですよ陸戦戦力だけで…山  
本五十六元帥、空母打撃戦術と陸海合同戦術を生み出し人間で異例  
の將軍になつた男…おまけに幾多の人類からの崇拜で異能者と互角  
に戦えるまでの神格を得ている。

さあそれより歌つてみせようか…曲は…そうですね十八番の無敵  
進撃マーチでいいかな。





あれと指差されたのは壁……なんだ壁でも迫ってきているのか？と思ったら歌が始まった……甘ったるいカステラのような声……ルイズじゃないか、しかも結構な音量だ……静かな曲だが沸々と心の奥底から力が沸いてくる……ついでに野郎どもの歓声が聞こえた。

「静かな曲ばかりなので安らかに寝れるかと思ったら怖くなったり嬉しくなったりムカついたりして寝れないんです！！なんとかしてください！！」

もう深夜だもんね……深々とシエスタに頭を下げて部屋に突入する……間違いなくこれは宝具私だけの交響楽団の力……精神がぶっ壊れないようにしつかり気を保って部屋に飛び込んだ……そこは正に武道館だった……一千万人クラスのライブだった、僕はあっさり飲まれた、終わり。

第四話後篇：ギーシュとゼロの歌姫（後書き）

最近時間ないよ、仕事忙しいよ、仕事やりがないよ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8107t/>

---

ゼロの使い魔の世界に英雄が生まれるようです

2011年10月28日13時21分発行